

## 第6篇 出土遺物

### 第1章 出土遺物

2 遺跡の整理基本は、読者に対し遺物相を数量で報告すること、当センターおよび当団での確実な遺物数量把握を行なうことを念頭に置いたが、県立歴史博物館保管の上野国分尼寺資料平箱21箱、二寺中間地域資料5箱、2 遺跡併記の1箱については時間的都合により、数量化できなかった。当センター保管資料では上野国分尼寺は、深いパン箱79、同浅い2箱、二寺中間地域は深いパン箱21、同浅い3箱であった。センター資料の数値は分別後のことであり、それ以前は、上野国分二寺および隣接地の国分寺を冠する遺跡名または調査名に当報告の2 遺跡のほかに上野国分僧寺域縁辺の調査(1974年調査－町道拡幅)、上野国分寺隣接地城発掘調査(1978年調査－国分僧寺の史跡地内の宅地買収、その転居先の現状変更調査)、上野国分僧寺・尼寺中間地域(1980～1984年調査－関越道新潟線)、合計5 遺跡に相当する遺物資料が存在していた。それらは、収蔵庫の収蔵量制約や合理的配置、報告書作成の移動が行なわれた中で、前出4 遺跡は当センター成立前代の資料であり群馬県教育委員会文化財保護課(前橋市文京町)分室から移動したもので、当報告の2 遺跡の資料は1973年に文化財保護室時代から継承された県庁内文化財保護課分室から文京町分室へと引越されている。歴史博物館資料は文京町分室の段階に、歴史博物館構想が具体化し博物館準備室が移管決定された資料であった。この複雑な資料移動を知る当センター職員は少なく、歴史博物館でも当初からの直接関連職員はない。今回の整理は、混沌にも似た状態にある資料を分別する作業から入ったが、当センター資料はパン箱積上げ内の混同はあったものの、単一の箱内が複数遺跡という混乱はなかった。しかし、県立歴史博物館資料については箱名標記、遺跡名表記は明確ではなく、単一の箱内も尼寺、二寺中間地域資料、国分寺周辺地の既出(寄贈か)資料との間に混乱が起きていた。管理はかくあるべきという末だ基本理念を欠いていると見受けられたこと、また歴史博物館の初期常設展示中の上野国分寺の軒を模した復元屋根の留材に用いられたウレタン接着樹脂と針金(写真15・16など)などは歴史博物館移管資料であっても痛ましいと感じる得ないものであり、文化財保護の視点で古代遺物は捉え、扱うべきであろう。さらにその意味では同一事業、同一遺跡出土資料の分離管理は、遺失物としての遺物の保管義務や遺物の平等性が問われる所以あり、基本的な形として一括管理とすべきである。

上野国分尼寺資料は当センターに15,124点があり、瓦類12,152(1,014kg)、土器類ほか2,972点。その内訳は須恵器1,088、土師器1,269(藤岡製48)、灰釉陶器26、繩文18、鉄製品22、鉄滓とその関連138、羽口6、砥石1、壁体・粘土塊23、土器の円形加工1、石臼1、石1。中世遺物は66点で、焼締陶器11、同軟質陶器39、同土師質土器11、同磁器1、同その他4。近・現代遺物に84点、陶器42、磁器3、軟質陶器6、焼締陶器2、その他1、近代瓦30であった。古代瓦については考察の項を参照されたい。

上野国分二寺中間地域は167・168頁の捨遺とした遺物群を含め、5,452点があり、内訳は古代瓦1,704、古代～中世瓦76、土師器1,236、須恵器1,608、灰釉陶器45、土師質土器268、繩文68、鉄製品13、鉄滓とその関連69、羽口11、砥石4、壁体・粘土塊0、土器の円形加工1、石46。中世は121点あり、中世焼締陶器27、同軟質陶器45、同土師質土器46、同中国磁器1、古銭3。近世・近代は近世以降陶器4、同磁器3、同陶・磁器5、同軟質陶器22、近代瓦3であった。他に木炭片7がある。

なお軒先瓦は、瓦当面を残存する個体の統てを、当センター資料、博物館資料、ともに掲載した。

## 第2章 遺物観察

遺物の観察は観察表の作成時ばかりでなく、分類仕分け作業の段階から既にはじまっており、実測図の描写と観察表内容とは一致している。実測図は土器類を1:3で、瓦類に1:5を用いた。それを除く変則的な縮尺は縮少値の数字、または縮尺を図の傍に示した。実測は三次元電子実測機（機械名称スリー・スペース）班と整理班による手実測との併用で、その区分は土器の場合、正立もしくは倒立しうる大きさの個体、瓦の場合2辺を有するか大形破片に用いた。実測図は整理担当（編者）とが作成し、瓦類の大形片を除き他を大幅な加筆か鉛筆トレースを整理担当が行ない、統いてインクトレース（淨書）の工程を踏んだ。

遺物実測図の表現法は、実線中軸は土器の四分割実測を行ない得る直実測の個体に、1点鎮線は土器残存量の不足から回転実測した個体を示す。割口延長の破線は通常の場合、想定であるので破線2単位でそれを示し、それ以上延びている場合は実測の分割位置とは別に残存個所があつて、それを用いて補なった。外形線ほか形を決める線は、主体を実線で、補助を細線で表現してある。器壁断面中に粘土紐作痕と粘土走行を捉えたが、その際3種類の表現を用いた。細線は明らかに粘土紐の単位や粘土板接合の単位がしっかりと見える時、破線は推定される時、点描は接合面と明確に認定できないながらも、最少限、粘土走行は捉えたつもりである。多くの場合は点描と細描とを併用した表現を用いており、その意味は、粘土紐の単位はある程度、観察し得たものの部分的には判然としない個所を含むことの意味である。または土器部中に型膚を認める場合は、接合線が描かれても紐作りとは限らず、粘土塊の接合面の時もある。瓦断面の側面部のケバ線は、箇削による面取端を表わし、須恵器坏のケバは、水挽成形時の挽出し部である。土器の横拂、拂の上下端は、破線様に途切の隙間を入れ、轆轤目も同様に用いた。箇削や剤を示す線は1点鎮線を用いたが、矢印は、夾雜物の抜ける場合と噴い込む場合の両方を捉え、大多数側を示し、移動の方向である。必要に応じて底外側平面、見込側平面図を作成した。造形表現が必要な際には点描図を加えた、光源は右上45°方向である。なお図版の版下は2倍図版のため1:3なら67%の縮図がトレース原図である。

拓本については、二つの意味あいから、拓影図を貼付した。一つは文様・技法痕や整形状態・自然の凍ハゼなどの特徴を捉える時、二つめは器面全体の質感を表現するためである。

観察表は瓦類を除き、図版順に作成してある。瓦類は種別と分類にのつとり、類別単位で扱った。項目中の図・写真番号は一致する。出土位置は本来であれば一覧表中に記入すべきであるが、2遺跡の遺物取り上げは複数の調査区名称、接合による出土地の複合化などがあり、土器注記のみの単純な状態ではなかった。そのため、図版作成の時点より、観察表中に長文の出土地表現を行なうことは無理であると判断されたため、実測図傍に出土地を場合によって明記し、観察表には最少限の表現を行なった。出土遺物は記録保存図・出土状況写真・遺物注記の3者の照合を前提として行なった。器種名称は、古語名称を主とし近代以降の名称を從としたが整然とした分離はできず混用もある。量目欄は、古語であれば度目と表現しなければならないが、實用に習い量目とした。胎土・焼成・色調と摘要欄については、胎土は含まれる夾雜の鉱物・粒子などを捉え、肉眼による製作地の推定を備考欄に記入したが、1979年から始めた胎土分析約1000点の結果を踏まえたことと、県内各窯跡群の採集資料に基づく。焼成は種単位で軟・並・硬・（焼締）に分けた。

そのほか被熱・凍ハゼ（焼成時の石ハゼは表現していない）などの風化についても観察し、顔料・漆・油煙の付着は備考欄に記入した。

## 上野国分尼寺跡

図 番 号	種 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第7図1 写真図版15	壁体 炉材か	S 1	長径5.1	全体はやや灰色を呈する還元気味で、一面は高火度の被熱のために風化している。炉の壁体か。	
同図5 写15	加工石材	S 1	厚2.4+α	基壇化粧石材を思わせる。加工面は削りを主としたと思われるが全体が風化し、不明である。	流紋岩質凝灰岩。
同図6 写15	加工石材	S 1	厚1.8+α	基壇化粧石材を思わせる。加工面は削りを主としたと思われるが全体が風化し、不明である。	流紋岩質凝灰岩。
第11図3 写真図版16	加工石 材	金堂中間	径(6.9)	安山岩質凝灰岩～ディサイト質凝灰岩。柱状をなし。外面は風化気味に消耗あり。石材か、特殊造形品。	石材名は摘要項。
同図4 写16	加工石 材	金堂中間	厚19.5+α	電芯材か。全体はやや粗粒で、風化があり、表面整形状態は不明である。	ディサイト質凝灰岩。
第12図6 写真図版16	加工石 材	S 3	厚2.1+α 長6.3+α	基壇化粧石材を思わせる。加工面は風化し不明瞭である。大形の流紋岩質凝灰岩の加工は削を主としている。	流紋岩質凝灰岩。
同図7 写16	粘土塊 漆喰	S 3	厚2.7+α	建築物壁体と思われ、片面に白色の漆喰付着。漆喰の残存は0.3～0.5mm前後と薄い。内面は褐色に酸化発色し、混入物として1cm内外のスサを多く見ることができ、金堂壁面に内装、莊嚴として加飾されたことの証。	分析化学分析項参照。
同図8 写16	粘土塊 漆喰	S 3	厚1.8+α		化学分析項参照。
第16図3 写真図版17	焼成陶 器中形	S 5	体部片	緑。白色鉱物含。にぼ い赤褐色。 作用が断面に見える。	常滑焼。
第22図18 写真図版20	壁体	S 7、不詳	厚4.4+α	全体は還元気味で灰色を呈す。器表および割口にスサが混入され、1cmを超えるものもある。剖体か建築物使用か不明。	
第23図19 写真図版18	鉄製品 釘	S 7、3	長11.4	打返し、折曲げの頭部で焼成化粧状に発達するとの、直交方向の割れがあり、古代鉄を思わせる。	
第33図1 写真図版23	須恵器 腰附环	N 2	脚部片	軟。微。灰褐色。 全体は中性稍的な発色で、須恵器生産地の製品。質は軽い。	
同図2 写23	須恵器 羽釜	N 2	口縁部片	軟。含。にぼい褐色。 酸化気味であり、口縁部は大きく内縮する。	吉井製か。
同図3 写23	須恵器 埋甌か	N 2	体部片	硬。微。暗灰色 体部外面にカキ目があり、内面にも織維条痕あり、贈入とは東海地方か。	搬入か。
第34図14 写真図版24	粘土塊 漆喰	N 2	厚2.4+α	酸化。淡灰色。スサ入る。 何かを造形したらしく、丁寧な面整彫形が見られる。塑像も可能性あり。	
同図15 写24	粘土塊	N 2	厚2.1+α	還元気味。スサ入る。質感軽い。	
同図16 写24	粘土塊	N 2	厚2.1+α	酸化気味。スサ入る。質感の質感は前2点に似る。性格は同様。	
同図17 写24	石製品 石鉢	N 2	口径(35.4)	上野地域の14世紀頃、石製の懶鉢が盛行する。本例もその一つで、内面やや磨耗、外面に口縁平縁部に石材加工痕あり。	粗粒安山岩。
同図18 写23	軟質陶 鉢	N 2	底径(12.0)	軟。含。黒褐色。質感重い。 底面の粘土板、体部紐作痕あり。外彫成形の凹凸あり。中世。	乗飛製。
同図19 写23	軟質陶 盤形か	N 2	体部片	軟。含。焼。灰色。質感軽い。 内・外面に回転条痕あり。器面全体は滑らかである。	製作地不明。
第36図1 写真図版24	不明 不明	N 6	体部片	並。微。にぼい黄褐色。 土師器、土師質であり、焼物種不明。 質感軽い。	土師器、土師質であり、焼物種不明。 割口に紐作痕あり。
第37図10 写真図版24	軟質陶 鉢	N 6	口縁部片	軟。含。角閃石多。にぼ い橙色。	洪積台地粘土質。
同図11 写24	焼成陶 器中形	N 6	体部片	緑。含。灰オリーブ色。 内・外面に紐作痕あり、割れ口は消耗している。	常滑焼。
同図12 写24	焼成陶 器中形	N 6	体部片	焼締。白色鉱物含。にぼ い黄褐色。	内・外面に紐作痕あり、割れ口は消耗あり。外面上部は一部整形面を残し、いく分丸みを帯びる。スサ入る。
第39図1 写真図版24	粘土塊	N10	厚1.8+α	スサ。シリ質。酸化。 淡橙色。質感軽い。	
第40図1 写真図版25	土師器 环	講1923	口径(18.1)	硬。微。橙色。シルト質。 体部外面鋸削。口縁部の内・外面横擦あり。部分的に削離あり。	藤岡製。
同図2 写25	土師器 环	講3302	口径(11.8)	軟。含。橙色。 口縁部の内・外面横擦あり。体部外	
同図3 写25	土師器 环	講1918	口径(11.2)	軟。にぼい橙色。 口縁部の内・外面横擦あり。体部外	
同図4 写25	土師器 环	講ト3	口径(11.0)	軟。微。にぼい橙色。シ ルト質。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部外	

第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	拍土・焼成・色調と摘要	備 考
第40図5 写真図版25	土師器 环	講3302-A、 講へ IIへ4～へ5	口径(11.8) 残存径(11.8)	並。微。橙色。 体部外側荒削。内面の器面滑らかで丸底となる。	
同図6 写25	土師器 环	講へ	口径(12.4)	硬。微。橙色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方型削。以下荒削。	
同図7 写25	土師器 环	講1917	口径(12.2)	硬。微。にぶい橙色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方型削。以下荒削。	
同図8 写25	土師器 环	講1922	口径(13.6)	硬。含。明褐色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方型削。以下荒削。	
同図9 写25	土師器 环	講1917 試掘溝底張部	口径(11.2)	硬。微。橙色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方型削。底面荒削。	
同図10 写25	土師器 环	講3302	口径(13.0)	硬。にぶい橙色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方型削。底面荒削。	藤岡製。
同図11 写25	土師器 环	講1917	口径(13.2)	軟。微。橙色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方型削が型帶にまでおよぶ。	
同図12 写25	土師器 环	講3302	口径(16.4)	硬。含。にぶい褐色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方型削。	
同図13 写25	土師器 柑	講3302	頸部片	硬。微。橙色。 内面に暗紋状の条痕。外面にもわずか入る。胎土硬調。	
同図14 写25	土師器 台付甕	講1918	脚部片	軟。微。橙色。 外面底に微妙付着。割れ口に接合面が見える。	
同図15 写24	土師器 台付甕	講II1917	脚端径(8.6)	硬。微。にぶい橙色。 脚部の内・外面に横擦。端部はやや薄くなりながら尖る。	藤岡以南製。
同図16 写25	土師器 台付甕	講1917	脚端径(9.6)	軟。微。にぶい黄褐色。 脚部の内・外面に横擦。脚部の肉厚はやや厚い。	藤岡製。
同図17 写24	土師器 台付甕	講1918	脚端径(9.8)	硬。微。にぶい黄褐色。 外面に刷毛目入る。脚端部内面は折り返し。部分的に紐作痕あり。	
同図18 写25	土師器 小型甕	講1922	口径(13.4)	軟。微。青母。にぶい橙色。 口縁部の内・外面横擦あり。頭部に紐作痕あり。体部外側荒削あり。	藤岡製。
同図19 写25	土師器 台付甕	講1918	口径(15.2)	硬。微。にぶい黄色。輕 い。	口縁部の内・外面荒削。頭部に刷毛目入る。全体に硬調。
同図20 写25	土師器 甕	講3302	頸部径(18.2)	並。含。淡褐色。 口縁部の内・外面横擦。外面頭部以下荒削あり。	
同図21 写25	土師器 甕	講3307	口径(23.4)	軟。多。太い針状物買入。 にぶい橙色。	口縁部の内・外面横擦。胎土中に針状物買入るが南北比より太く短い。 埼玉県製。
同図22 写25	土師器 甕	講1922	口径(18.6)	並。青母。にぶい橙色。	口縁部の内・外面横擦あり。頭部以下荒削あり。
同図23 写25	土師器 甕	講17	口径(18.4)	硬。含。にぶい橙色。	口縁部の内・外面横擦あり。頭部に紐作痕あり。
同図24 写25	土師器 甕	講17	口径(19.4)	並。含。にぶい橙色。	口縁部の内・外面横擦あり。頭部以下荒削あり。
同図25 写24	須恵器 蓋	講II3302B	口径(14.0)	軟。黒色粒粘。灰白色。 内・外面に織籠目があり。上方は織籠右回転の荒削あり。	秋間製。
同図26 写25	須恵器 蓋	講1917AW 試掘溝	擴部径4.2	絹。白色粒微。灰白色。 内面に織籠目あり。外面上方は織籠右回転の荒削あり。	乗附製。
同図27 写25	須恵器 蓋	講17	残存径(12.8)	絹。白色粒微。灰白色。 内面に織籠目あり。外面上方は織籠右回転の荒削あり。	東附製。
同図28 写25	須恵器 蓋	講02	口径(20.8)	絹。白色粒微。微。灰色。 内・外面に織籠目あり。外面上方は織籠右回転の荒削あり。	乗附製。
第41図29 写真図版25	須恵器 环	講12	底径6.2	軟。微。灰白色。 底面織籠右回転糾切。内面底に織籠目あり。体部外側滑らか。	藤岡以南製。
同図30 写25	須恵器 环	講1922	底径(7.2)	絹。微。灰白色。 内面底に織籠目あり。外面上底糾切あり。体部外側滑らか。	秋間製。
同図31 写24	須恵器 环	講17	底径(6.8)	軟。微。灰白色。 外底織籠右回転糾切。内面底織籠目あり。体部外側滑らか。	秋間製。
同図32 写24	須恵器 环	講1918	底径(6.2)	軟。微。灰白色。 外底織籠右回転糾切。内面底、体部外側織籠目あり。	秋間製。
同図33 写25	須恵器 环	講17	口径(11.8)	軟。微。灰白色。 外底糾切。内・外面に織籠目入るが、内面は滑らか。	乗附製。
同図34 写25	須恵器 环	講17	底径(7.4)	軟。微。青母。にぶい橙色。 外底糾切。内・外面は織籠目少なく滑らか。	藤岡以南製。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第415335 写真図版25 写25	須恵器 壺	講3302	底径(7.0)	軟。微。にぶい黄褐色。 底面輪縁右回転糸切。体部外面、内面底に輪縁目あり。	秋間製。
同図36 写25	須恵器 壺	講3302	底径(7.0)	綿。微。灰白色。 底面に糸切あり。体部の内・外間に輪縁目あり。	秋間製か。
同図37 写25	須恵器 壺	講1917	底径(8.4)	軟。微。灰色。 底面に糸切。内面底に輪縁目。体部の急な立ち上がり秋間窯跡群特徴。	秋間製。
同図38 写25	須恵器 壺	講17	底径(6.8)	硬。微。灰白色。 底面に糸切あり。内・外面とも輪縁目、自立ず。	吉井製。
同図39 写25	須恵器 壺・塙	講17	口径(13.2)	綿。微。灰色。 口縁部は薄作りで端部で急に厚くなり、埼玉県創の特徴を呈す。	埼玉製か。
同図40 写25	須恵器 転用硯	講II3302 1B	台部径(5.8)	軟。含。灰黄色。 内面は磨耗し、墨痕あり。底面は糸切後、高台貼付。内面底輪縁目あり。	吉井製。
同図41 写25	須恵器 壺	講1918	台部径(6.4)	軟。微。灰色。 底面は輪縁右回転糸切。糸切後、高台貼付。内・外面滑らか。	埼玉製。
同図42 写26	須恵器 壺	講1922	台部径(5.8)	軟。含。灰白色。 高台は貼付。全体的に胎土は粗粒で、肉厚はそのためか。輪縁目少ない。	吉井製か。
同図43 写25	須恵器 壺	講1922	台部径(7.2)	並。含。灰色。 高台は貼付。全体的に肉厚である。外面に輪縁目多い。	
同図44 写25	須恵器 壺	講1917	口径(15.4)	綿。含。灰色。 糸切後、高台貼付。体部外面に輪縁目多い。器内に溝作り。	吉井製。
同図45 写25	須恵器 壺	講1922	残存最大径(8.8)	綿。微。灰白色。 底面回転混削整形。高台貼付。体部・内面に輪縁目未達せず。精作。	乗附～埼玉製。
同図46 写25	須恵器 壺	講3302	口径(21.2)	軟。微。灰色。 体部の内・外間に輪縁目未達。器高、大口径の割りに薄作。	吉井製。
同図47 写25	須恵器 台付瓶	講周辺	脚端部径(8.5)	綿。微。淡暗灰色。自然施。 体部外面に輪縁目、内面はコテ状に見える輪縁目あり。底面回転混整形。	秋間製。
同図48 写25	須恵器 盤	講3302	残存最大径(20.8)	軟。微。灰白色。 内面にカキ目あり。外面の輪縁目目立ず。破片は消耗気味で角とれる。	秋間製。
同図49 写26	須恵器 脚付盤	講1922	脚端部径(11.0)	綿。白色粒微。灰白色。 内・外間に輪縁目あり。器肉の突出し上手である。	岡接黒製。
同図50 写26	須恵器 瓶	講1917	頸部径(6.8)	硬。白色粒微。灰色。 頸部外面に輪縁目あり。器肉は薄作りで、精作。	乗附製。
第42851 写真図版26 高壺	須恵器 壺	講3303	最大径(5.2)	硬。白色粒含。灰白色。 長脚1段透し、2單位か。内面にコチ捺目あり。外面に沈線一条あり。	乗附製。
同図52 写26	須恵器 中形甕	講17	頸部片	綿。微。灰色。 内・外間に輪縁目あり。器肉やや薄く中形甕か。	乗附製。
同図53 写26	須恵器 中形甕	講17	口縁部片	軟。微。灰白色。 口縁部外面に沈線一条あり。内・外に捺目入る。	笠懸製。
同図54 写26	須恵器 瓶・壺	講1917	最大径(24.0)	綿。微。灰白色。自然施。 内・外間に浅い輪縁目入る。外面上方に自然釉かかる。	東海地方兼入。
同図55 写26	須恵器 中形甕	講1918	口径(34.0)	硬。微。灰色。 頸部外面に平行印あり。内・外間に捺目入る。割口に紐作痕見える。	乗附製。
同図56 写26	須恵器 瓶	講1922・1923	体部片	綿。微。にぶい赤褐色。 内面に輪縁目入る。割口に紐作痕見える。径が小さく平底の瓶か。	地方窯不明。
同図57 写26	須恵器 羽釜	講1917	体部片	軟。含。にぶい黄褐色。 外面上に工具による輪縁条痕入る。割口に紐作痕ぐくる。	吉井製。
同図58 写26	須恵器 大甕	講17	体部片	並。含。灰色。 外面上に浅い平行印の擦消。内面に素文当具痕が見え、割口に紐作痕。	吉井製。
同図59 写26	須恵器 大甕	講1918	頸部片	綿。微。灰色。 内・外間に捺目入る。割口に接合状態と紐作痕見え、内面に当具痕。	乗附製。
同図60 写26	須恵器 大甕	講3302	頸部片	硬。含。灰色。 内・外に捺の捺痕が走り、割口に接合状態が見える。	
同図61 写26	須恵器 大甕	講3302	頸部片	綿。微。灰黄色。 外面上に細かな7+α単位の波状紋があり、内面に捺の条痕あり。	乗附製。
同図62 写26	須恵器 大甕	講17	体部片	綿。黒色粒多。灰色。 外面上に平行印入り、内面に素文の当具痕入る。内面に捺の条痕あり。	秋間製。
同図63 写25	須恵器 羽釜	講17	口径(21.0)	硬。微。灰色。 口縁部下外面に輪縁目一条あり。割口に紐作痕見える。	洪積粘土質。
同図64 写25	須恵器 羽釜	講3303	口径(30.0)	軟。旗。灰色。 内・外間に輪縁目入るが、大まかで荒い。内・外面焼される。	藤間以南製。

## 第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第438265 写真図版25	軟陶か 羽釜	調3302	口縁部片	軟。含。にぼい橙色。 大形羽釜片。整形の凹凸顯著。胎土粗質で荒く見える。割口消耗。	藤岡以南。中世か。
同図66 写25	須恵器 羽釜	調17	脚部片	軟。微。浅黄色。土師質。 軽。	内・外側に横擦あり。蹄は貼付。割口消耗。
同図67 写26	須恵器 环	調17	底径(8.0)	軟。微。酸化。土師質。 軽。	底面全面回転削削。底面と体部外面に挽出しの凹みあり。
同図68 写26	須恵器 环	調1917	底径(5.2)	軟。微。浅黄色。土師質。 軽。	底面糸切。内・外側に凹凸少なく、 滑らか。
同図69 写26	須恵器 环・塊	調1922	口径(14.2)	軟。含。にぼい黄褐色。 土師質。軽。	体部外側に輪轍目あり、内面滑らか。 吉井製か。洪積粘土。
同図70 写26	須恵器 脚付环	調3303	体部片	硬。石英含。灰白色。土 師質。	体部外側下方右回転削削。器内は厚 手。内面平滑。
同図71 写26	須恵器 塊	調17	底部片	軟。微。灰白色。土師質。 軽。	内面に輪轍目あり。高台貼付で、薄 い。底面糸切。
同図72 写26	須恵器 塊	調17	高台端部径(6.2)	軟。含。金雲母。灰白色。 土師質。軽。	底面糸切後、高台貼付。体部外側に 輪轍目あり。右回転。
同図73 写26	須恵器 塊	調1922	口径(11.4)	硬。含。石英粒。にぼい 黄褐色。土師質。	内・外側に輪轍目あり。器肉や厚 手。石英粒の交雜目立つ。右回転。
同図74 写26	須恵器 塊	調1922	口径(11.2)	硬。微。にぼい黄褐色。 土師質。	外面に左回転に輪轍目あり。器肉の 取り方は特徴的である。
同図75 写26	須恵器 塊	調17	高台端部径(8.4)	軟。微。金雲母。にぼい 橙色。土師質。軽。	底面糸切後、高台貼付。内面に輪轍 目あり。
同図76 写26	須恵器 脚付环	調ト10	底部片	硬。微。にぼい橙色。土 師質。	底面糸切後、高台貼付。内面に輪轍 目あり。
同図77 写26	須恵器 脚付环	調1912	底部片	軟。微。金雲母。にぼい 橙色。土師質。	底面糸切後、高台貼付。器肉は厚い が類例の多く取り方。
同図78 写26	灰釉陶 皿	調II17A W	口径(18.4)	締。微。灰白色。	内・外側刷毛面に見える釉掛。輪轍 の回転右。体部下半回転削削。
同図79 写26	灰釉陶 皿	調17	高台端部径(6.2)	締。微。灰白色。	施釉部見えず。底面糸切後、高台貼付。 内面滑らか。
同図80 写26	灰釉陶 皿	調17	高台端部径(7.4)	締。微。灰色。	外側高台部に釉およぶ。器肉薄く、 高台小作りで古様である。
同図81 写26	灰釉陶 碗	調17	高台端部径(7.8)	締。微。灰白色。	内面上半に釉あり。外面に釉なく、 高台貼付。
同図82 写26	灰釉陶 碗	調17	高台端部径(7.4)	締。微。灰白色。	外面と内面上半に釉あり。内面に重 燒痕あり。高台貼付。
同図83 写26	近世陶 皿	調3303	高台端部径(7.0)	締。微。灰白色。	高台裏を除き施釉。内面に浅い沈線 と菊花の凹凸。高台貼付。型押不明。
同図84 写25	灰釉陶 碗	調3303	高台端部径(7.4)	締。微。灰白色。	内・外側部上半に刷毛による釉掛目 あり。高台磨削、墨痕、硯に用可か。 転用硯か。
同図85 写26	灰釉陶 碗	調3303	高台端部径(7.2)	締。微。灰白色。	陶質の胎土で古様。内面上方に釉あ り。底面回転削削。
同図86 写26	灰釉陶 短頸壺	調1917BW	口径(12.8)	締。微。灰白色。	外側のみ施釉。県内において灰釉短 頸壺は極少。内面無釉。滑らか。
同図87 写26	灰釉陶 瓶	調1922・1923	体部片	締。微。白色。淡緑色。	胎土は白色に近い。外側のみ施釉。 割口消耗あり。
第51図183 写真図版32	須恵器 円面鏡	調3302	海部片。大型品	硬。微。淡灰色。	圓上方が表面で磨削顯著。墨痕なし。 圓が天地逆ではない。
同図184 写32	土師器 土垂	調1917	長4.5+α	硬。雪母。微。にぼい橙 色。	微細な雪母粒が入り、近接地の製作 物ではない。土垂の形状である。
同図185 写32	加工石 材	調ヘ	厚2.1+α	石材はダイサイト質質灰岩。表面は平ら。 基盤の化粧材とも思える。全体は消耗し、角立ち取れる。	石材種は摘要 へ。
同図186 写32	鉄製品 釘	調1917B W170Aug	長13.5	頭太の釘で、表面は層状の剥離と長辺に直に走る割れは古代鉄 を思わせる。部分欠損はあるが、全長が知れる残存。	
同図187 写32	鉄製品 釘	調1917B W170Aug	長8.6	頭太の釘で、表面は層状の剥離と長辺に直に走る割れは古代鉄 を思わせる。先端が欠けたように思えるが、その場合は旧欠。	
同図188 写32	鉄製品 釘	調1917B M170Aug	長4.2+α	先端は調査時欠損。表面は層状の剥離と長辺に直に走る割れは 古代鉄を思わせる。頭太の釘。	
同図189 写32	鉄製品 釘	調1917B M	長3.8+α	頭部、先部は調査時欠損。表面は層状の剥離と長辺に直に走る 割れは古代鉄を思わせる。	

図番号 写真番号	種形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第51回190 写真図版32 釘	鉄製品	講3302	長6.0+α	頭部、先部は調査時欠損。表面は層状の剥離と長辺に直に走る割れは古代鉄を思わせる。	
同回191 写32	鉄製品 釘	講1917	長5.3.8+α	頭、先部は調査時欠損。焼化は層状剥離と長辺に直に走るクラックから古代鉄を思わせる。	
同回192 写32	鉄製品 釘か	講3302	長3.8	全体に錆びくればあり。欠損なく、釘であれば先を欠き、旧時欠損品。クラックは古代鉄を思わせる。	
同回193 写32	鉄製品 片切刃	講1923	長4.3+α	鋸削は顯著でなく、洋鉄・和鉄・古代鉄・鉄鉢か不明。欠損は旧時。片切刃となる。削刃方は硬調。	
同回194 写32	銅製品 不明	講1923	長2.2	製品のようであるが用途は不明。全体は滑らかであり、焼化は進行していない。	
同回195 写32	土製 羽口	講II1917 AW	長10.2 径 7.2	粗質。スサは見えず、入っても微。黃褐色。	図上方が硅化部。硅化および付着は鋼か鉄か不明。割口にスサ見えず。
同回196 写32	土製 羽口	講1918	径(8.0)	粗質。スサは見えず。橙色。	図上方が硅化部。酸化部は孔部内面に残る。
同回197 写32	土製 羽口	講3302	径(8.4)	粗質。スサ入る。橙色。軽い。	図上方が硅化部。割口に多くスサが見える。
同回198 写32	土製 羽口	講3302	径(7.0)	粗質。スサ入る。橙色。	図上方が硅化部。割口にスサが見える。酸化部分少ない。
同回199 写32	土製 羽口	講へ	小片	粗質。スサ入る。黄褐色。	図上方が硅化部。割口にスサが見える。全体に酸化部分多い。
同回200 写32	土製 羽口	講1918	小片	粗質。スサは見えず。橙色。	図上方が硅化部。割口にスサは見えない。全体に酸化部分多い。
第52回201 写真図版32 炉材か	燧體	講17	長径3.0	還元。淡灰色。やや重い。	スサ入らず、全体岸様となる。還元気味である。
同回202 写32	粘土塊 塑物	講1917	長2.2	スサ。還元。浅黃褐色。	不定方向にスサ入る。酸化気味である。旧状態の残存あり。拓画面。
同回203 写32	粘土塊 塑物	講1917	長径4.6	スサ。酸化。浅黃褐色。	不定方向にスサ入る。酸化気味である。旧状態の残存なし。
同回204 写32	粘土塊 塑物	講1918	長3.1	スサ。酸化。浅黃褐色。	不定方向にスサ入る。酸化気味である。旧状態の残存なし、点縁部。
同回205 写32	粘土塊 塑物	講1918	長2.3	スサ。酸化。浅黃褐色。	不定方向にスサ入る。酸化気味である。旧状態の残存あり。点縁部。
同回206 写32	粘土塊 塑物	講1917	長径3.2	スサ。シルト質。酸化。浅黃褐色。	不定方向にスサ入る。酸化気味である。旧状態の残存あり、点縁部。
同回207 写32	粘土塊 塑物	講1918	長径2.8	スサ。シルト質。焼きれる。黒褐色。	不定方向にスサ入る。焼きされる。旧状態の残存あり。
同回208 写32	粘土塊 塑物	講1922	長径4.0	スサ。酸化。浅黃褐色。	不定方向にスサ入る。酸化気味。旧状態の残存あり。
同回209 写32	鉄滓 椀形	講1918	長径10+α	底面に炉底痕あり。全体は長円形を呈し、長径は15cm前後となり。椀形としては特大様式を呈す。重さはや軽い。	
同回210 写32	鉄滓 椀形	講3302	長径10.0	底面に炉底痕あり。長円形を呈する。長径は10cmで類例の多い大きさ。重さはや軽い。	
同回211 写33	原料鉄 か	講17	長径5.2+α	底面に炉底痕あり。椀形鉄滓の範疇であるが、特に重く原料鉄を思わせる。この状態なら近世にいう鉄材相当か。	鉄材か。
同回212 写33	原料鉄 か	講1922	長径5.2	底面に炉底痕あり。椀形鉄滓の範疇であるが、特に重く原料鉄を思わせる。この状態なら近世にいう鉄材相当か。	鉄材か。
同回213 写33	鉄滓 椀形	講1917	径3.8+α	底面に炉底痕あり。長径は約10cm前後と考えられ、類例の多い大きさ。重さはや軽い。	
同回214 写33	鉄滓 椀形	講1917	長径4.5+α	底面に炉底痕あり。長径は約10cm前後と考えられ、類例の多い大きさ。重さはや軽い。	
同回215 写33	原料鉄 か	講18	長径3.4	底面に炉底らしき痕あり。釘と考えられる鉄製品がぬ込み、再処理の過程を思わせる。重さあり、近世にいう鉄材相当か。	鉄材か。
同回216 写33	鉄滓 不定形	講3302	長辺4.4	底面に炉底らしき痕あり。重さは軽い。形状は椀形ほど質量はない。類品は多くない。	
同回217 写33	鉄滓 不定形	講3302	長辺4.2	不定形の鉄滓で類品は多くない。重さは軽い。軟らかな状態で固化したようである。	
同回218 未掲載	土師質 皿	講3305	底径(5.4)	軟。質母。微。にぶい橙色。	底面に左回転系痕あり。内面縫繩目あり。
同回219 未掲載	土師質 皿	講3302	口径(11.2)	軟。シルト質。灰黄色。	底面に糸切り。体部に少ない縫繩目あり。器肉は厚い。

## 第6篇 出土遺物

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第52回220 未掲載	土師質 皿	講3302	口径(11.8)	軟。シルト質。灰白色。 底面に糸切痕あり。体部に少ない輪轂目あり。	中世。15世紀。
同回221 未掲載	軟質陶 壺	講1923	底径(13.6)	硬。微。灰色。やや燒結 気味。	東附製。 稀少種。
同回222 未掲載	軟質陶 鉢	講3302	口縁部片	軟。微。にぼい黃橙色。	口縁部の内面に返りあり。内面の磨耗は高位置のため見えず。割口丸い。
同回223 未掲載	軟質陶 鉢	講3302	底径(11.6)	軟。含。灰色。	内面に顯著な磨耗あり。体部外面には成形時の凹凸あり。
同回224 未掲載	軟質陶 鉢	講3302	底径(11.6)	硬。燃。灰色。	内面に磨耗あり。体部外面は工具条痕。輪轂右回転。割口に紐作痕。
第53回225 写真図版33	焼締陶 鉢	講3302	口径(30.8)	締。石英入、含。にぼい 赤褐色。	口縁部の内・外面に横撫痕あり。内面は磨耗している。割口に紐作痕あり。
同回226 等33	焼締陶 大甌	講1922	体部片	締。含。にぼい赤褐色。	内面・割口に紐作痕あり。外面に刷毛目条の擦痕あり。
同回227 等33	焼締陶 中形甌	講1918	体部片	締。微。酸化。白色。	内面に工具条痕あり。外面に擦痕あり。割口の磨耗は少ない。
同回228 等33	焼締陶 大甌	講1922	体部片	締。含。にぼい橙色。	内・外面に擦痕あり。割口の磨耗は少ない。
同回229 等33	焼締陶 大甌	講3302	体部片	締。含。にぼい赤褐色。	内面に回転擦痕、指の圧痕あり。割口の磨耗は少ない。
同回230 等33	焼締陶 大甌	講3302	体部片	締。含。灰白色。自然釉。	内面・割口に紐作痕あり。外面に自然釉かかる。割口の磨耗は少ない。
同回231 等33	焼締陶 中形甌	講3302	体部片	硬。含。橙色。	内面に回転擦痕。内面、割口に紐作痕あり。割口の磨耗は少ない。
同回232 等33	焼締陶 中形甌	講3302	体部片	硬。微。にぼい赤褐色。	内・外面に擦痕あり。割口ほか全体的に磨耗する。
同回233 等33	施釉陶 鉢	講1917	底部片	並。微。黄灰色。	施釉部の残存なく、鉢部のみ。底面は回転削削されている。
同回234 等33	施釉陶 壺	講1922	体部片	締。なし。灰色。黒褐色の 鉄釉。	外表面のみ鉄釉が施され、内面無釉。 内面輪轂条痕は早くシャープ。
同回235 未掲載	磁器 青磁碗	講17	口径(13.6)	締。なし。白。明淡緑色。 粘手の発色。釉厚い。	古様の青磁片で、粘手に発色し、釉掛はない。胎土白色である。
同回236 未掲載	近世軟 陶焼碗	講1917	口径(33.8)	硬。金雲母。微。にぼい 橙色。	全体に輪轂が利き、薄作である。内・外表面平滑である。底面は石目状。
同回237-1 未掲載	近世軟 陶 鉢	南門11 4301C	口径(34.2)	硬。微。暗灰色。	237-2と同一体か同一種である。 内・外とも僅かかかる。
同回237-2 未掲載	近世軟 陶 鉢	講3302	底径(21.6)	硬。微。暗灰色。	237-1と同一個体か同一種である。 僅かかり、内面に輪轂の工具条痕。
同回238 未掲載	近世磁 皿	講1917	口径(13.0)	締。なし。白色。染付。	山川須の絵付で、内・外面に白磁釉かかる。
同回239 未掲載	近代磁 小碗	講1917	口径(6.8) 高4.2	締。なし。白色。染付。	精製具須による染付で、高台端部を除き日磁釉がかかる。
同回240 未掲載	近世陶 鉢	講1922	口径(22.4)	締。なし。茶褐色。三島 手。	白土を象嵌し、内・外面に透明釉を施す。釉は浸し掛である。
第54回 1 写真図版33	須恵器 皿	3201-1	口径16.2 高 2.5	締。微。灰色。	底面は右回転糸切後周辺を回転糸切剤。器内薄く、内・外面輪轂目多い。
同回 2 未掲載	須恵器 皿	3205-3	口径14.2 高 2.8	硬。微。灰色。	器高は浅く、貼付高。糸切は輪轂右回転。
同回 3 未掲載	須恵器 羽釜	3203-8	口径(23.2)	並。含。明褐灰。	内・外面に輪轂の回転条痕あり。糸切は貼付。輪轂目は早くシャープ。
第56回 1 写真図版33	須恵器 壺	4176-6	口径15.2	並。微。淡灰色。	底面は糸切後、高台貼付。体部外面に輪轂目入る。口縁端部は肥厚する。
同回 4 未掲載	軟質陶 火鉢	4176-17	体部片	並。微。淡橙色。	火鉢の体部片で、外表面研磨。菊文・植物の印花文あり。
同回 5 未掲載	軟質陶 火鉢	4176-17	体部～底限片	並。含。淡橙色。	円形火鉢の体部片で、外表面研磨、菊文の印花文あり。前出より作調古い。
第57回 2 写真図版33	石製品 砾石	南門11 4301C	残存長4.8	欠損部は旧時。小口を除き4面使用。使用の凹溝は丸みをおび、速度の早い研磨力ではない。手グセ少なくやや丁寧な使用。	流紋岩。
第58回 1 写真図版33	須恵器 壺	南門4301A	口径(14.0)	軟。微。灰白色。	底面に糸切痕あり。体部外面に輪轂目あり。内面滑らか。

図番号 写真番号	種形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第61図1 木挽載 内耳鏡	軟質陶器	E 9	体部片	軟。微。黄灰色。 内・外面に回転条痕あり。剥口に紐作痕あり。	洪積粘土。
第62図1 写真図版33	土師器 环	東門4707	口径12.2	硬。微。にぶい黄橙色。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部外面上方削痕、以下手持箇所。	
同図2 写33	土師器 环	東門4707	口径(11.8)	硬。微。にぶい赤褐色。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部外面上方削痕、以下手持箇所。	
同図3 写33	土師器 环	東門4707-7	口径(13.0)	硬。微。橙色。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部外面上方削痕、以下手持箇所。	
同図4 写33	土師器 环	東門4707	口径(15.8)	硬。微。金雲母。にぶい 橙色。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部外面上方削痕、以下手持箇所。	藤間以南製。
同図5 写33	土師器 盤	東門4707	口径(12.4)	硬。微。橙色。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部外下面は鋸削。	
同図6 写33	土師器 环	東門4707	口径(14.6)	硬。金雲母。微。橙色。 口縁部の内・外面に横擦あり。口縁下外側鋸痕。箇所。内面暗文あり。	藤間以南製。
同図7 写33	土師器 环	東門4707	口径(15.6)	硬。微。緻密。橙色。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部研磨。内面暗文3段以上あり。	関西搬入。
同図8 写33	土師器 塊	東門4707	台部径(12.4)	硬。雲母含。微。緻密。 橙色。 体部外下面下方回転箇所。内面放射状 と螺旋状暗文。高台は貼付。	関西搬入。
同図9 写33	土師器 环	東門4707	口縁部片	硬。微。橙色。 外表面口縁に横擦。以下箇所。内面暗文 状研磨あり。	古墳時代中期。
同図10 写33	土師器 塙か	東門4707	口縁部片	硬。微。橙色。 内・外面ともに暗文状研磨あり。器身 は薄く、円形か。	古墳時代中期。
同図11 未掲載	土師器 高环	東門4707C	口径(18.0)	硬。微。にぶい橙色。 高窓の内・外面に暗文状研磨あり。脚部 との接合は出柄状。	古墳時代中期。
同図12 写33	土師器 鉢か	東門4707	口縁部片	軟。微。橙色。 体部外表面は鋸削あり。内面に暗文状 研磨あり。	藤間製。古墳 時代。
同図13 写33	土師器 小形甕	東門4707	口径(11.0)	硬。微。褐灰色。 口縁部の内面に横擦あり。器身全体 が磨耗している。	
同図14 写33	土師器 長甕	東門4707	口径(22.0)	硬。微。暗褐。外表面削さ れる。	口縁部の内・外面に横擦あり。器身 全体磨耗している。
同図15 写33	土師器 甕	東門4707	口径(22.0)	軟。含。雲母。にぶい褐 色。 笠形。	藤間製。
第63図16 写真図版33	黒色土 器 直	東門4707	筒部径1.8	軟。微。粗質。黑灰色。 燒の黒化。	外面全体に研磨あり。宝珠形状は渠 内としては異風。
同図17 写33	須恵器 蓋	東門4707	筒部径4.4	絹。微。灰色。	大きなボタン状構造。構の端部はや 丸い。機織回転右。
同図18 写33	須恵器 蓋	東門4707	筒部径(4.8)	絹。微。灰白色。	大きなボタン状構造。構の端部はや 丸い。機織回転右。
同図19 写33	須恵器 蓋	東門4707	筒部径(1.6)	硬。微。にぶい赤褐色。	内面織籠があり。外表面滑らか。笠懸 しては形異風。
同図20 写33	須恵器 蓋	東門4707	径(13.6)	絹。微。灰黄色。	口縁部形状に特徴あり。器高は低い。 端部はやや丸みおびる。
同図21 写33	須恵器 蓋	東門4707	径(15.0)	絹。微。浅黄色。	口縁部形状はやや尖る。体部外表面 中位に浅い次線模様あり。
同図22 写33	須恵器 蓋	東門4707	径(16.0)	絹。微。灰色。	口縁部端部はやや丸みおびる。外表面 上半は回転笠形。
同図23 写33	須恵器 蓋	東門4707	径(14.6)	絹。微。褐灰色。	口縁部端部は尖る。薄作。外表面上方 に右回転笠形あり。
同図24 写33	須恵器 环	東門4707 No15	底径5.6	絹。微。灰色。	輪縁右回転糸切。全体に滑らか。体 部下半丸みおびる。
同図25 写34	須恵器 环	東門4707	底径(7.0)	軟。微。灰白色。	底面糸切。内面滑らか。大きく直線 的に外傾し、立上る。
同図26 写34	須恵器 塊	東門4707	口径(11.8)	硬。微。灰色。	内・外面に輪縁目あり。体部下半に 丸みをもつ。
同図27 写34	須恵器 塊	東門4707	高台径(6.8)	軟。微。灰黄色。	高台貼付。体部外面に輪縁目あり。 内面は滑らか。
同図28 写34	須恵器 塊	東門4707	高台径(6.6)	軟。雲母粒含。微。暗灰 色。煤。	内面に輪縁目あり。底面右回転糸切 後に高台を貼付。外表面に煤かかる。
同図29 写34	須恵器 塊	東門4707	高台径(6.6)	軟。雲母粒含。微。暗灰 色。煤。	内面は斜落気味。

## 第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第63図30 写真版34	須恵器 壇	東門4707	高台径(7.0)	軟。微。暗灰色。燒。系切後、高台貼付。内面に織目あり。外面上に焼かる。	不明。
同図31 写33	須恵器 壇	東門4707 No.10	高台径(6.6)	硬。微。酸化。明赤褐色。体部外側下半にハゼあり。内面織目あり。高台貼付。底面凹凸面削削。	吉井以南製。
同図32 写33	須恵器 壇	東門4707	底部径6.0	軟。微。暗灰色。高台剥落。底面糸切。体部外側に織目。器内厚い。	吉井製。
同図33 写34	須恵器 壇	東門4707	高台径(10.8)	硬。微。灰白色。高台部分突出し、高台内面回転削削。乗財製。器内は肥厚する。	乗財製。
同図34 写34	須恵器 盤	東門4707	高台径(21.2)	軟。微。灰白色。高台欠失。高台内面回転削削。底面中心側面や器内厚い。	乗財製。
同図35 写33	須恵器 蓋	東門4707	最大径(16.0)	綿。石英粒。多。灰白色。割口に組作り後の突出し長い。体部外側右側回転削削の鋸削目あり。	吉井製。
同図36 写34	須恵器 高杯	東門4707	脚端部径(10.8)	綿。微。灰色。長脚の壊片で、通しあり。端部形狀は特徴的。	秋間製か。
同図37 写34	須恵器 羽釜	東門4707	最大径(28.4)	綿。微。褐灰色。脚部は焼付。色調は酸化氣味であり。直接的な口縁部への立上りは新様。	西毛製。
同図38 写34	須恵器 小形甕	東門4707	口径(23.6)	綿。微。灰色。内・外面上に回転条痕あり。割口はシヤーブ。小形の割りに器内厚い。	乗財以南製。
同図39 写34	須恵器 小形甕	東門4707	口径(25.2)	硬。微。灰白色。内・外面上に回転条痕あり。外表面に纏目。器内は肥厚する。	乗財以南製。
第64図46 写真版33	鉄製品 板状	東門4707	最大長2.7	錆化の状態は層状の剥離少なく錆鉄を思わせる。横断面形は丸みをおびるが、製品用途不明。	
同図47 写34	鉄席 挽形	東門4707	最大径(8.6)	全体形狀を知り得る數少ない個体の一つで、伊底面痕を残す。全体の質量はやや軽い。	
同図48 写33	石製 火打石	東門4707	最大長2.0	一部に原石面らしくは理面を残す。棱部は角ばかりが数多くの打痕によって丸くなり、火打石であることを示す。	石美。
同図49 写34	石製品 石皿	東門4707	最大長19.4	中央に磨耗顯著な凹面あり。その周縁は自然石面らしいが、傷痕や、小打痕のように見える凹みあり。	粗粒安山岩。
同図50 写33	軟質陶 鉢	東門4707	口縁部片	綿。微。浅黄色。器肉やや厚く、地方製としては異形。内面に磨耗あり。	不明製。
同図51 写33	須恵器 磁水注	東門4707	把手片	綿。なし。灰色。暗オリーブ。輪はそろくなく、買入る。色調ははくさず暗い。	龍泉窯。
同図52 写33	施釉陶 灰釉皿	東門4707	口縁部片	口縁部の内・外面に灰釉を施釉。胎土は緻密で瀬戸焼か。	瀬戸焼か。15世紀。
第65図1 写真版34	須恵器 蓋	W5トレー	擴部径4.8	綿。微。灰白色。地方的な大形ボタン状擴で、端部はやや尖る。器内は全体に漆青い。	乗財製。
同図7 写34	軟質陶 内耳鉢	W5トレンチ	口縁部片	割口に耳部挿入の穿孔部がある。口縁部帶有古様。	乗財製。
第66図1 写真版34	土師器 蓋	西門トレー 2401-A	口径(9.6)	硬。微。橙色。口縁部の内・外面に横撫あり。以下外表面削削。	
同図2 写34	土師器 壺	西門トレー 2401-A	口径(12.5)	硬。微。橙色。口縁部の内・外面に横撫あり。直下外表面削削。	
同図3 写34	須恵器 壇	西門トレー 2401-A	高台径(6.5)	軟。微。灰色。高台貼付。割口は全体に消耗している。器内は比較的厚い。	乗財製。
同図4 写34	鉄製品 釘	2401-A	長3.5+α	錆化は層状と、直角方向のクラックがあり古代鉄を思わせる。頭部と先端部は調査時欠損。	
同図10 写34	軟質陶 円形品	2401-A	最大径5.0	軟。微。灰色。中世の内耳網片を擦り、円形加工した個体。内面に内耳の横回転痕あり。	再加工個体。
同図11 写34	粘土陶 塑物	2401-A	厚2.4+α	粗。酸化。輕。割口に小さなスサが見える。拓影図側が旧の面である。塑像か。軽い。	
第67図1 写真版34	須恵器 壇・壇	出土地不明	口径(15.5)	硬。微。緻密。灰色。体部外側に織目あり。内面滑らか。口縁部は特徴的に肥厚する。	埼玉製。
同図8 写34	不詳 小鉢	出土地不明	底径(7.2)	軟。金雲母入。微。淡色。古代か中世遺物か不明。底面に糞痕あり。底面は厚い。	藤岡製。
同図9 写34	軟質陶 鉢	出土地不明	口径(26.8)	硬。微。にぼい赤褐色。片口部あり。どこかの地方窯製で、外表面の条痕や、小形もそのためか。	関東地方窯製。
同図10 写34	軟質陶 火鉢か	出土地不明	体部片	軟。シルト質。胎土灰白。外表面漆黑。近世軟質陶器のように見える。	

## 上野国分寺中間地域

※出土位置の座標名称、注記は記入せず、調査区名称に改めて記入。

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第77図1 写真図版52	須恵器 壺	A 1 区 3 層	底径(5.2)	硬。なし。淡黄色。 胎土は見かけない質感。	乗附~埼玉製 か。
第79図1 写真図版52	須恵器 壺	A 3 区 3 層	高台径(7.0)	綿。白色粒子。微。灰色。 並。金雲母含。微。酸化。黃褐色。	右回転糸切後、貼付高台。器肉は薄い。高台はやや高い。 漢く変化する。脚部片かもしれない。藤岡以南製。 外側にも施。輪縁目シープ。
同図2 写真図版52	土師質 脚付壺	A 3 区 3 層		並。金雲母含。微。酸化。黃褐色。	
第83図1 写真図版52	土師質 壺	A 7 区	口縁部	並。金雲母。小腰多。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。器肉 末野製か。 厚く、須恵器生産末期の製品。
第86図1 写真図版52	灰釉陶 皿	B 1 区 東壁断面	口径(13.2)	硬。なし。灰色。	内・外面に浸掛目あり。底面回転窓 剝。高台貼付。
第90図1 写真図版52	須恵器 壺	B 5	口径(14.0)	軟。微。にほい黄褐色。	外側に多くの輪縁目あり。内面滑ら か。口縁は外反傾向あり。
第96図1 写真図版52	石製品 切石	C 3 区 III	8.5×11.5×6.8 +α	基壇化粒材とも思える切石。各面に削跡あり。欠損は旧時。部分的に被熱を思わせる個所あり。	梯名山二ツ岳 軽石。
第101図3 写真図版52	土師質 壺	D 1 区溝	底径(5.8)	硬。微。淡黄色。	底面に輪縁左回転の糸切あり。内面 に輪縁目あり。
同図4 写真図版52	土師質 壺	D 1 区溝 フク土	底径(7.2)	硬。微。淡黄色。	底面に輪縁左回転の糸切あり。内面 に輪縁目あり。
同図5 写真図版52	土師質 壺	D 1 区溝 フク土	口径12.0	軟。微。シルト質。にほ い橙色。	底面に糸切あり。外体部に輪縁目あ り。
同図6 写真図版52	土師質 壺	D 1 区溝 フク土	口径12.8	軟。シルト質。微。にほ い橙色。	底面に輪縁左回転の糸切あり。体部 の内・外面に輪縁目あり。灯芯油埋痕 火皿。
同図7 写真図版52	燒締陶 壺	D 1 区溝 フク土	体部下半	綿。含。灰赤色。	内・外面に回転の擦痕あり。割口に 常滑焼。
同図8 写真図版52	燒締陶 壺	D 1 区溝 フク土		綿。含。灰褐色。	内面と割口に紐作痕あり。内面に回 転の擦痕あり。
第102図9 写真図版52	土師質 皿	D 1 区溝 フク土中	口径7.6	軟。微。淡黄色。	底面に輪縁左回転の糸切あり。内面 に輪縁目あり。
同図10 写真図版52	軟質陶 火鉢	D 1 区溝	口縁部	硬。微。灰褐色。	角形火鉢の口縁部で、口縁部直下 外側に4~5の珠文帯。荒磨あり。
第104図1 写真図版52	須恵器 壺	E 2 区カマド	底径(6.0)	軟。石英粒。多。橙色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。内・ 外側に輪縁目あり。
同図2 写真図版52	須恵器 壺	E 2 区カマド	口径14.0 高5.2	硬。雲母含。微。にほい 橙色。	底面糸切。内・外面に輪縁目あり。 輪縁右回転。
同図3 写真図版52	土師器 短頸瓶	E 2 区	口径12.8	硬。微。にほい褐色。	体部上半に輪縁目あり。以下外面に 窓削りあり。内面滑らか。須恵器未業。
同図4 写真図版52	須恵器 羽釜	E 2 区カマド	口径(22.6)	硬。金雲母。微。浅黄色。	割口に紐作痕見える。内・外面に回 転の擦痕あり。
同図5 写真図版52	灰・須 小瓶	E 2 区カマド	最大径(5.6)	綿。なし。灰白色。外面 粒。	須恵器が灰化か不明。外面に灰粒が およぶ。体部内・外面に輪縁目あり。
同図6 写真図版52	繩文 鉢	E 2 区カマド	口縁部	軟。白色粒。石英粒含。 にほい褐色。	内面に研磨痕。外面に円形剥離の列 点連続。体部側に繩文と沈線区画。
第105図7 写真図版52	須恵器 壺	E 2 区カマド	口径13.0 高4.4	軟。微。淡橙色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。体部 の内・外面に輪縁目あり。
同図8 未掲載	須恵器 壺	E 2 区カマド 内	口径12.8 高4.7	軟。微。淡橙色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。体部 の内・外面に輪縁目あり。
同図9 未掲載	土師質 壺	E 2 区カマド 内	最大径(12.4)	軟。微。淡橙色。	底面に糸切。高台は貼付。体部外 面に輪縁目あり。須恵器生産未業。
第106図3 写真図版52	土師質 壺	E 3 区No21	口径9.8 高3.7	軟。微。淡黄色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。体部 外側に輪縁目あり。須恵器未業。
同図4 未掲載	須恵器 壺	E 3 区東側住 覆土下	口径(13.2)	綿。微。灰色。	高台は貼付。内・外面に輪縁目あり。 器肉は均等に近い厚さで挽れる。
第107図5 写真図版52	須恵器 壺	E 3 区住 床 No 5	口径10.0 高3.1	硬。微。淡橙色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。体部 不明。
同図6 写真図版53	須恵器 皿	E 3 区住 No 1	口径11.6 高2.4	軟。微。淡灰色。	底面に輪縁目あり。体部外側に 輪縁目あり。
第108図1 写真図版53	灰釉陶 碗	E 4 区 3 層	口径(14.2)	綿。なし。灰白色。	体部外側に輪縁目あり。内・外面に 浸掛目あり。

第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第108図2 写真図版53	灰釉陶 壺かく	E 4 区 3 層	高台径(7.2)	縹。なし。灰白色。	内面に釉境あるが掛方不詳。高台は搬入。
第109図1 写真図版53	土師質 ト	E 5 区 南 ピッ ト	底径(5.6)	並。微。浅黄色。	底面に糸切痕あり。輪縁左回転の糸切らしく見え中土師質土器か。
同図 2 写53	灰釉陶 壺	E 5 区床	高台径(5.6)	縹。なし。浅灰色。	内面に釉境あるが輪掛法不明。重焼痕あり。体部外側に回転質痕あり。
第110図1 写真図版53	土師器 壺	E 6 区住ビ ット	体部~底部分	軟。含。橙色。	底面の笠削が見える。内面滑らか。器肉は均質気味に整う。
第111図1 写真図版53	須恵器 壺	E 7 区中央	高台径5.4	並。微。灰白色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。体部秋間製。
同図 2 写53	須恵器 壺	E 7 区中央溝	高台径(5.6)	軟。含。浅黄色。酸化気味。	外面に糸切あり。高台貼付。内面底に輪縁目あり。
第112図3 写真図版53	須恵器 壺	E 7 区北壁	口径(11.6)	硬。微。灰色。	底面糸切後、高台貼。体部外側に輪縁目あり。須恵器未差。
第113図1 写真図版53	土師器 壺	E 8 区	底部片	並。微。淡橙色。	底面に笠削が見える。内面は滑らかで、器肉や厚い。
同図 2 写53	須恵器 壺	E 8 区	口径(10.6)	縹。微。灰白色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。体部外側に輪縁目あり。重焼色変あり。
同図 3 写53	須恵器 壺	E 8 区	体部片	軟。含。橙色。酸化気味。	内面に研削痕あり、内黒処理。体部笠懸製。8世紀。
同図 4 写53	須恵器 壺	E 8 区	高台径(6.6)	並。微。にぶい黄橙色。	底面は回転笠削。高台は貼付。体部の内・外面に右回転の輪縁目あり。
同図 5 写53	須恵器 壺	E 8 区	高台径(7.8)	硬。多。にぶい橙色。	底面に糸切痕あり。高台は貼付。体部の器肉は均質気味に挽出す。
第114図10 写真図版53	須恵器 壺	E 8 区III	口径12.6 高6.0	軟。微。白灰色。	底面糸切痕あり。高台は貼付。体部は内・外滑らか。内面底輪縁目あり。
第115図1 写真図版54	須恵器 壺	E 9 区	底径(7.0)	硬。微。灰色。	内面に硅化物あり、一部珪化。底面は糸切、取瓶に転用か。
同図 2 写54	須恵器 壺	E 9 区往 7	口径(12.8)	硬。微。火薄。灰黄色。	底面糸切後、高台貼付。体部外側輪縁右回転糸切あり。外面に火薄痕あり。
同図 3 写54	灰釉陶 小瓶	E 9 区	最大径(7.4)	縹。なし。淡灰白。	内・外側に灰釉かかる。内面コテの輪縁目。外腹下半輪削。
同図 4 写54	灰釉陶 壺	E 9 区B 壺	高台径(7.0)	縹。なし。灰白色。	内面に釉境があるが輪掛法不明瞭。高台貼付。内面に重焼痕あり。
同図 6 写54	石製品 凹石	E 9 区中間表 土	最大長12.6	凹凸には2種あって、回転質痕と思えるものと、突込み質があり。そのほか周縁は磨耗があり、磨き石として利用。	粗粒安山岩。
第116図7 写真図版54	須恵器 壺	E 9 区III	口径(12.0)	硬。微。灰色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。内・外体部滑らか。高台貼付。
同図 8 写54	須恵器 壺	E 9 区III	口径(12.8)	硬。微。灰色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。高台貼付。体部外側に輪縁目あり。
同図 9 未掲載	須恵器 壺	E 9 区III	口径(12.8)	軟。含。灰色。	底面に輪縁右回転の糸切あり。高台貼付。体部外側に輪縁目あり。
同図10 未掲載	鉄製品 鉢	E 9 区No14住 居	長(7.8)	現品を探し出せず。既報から引用作図した。既報によれば釘状鉄器があるが、形状は小さな鉢と考えられる。	
同図11 未掲載	鉄製品 鉢か 盤	E 9 区No14住 居	長12+α	現品を探し出せず。既報から引用作図した。既報によれば盤状とあり、肯定できるが、先端の断面形状は誤まりで、逆向きか。	
同図12 未掲載	鉄製品 板状	E 9 区No14住 居	長4.8	現品を探し出せず。既報から引用作図した。既報によれば板鉄状とあり、用途不明としている。	
同図13 未掲載	鉄製品 鉢か 居	E 9 区No14住 居	長8.3+α	現品を探し出せず。既報から引用作図した。既報によれば釘状と説明し、用途を明らかにしていない。	
第117図1 写真図版54	數質陶 鉢	E 10区 B 壺	口縁部片	軟。褐色粒子入。暗褐色。	全体は消耗している。口縁端部はやや肥厚する。
同図 2 写54	鉄製品 板状	E 10区	長2.9+α	全体に層状剥離少なく、焼鉄と考えられる。欠損の大半は旧時である。製品種は不明である。	鉄鉢片か。
第118図1 写真図版54	土師器 壺	E 11区	口径(12.0)	並。雲母粒入。微。橙色。	口縁部の内・外面に横撫あり。型崩不明。体部外側下半笠削。
同図 2 写54	軟質陶 内耳鍋 ツト	E 11区東南ビ ット	口径部片	硬。含。灰色。燐。	口縁部の内・外面に横撫あり。内・外側に縁かかる。
同図 3 写54	鉄製品 釘か	E 11区	残存長2.8+α	頭、先部ともに調査時欠損。横断面は隅丸方形気味。銷化は層状と直角側のクラック入り、古代鉄か。	乗附製。

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考	
第119図1 写真図版54 地	須恵器 鉢形	E12区耕土	高台部径(6.6)	軟。露母。にぼい橙色。高台は貼付。内・外面に織目あり。器肉を均一気味の厚さで挽出する。	藤原以南製。	
同図2 写54	須恵器 鉢形	E12区耕	口径(16.0)	織。微。浅黄色。	口縁部は玉縁様に肥厚する。内・外面に織目あり。器肉は薄い。	
同図3 写54	須恵器 瓶	E12区耕土	体部片	織。微。灰白色。	内・外ともに回転の擦痕あり。器肉を比較的均一気味の厚さで挽出する。	
同図4 写54	灰釉陶 瓶	E12区耕	体部片	織。なし。灰色。	外面に刷毛痕あり。内面に織目あり。外側回転擦痕あり。	
同図7 未掲載	鉄製品 釘か	E12区	残存長3.4+α	頭。先部は調査時欠損。横断面が方形気味である。錆化は層状剥落と直角方向のクラック入り古代鉄か。		
同図8 写54	鉄津 椀形	E12区床	最大径(7.6)	外底面に凹跡あり。質量は重く原料鉄で、近世にいう鉄に相当か。径は比較的小形の方である。	鉄鉄か。	
第120図1 写真図版11 内耳掛	供質陶 耳掛	F1区2層	体部片	硬。赤褐色含。黒褐色。15世紀後半の内耳掛片で、底部側が少し残る。外面埋およぶ。	乗財製。	
同図2 写55	銅製品 鏡	F1区	残欠	割口は調査時欠損らしく新様に見える。文字は拓影右側に「補」と一字が判読される。		
同図3 写55	銅製品 鏡	F1区2層	残欠 上面	割口は調査時欠損らしく新様に見える。文字は判読できず。拓影右側が表面らしい。		
同図4 写54	铁津 椀形	F1区	最大長3.8+α	底面に炉底面感あり。質量は重く、近世にいう鉄に相当か。径は比較的小さい。	鉄鉄か。	
第121図5 写真図版5 脚付杯	土師質 脚付杯	F1区III	口径(13.2)	軟。微。淡灰色。酸化気味。	体部外面に織目あり。脚部は貼付。 須恵器と産業の製品。	不明。
第122図1 写真図版55 壇・塊	須恵器 壇	F2区住覆土 IV	口径(14.0)	軟。金雲母粒。微。浅黄色。	体部外面に織目あり。内面滑らか。 器肉は平均的に挽出される。	藤原以南製。
同図2 写55	須恵器 塊	F2区住土 IV	口径(13.4)	軟。多。灰色。	高台部貼付。底面系切。内・外ともに滑らか。	笠置・吉井製か。
同図3 写55	須恵器 塊	F2区2層	高台径(9.4)	軟。含。灰白色。	高台部貼付。器肉はついで厚く、特徴的。	笠置・藤か。
同図5 写55	鉄製品 不明	F2区2層	最大長5.8+α	錆化の層状剥離や直角方向のクラックは発達せず、洋鉄かもしれない。刃部形状からすると鍔か。		
同図6 写55	石製品 砾石	F2区2層	長7.8+α	表面衝撃の使用痕。裏面、両小口側は旧時欠損である。使用グレードは頗るなく、使用面は平らで近い。左側部に研痕あり。	砥沢石(流紋岩)。	
同図7 写55	石製品 石臼	F2区4層	直徑(15.6)	小形の臼片で側部のみ旧状態が残存する。細かな突起ノミ状の工具痕が残される。欠損は旧時である。	粗粒安山岩。	
第123図1 写真図版55	土師質 耳	F3区2層	底径(5.0)	軟。シルト質。黄褐色。	底面に糸切痕あり。外面部際に糸切時のめくれあり。	中世。
第125図1 写真図版55 裏	施釉陶 裏	F4区2層	口径(18.8)	織。微。黒褐色。	口縁部から外面施釉。釉は火中し発泡。近世九州地窯に似るが否。	舶載。
第126図1 写真図版55	須恵器	F5区居住	口径(9.6)	並。鉛物多。にぼい黃褐色。	体部外面に織目多い。外下面半に凧張りか小割落あり。	乘財以南製。
同図2 写55	土師質 皿	F5区居住	底径(4.2)	並。微。シルト質。棕色。	底面に織目左回転の糸切あり。体部外面に織目あり。	中世。
第127図1 写真図版55 环	土師器	F6区II	口径(11.8)	硬。白含。棕色。	口縁部の内・外面に横擦りあり、体部外面削削。	
同図2 写55	土師器 环	F6区II	口径(13.0)	微。並。棕色。	口縁部の内・外面に横擦りあり。体部外面削削。	藤岡製。
第128図1 写真図版55 环	土師器	F7区IV	口径(13.6)	硬。含。棕色。	口縁部の内・外面に横擦り。その最上部に型崩痕あり。	
同図2 写55	須恵器 塊	F7区耕作土	高台径(8.0)	軟。白含。にぼい黄色。	体部外面に織目あり。底面糸切痕、高台貼付。	笠懸製。
同図3 写55	須恵器 塊	F7区II	口径(16.0)	硬。白含。灰色。	口縁部の内面に一条の沈線があり、内・外ともに回転の擦痕あり。内・外面部。	笠懸製。鏡写か。
第129図6 未掲載	銅製品 鉄具	F7区埋設土 中	長3.2 幅1.7~2.2	現品を探し出せば既報から作団。既報には鉄具とあり、「銅の丸棒を素材にしたるもの」とあり。さし金を欠く。		
第130図1 写真図版55 刀物	供質品	F8区	長2.6+α 幅1.8	錆は層状の剥落と直角方向のクラックあり。古代鉄か。片側に切刃状に刃が付くが、切刃の種類はなく純い。用途不明。		
第131図1 写真図版55 付皿	磁器染 付皿	F9区	高台径(4.4)	織。なし。青白磁色。山	外面上山模様による染付あり。内・外ともに透明釉が施される。	伊万里系。18世纪。
同図2 写55	陶器染 付皿	F9区ビット 中	高台径(6.8)	織。なし。暗褐色。ペロ藍。	陶胎暗褐色に白土拂し、ペロ染により植物文を染付けする。	唐津系。19世纪。

## 第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第135図2 写真図版55	須恵器 台付盤 ト	G 1区東南ビ	口径(26.6)	締。微。灰色。 割口は少し消耗する。底面回転窓削。高台貼付。側内では稀少形態。	乗附・吉井製。
第137図1 写真図版55	軟質陶 内耳鍋	G 3区II	口縁部片	硬。白含。微。暗褐色。	口縁部の内・外に横擦あり。外面に煤付着。
同図2 写真55	軟質陶 鉢	G 3区	底径(14.4)	軟。鉢。灰色。	底面に水切痕あり。内面に磨耗痕著。全体に消耗している。
第140図1 写真図版55	土師質 壇	G 5区	高台径(5.4)	並。微。にほい黄褐色。	高台は貼付。器形の割りに高台高く、須恵器生産末葉の製品。
同図2 写真55	須恵器 壇	G 5区	底径(6.4)	締。微。灰色。	底面系切り。内面底、体部外に輪穂目あり。
第141図1 写真図版55	須恵器 壇	G 6区P	口径(13.2)	締。微。灰色。	底面に水切痕あり。体部外に輪穂目あり。底部中央は極めて薄い。
同図4 写真55	石	G 6区溝下層	厚3.8	自然石か。本来の安山岩は角錐状態で角ばかりが取れていますがが多い。加工痕、打痕は明瞭でないが角ばかりが気になる。	粗粒安山岩。
同図5 写真55	軟質陶 鉢	G 6区溝下層	口縁部片	軟。微。褐色。	内・外に横擦あり。割口に組作痕が見える。
同図6 写真55	焼結陶 中形壺	G 6区溝下層	口縁部片	締。含。暗褐色。自然釉。	内・外に横擦痕あり。割口に組出しが見える。
第142図1 写真図版56	土師質 皿	H 1区北ミゾ	口径(13.6)	軟。微。黄褐色。	中世土師質器の中では最も新様の形態。薄作である。
第143図1 写真図版56	土師質 台付壇	H 2区床	最大径10.2	硬。微。浅黄色。	底面は回転窓削。底面は特徴的に厚いが一般的。須恵器生産末葉の製品。
同図2 写真56	須恵器 小形壺	H 2区IV	体部片	硬。微。灰色。	外面細格子印を擦消し。内面青面波の当目あるが同心円か不明。
同図3 写真56	土師質 不詳	H 2区III	最大径(10.0)	硬。微。白微。	古代・中世の製品か不明。特殊器種。不明。
同図4 写真56	軟質陶 鉢	H 2区床	口径(32.4)	硬。微。灰白色。	口縁部外に横擦痕。内面磨耗微。口縁端部欠損。体部外面凹凸あり。
第144図1 写真図版56	須恵器 壇	H 3区下位住	高台径(7.4)	軟。微。橙色。内黑。	底面系切り後、高台貼付。内面に器面整形の研磨あり。内面内黒。
同図2 写真56	須恵器 壇	H 3区下位住	高台径(8.2)	軟。なし。灰色。	底面系切り後、高台貼付。体部外面輪穂目あり。
同図3 写真56	須恵器 中形壺	H 3区下位住	口径(25.8)	硬。微。灰色。	特徴的な口縁部であり、頗る少ない。外側の整形工事。
同図4 写真56	石製品 砥石	H 3区下位住	長6.2	頭部円孔。表裏・側部使用。点描部が使用部。磨耗は顯著なケセが付かず丁寧。吊延として刃付に使用したらしい痕跡あり。	砥沢石。
同図5 写真56	石製品 砥石	H 3区下位住	最大長4.0	磨耗は顯著で使用済あり。欠損は旧時。中凹みの状態は置底石の場合に多く生じるケセである。	砥沢石。
同図6 写真56	石 磨耗痕	H 3区	最大長12.3	ほんのわずかであるが上方の線圈中に磨耗痕あり。欠損は旧時。点描は形態描写で使用面にあらざる。	粗粒安山岩。
第145図7 写真図版56	土師質 壇	H 3区No.1	口径11.0	硬。微。赤褐色。	底面は回転窓削。内・外に輪穂目は目立らず、滑らか。須恵器生産末葉。
同図8 写真56	土師質 壇	H 3区No.	高台径7.4	軟。微。黄灰色。	高台貼付。体部外に輪穂目あり。内面は滑らか。須恵器生産末葉。
同図9 写真56	石製品 砥石	H 3区住居内	長36.6	石材種は大江による。出土状態は底紙として作られる。左側平面に、研磨朱痕あり。点描部は使用面。トーンは原石面。	粗粒安山岩。
同図10 未掲載	鉄製品 刀子 No21	H 3区住居内	最大長18.4	現品を探し出せず。既報から作図。既報には刀子とある。背はやや側向く。図では区がしっかりして特徴的。	
同図11 写真56	軟質陶 火鉢	H 3区III	口縁部片	硬。微。灰褐色。	第102図10と胎土・手法は共通し、同一個体か。
第146図1 写真図版56	土師器 小形壺	H 4区床	口径(12.8)	並。微。にほい橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。肩部に組作痕見える。
同図2 写真56	土師器 壺	H 4区床	口径(19.2)	硬。青母粒・微。にほい橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。頸部に組作痕あり。体部外面窓削。
同図3 写真56	須恵器 壺	H 4区	底径(7.0)	軟。微。灰黄色。	底面系切痕あり。外面部下方に輪穂目あり。
同図4 写真56	須恵器 広口壺 ト	H 4区2住ビ	最大径(21.8)	硬。微。灰褐色。	体部外側カキ目。内面に輪穂形成の輪穂目あり。広口となるのは異風。
同図5 写真56	灰釉陶 壺	H 4区床	高台径(11.0)	締。なし。灰白色。	高台は挽出し。底面と外間に施釉。体部外間に回転窓削あり。

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第146図6 写真図版56	軟質陶 鉢	H 4 区床	底径(8.2)	硬。微。にぶい褐色。 内面に磨耗あり。体部外面に輪轂右回転の範削あり。底面糸切不明。	乗附製。
同図7 写56	軟質陶 大形鉢	H 4 区床	最大径(31.0)	硬。微。にぶい褐色。 内面に磨耗あり。体部外面はいく分カセている。体部外面に輪轂目あり。	
第147図14 写真図版56	土師器 床	H 4 区第II住	口径(12.8)	軟。微。淡橙色。 口縁部の内外に横擦あり。体部外面下方に笠削わざが見える。	藤岡製。
同図15 写56	須恵器 壇	H 4 区No 6	口径(15.8) 高(5.6)	軟。微。灰色。 底面輪轂右回転糸切後、高台貼付。 内外全体部に輪轂目あり。	乗附製。
同図16 写56	須恵器 壇	H 4 区第2住	頭部径(16.2)	締。微。灰白色。 体部外面に格子の目あり。内面青海波当面あり。同上円かは不明。	東海・搬入。
第148図1 写真図版56	土師器 壇	H 5 区西住居	口径(13.0)	含。微。橙色。 口縁部の内・外面に横擦、笠工具痕あり。外面に笠削。内面に紐張。	不明。
同図2 写56	須恵器 壇	H 5 区西住	底径(6.2)	並。白色粒。微。灰色。 底面に糸切痕あり。体部の内・外面上に輪轂目あり。	笠懸製。
同図3 写56	須恵器 壇	H 5 区	口径(13.0)	軟。青母粒。含。橙色。 底面に糸切痕あり。体部の内・外面上に輪轂目あり。	藤以南・埼玉製か
第149図1 写真図版57	土師器 壇	H 6 区No 9	体部片	並。青母粒。含。にぶい 橙色。 体部外面に笠削あり。上部・下部欠損。器内は薄い。	藤岡製。
同図2 写57	須恵器 壇	H 6 区ローム	底径(8.0)	軟。微。灰白色。 底面に輪轂右回転の糸切痕あり。体部内外滑らか。内面前輪轂目あり。	乗附製。
同図3 写57	須恵器 壇・壇	H 6 区No12	口径(14.2)	締。微。灰色。 体部外面に輪轂目あり。器内は薄作りで特徴的。	乗附製。
同図4 写57	須恵器 壇	H 6 区	高台径5.8	硬。白色粒。微。灰白色。 底面に輪轂右回転の糸切痕あり。高台貼付。内面底に輪轂目あり。	吉井製。
同図5 写57	須恵器 壇	H 6 区	底部片	軟。白色粒。微。灰色。 底面に輪轂右回転の糸切痕あり。高台貼付。高台端部消耗している。	秋間製。
第150図11 写真図版57	土師器 壇	H 6 区第2住	口径(11.0)	硬。微。暗褐色。 口縁部の内・外面横擦。体部外面上方に型崩あり。以下笠削。	
同図12 未掲載	土師器 壇	H 6 区	最大径(16.8)	硬。微。暗褐色。 体部外面に笠削。内面に紐作痕あり。	
同図13 写57	須恵器 壇	H 6 区床No 8	口径12.8 高3.4	軟。微。灰白色。 復元は少し大きめで修正要か。	体部外面に輪轂目あり。底面に輪轂右回転の糸切痕あり。
同図14 未掲載	須恵器 壇	H 6 区床No 4	口径(13.0)	軟。微。灰色。 底面は輪轂右回転の糸切痕後、高台貼付。	秋間製。
同図15 未掲載	須恵器 壇	H 6 区 床面 No11	口径13.6 高6.6	軟。微。淡灰色。 底面は輪轂右回転の糸切痕後、高台貼付。	乘附～埼玉製。
同図16 写57	須恵器 壇	H 6 区 床面 No 6	口径16.0 高6.8	並。微。灰色。 底部外面に輪轂目あり。底面は糸切後、高台貼付。	秋間製。
第151図1 写真図版57	土師質 皿	I 1 区床裏	底径(5.8)	並。微。にぶい橙色。 糸切あり。体部外面輪轂目あり。中世土師質土器で、15世紀頃の製品。	
同図2 写57	軟質陶 内耳壙	I 1 区	底径(17.0)	軟。粗。微。にぶい橙色。 平底化した内耳壙の底部片で、体部外面に輪轂目あり。	西毛X製。
第152図1 写真図版57	須恵器 壇・壇	I 2 区床	口径(13.4)	軟。含。灰白色。 体部外面に輪轂目あり。器内厚く、作調力、低下気味。	吉井製。
同図2 写57	須恵器 壇・壇	I 2 区	口径(14.0)	軟。微。浅黄色。 体部全体が滑らか。口縁部は外返傾向あり。	吉井・藤岡製。
第153図1 写真図版57	須恵器 壇	J 1 区 2層	口径(13.0) 高(3.9)	硬。微。灰色。 体部の内・外面上に輪轂目あり。底面は輪轂右回転糸切後、作調丁寧。	秋間・乗附製。
同図2 写57	須恵器 壇	J 1 区 2層	底径(7.8)	軟。微。浅黄色。 底面に輪轂右回転の糸切痕あり。体部外面、内面底に輪轂目あり。	秋間製。
第154図18 写真図版58	鐵津 楓形	J 1 区	径(13.8)	大型の楓形萍で欠損は旧時である。底面にはが略痕あり。重みはやや重く、近世にいう鉄としての使用は可能であろう。	
同図19 写58	石 筋鉢形	J 1 区	残存長9.2	欠損は旧時である。先端側の団上方に摩耗痕があるが、金属研磨によるものではなく、硬い飢物部分が盛り上る。	粗粒安山岩。
第156図1 写真図版58	須恵器 蓋	J 2 区 2層	天井部片	軟。微。灰白色。 体部外面に輪轂右回転の回転笠削条痕あり。	秋間製。
同図2 写58	土師質 壇	J 2 区 2層上	底部片	軟。青母粒。微。淡橙色。 内面底に輪轂目あり。底面は回転擦痕あり。須恵器生産末葉の製品。	藤岡以南製。
第158図1 写真図版58	須恵器 蓋	J 3 区 2層	横径(3.8)	硬。微。灰色。 摘端部尖り、シャープ。割口に紐張と長い挽出跡あり。	秋間製。

## 第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第158図2 写真図版58	須恵器 壺	J 3 区	口径(18.2)	硬。微。灰白色。	天井部の質割は手持。体部内・外面に輪轂目あり。器肉やや厚い。
同図3 写58	須恵器 壺	J 3 区 2 層	口径(12.6)	軟。灰白色。	体部内・外面に輪轂目あり。内面の輪轂目は特徴的。
同図4 写58	須恵器 壺	J 3 区	高台径(9.0)	縦。微。褐灰色。	底面に琵琶様の刻みが入るが判読不明。高台貼付。糸切見えず。
同図6 写58	鉄製品 釘か	J 3 区	残存長2.6+α	釘か否かは、頭部形状も不明確であり、はっきりしない。鋒化は、層状と直角方向の削れがあり古代鉄か。	
同図7 写58	銅原料 地鐵か	J 3 区中1層	長2.6	錫色は錫青色となるが、黒味があり、他の金属が入る化合物状態か。一度鍛練を受けたらしい。溶解流動状を呈す。減少遺物例。	銅原料か。
同図8 写58	羽口	J 3 区	小片	硬。輕。スサ見えず。白。	全体に酸化部が多く、多くの羽口が酸化部が少なく、還元色が多いとの異なり、用法を示唆す。したがつて8は鋒化がそう顯著でない。
同図9 写58	羽口	J 3 区	小片	硬。輕。スサ見えず。白。	8は鋒化がそう顯著でない。
第159図10 写真図版58	須恵器 壺	J 3 区 No.8	口径12.4 高4.4	硬。微。黑灰褐色。	底面に輪轂右回転の糸切あり。高台貼付。体部内・外面滑らか。
第160図1 写真図版59	土師器 甕	J 4 区 2 層	口径(14.0)	硬。含。灰黃褐色。	口縁部の内・外面に横撫あり。割口に粗作痕あり。
同図2 写59	須恵器 壺	J 4 区No15	底径(7.4)	並。微。灰色。	内面に輪轂目あり。外表面に右回転の糸切あり。
同図3 写59	須恵器 壺	J 4 区No28	最大径(11.0)	並。微。灰白色。	内面に輪轂目あり。底面は手持泥割。体部外側は滑らか。
同図7 写59	軟陶か 不明	J 4 区 2 層	残存長8.1	軟。なし。褐色。	近世・中世・古代か不明。1側面に砂付着。土師器と須恵器との中間質。
第161図1 写真図版59	須恵器 蓋	K 1 区イモ穴	口径(13.6)	硬。微。灰白色。	器内に模めて薄作り。8世紀前半以前の古樣を呈す。
第162図1 写真図版59	須恵器 壺	K 2 区	底径(6.6)	軟。微。僅かかる。暗灰色。	底面は糸切。内面に僅かかる。内・外面に輪轂目あり。
同図3 写59	羽口	K 2 区耕		輕。スサ見えず。微。明黄褐色。	酸化部分が多く、還元部分が少ない特徴があり、J 3 区の羽口に共通。
第163図1 写真図版59	須恵器 甕	K 3 区中溝	高台径(6.6)	並。微。輕。灰色。	高台に貼付。器肉は厚い。高台端部に浅く凹陥入る。
同図2 写59	石製品 砾石	K 3 区中溝	残存長3.8	頁岩製の砥石片で稀少例。欠損は旧時。使用面は点捕部。質は合せ砥級であるが、現在の鳴滌灘より軟質。	珪質頁岩。
同図3 写59	石製品 砾石	K 3 区中溝中	残存長4.6	頁岩製の砥石片で稀少例。欠損は旧時。使用面は点捕部。質は合せ砥級であるが、現在の鳴滌灘より軟質。	珪質頁岩。
同図4 写59	土師質 皿	K 3 区中溝中	底径(4.4)	並。シルト質。微。橙色。	中世土師質土器で、糸切あり。大きく外反し。15世紀頃。
同図5 写59	縄文 深鉢	K 3 区	体部片	硬。鉛物微。明赤褐色。	割口に粗作痕あり。外表面に比線区画からなる施文部。無文部あり。
第164図6 写真図版59	土師質 皿	K 3 区	口径7.6 高1.8	軟。微。黑灰色。	底面に輪轂左回転の糸切あり。口縁部に油煙付着。中世土師質土器。
第165図1 写真図版59	須恵器 蓋	L 1 区	口径(16.6)	硬。微。黃灰色。	器肉はやや薄い。内・外面滑らか。大形でも体部が直線的なのは特徴的。
同図2 写59	土師質 壺	L 1 区	口径(10.0)	硬。金雲母。微。にぶい 橙色。	底面に糸切痕あり。体部内面に浅い輪轂目あり。須恵器生産末葉の製品。
同図3 写59	土師質 壺	L 1 区	底部径(6.2)	軟。微。灰色。	底面に輪轂右回転の糸切あり。内面に僅によぶ。須恵器生産末葉の製品。
同図4 写59	土師質 壺	L 1 区 3 層	底部径(6.8)	並。微。僅。にぶい 橙色。	底面に回転痕あり。内面に暗文あり。燒あり。須恵器生産末葉の製品。
第166図7 写真図版59	鉄製品 棒状	L 1 区No31	長20.0	現品を探し出せず。既報から転載。既報には用途不明としている。横断面は方形を呈す。	
第167図1 写真図版59	須恵器 座	L 2 区	体部片	繊。石英粒。含。灰白色。	外表面は素文で滑らか。内面に菊花状の当目あり。
同図2 写59	鉄製品 利器	L 2 区耕	身幅3.4	破綻部は調査時欠損。木質が付着するが刃部の方向と直角で不一致。鋒化は和鉄のような層状に発達。中世以降か。	中世以降か。
同図3 写59	軟質陶 座か	L 2 区	体部片	繊。石英粒。含。灰白色。	中世軟質陶器中大形品少なく、稀少例。割口に粗作痕。内面回転痕。
同図4 写59	縄文 深鉢	L 2 区	体部片	硬。小深多い、織維入り。決褐色。	内面研磨あり。外表面貼付隆起による施文で部分的に研磨状の条痕に入る。

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第167図5 写真図版59	縄文 深鉢	L 2 区	体部片	並。白色軽物、小擦多い。 にぶい黄褐色。	割口に紐作痕あり。外面に縄文と沈 線施文あり。内部剥落気味。
第168図1 写真図版59	土師器 壺	L 3 区	口径(11.6)	並。微。橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部 下半外表面磨削。以下荒削。
同図 2 写真 59	土師器 壺	L 3 区	口径(10.8)	硬。微。にぶい赤褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部 下半型磨削あり。以下欠損。
同図 3 写真 59	土師器 壺	L 3 区	最大径(11.4)	並。微。橙色。	体部下半外表面磨削。口縁部欠損して いるが立上り内・外横擦あり。
同図 4 写真 59	土師質 壺	L 3 区	口径(15.2)	硬。微。浅黄色。	繩文右斜配。体部外面は滑るような擦痕 の繩目あり。脚部は貼付。
同図 5 写真 59	土師質 脚付壺	L 3 区	底径(10.4)	並。微。橙色。	内面底に繩目あり。脚部は貼付。 底面裏に凹字未記。須恵器未業製品。
同図 7 写真 59	燒締陶 鉢	L 3 区	口径(30.4)	緑。微。黒褐色。	内面に磨耗あり。体部外面に昆明あり 。割口に紐作痕あり。
同図 8 写真 59	軟質陶 鉢	L 3 区	最大径(30.0)	硬。燒締氣味。多。灰色。	内面に磨耗あり。体部外面に昆明あり 。割口に紐作痕あり。繩目有り。
同図 9 写真 59	燒締陶 中形盤	L 3 区	体部片	緑。含。赤褐色。	割口に紐作痕あり。内・外面に擦痕 あり。器内に中形盤か。
同図10 写真 59	縄文 加須部	L 3 区	小破	並。青母粒、角障、含。 明赤褐色。	繩文土器の加須貼付文で隆帯の施 文。胎土は小典謹が多く特徴的。
同図11 写真 59	縄文 深鉢	L 3 区	体部片	硬。含。明赤褐色。	内面に回転擦痕があり。施文は隆帯 の施文と部分貼付による。
第169図1 写真図版60	須恵器 蓋	L 4 区	摘部片	軟。微。灰色。	群馬県例に少ない摘形状。全体的に 滑らか。質はやや軟質。
同図 2 写真 60	須恵器 蓋	L 4 区ローム 上	摘径(4.1)	緑。微。灰色。	輪状の模を貼る。内・外面ともに 滑らか。表面低い。
同図 3 写真 60	須恵器 壺	L 4 区	口径9.8	硬。含。酸化氣味。浅黃 色。	底面に右回転の糸切あり。体部外面 に繩目あり。
同図 4 写真 60	須恵器 壺	L 4 区	底径(5.2)	軟。含。灰色。	底面に糸切あり。内・外面は滑らか。 器内はやや厚い。
同図 5 写真 60	羽口	L 4 区ローム 上	破片	輕。微。Sサ見えず。 にぶい褐色。	全体が酸化氣味で、還元部分は見え ず、近接地出土の羽口と同様の傾向。 空間開。
同図10 写真 60	鐵製品 釘	L 4 区	残存長4.1+ $\alpha$	鉄化は層状の剥落と直角側の割れとがあり、古代鉄を思わせる。 欠損は調査時、頭部の形状は不明である。	
同図11 写真 60	軟質陶 鉢	L 4 区	底径(14.0)	軟。角ぼった軋物多。に ぶい褐色。	内面に磨耗あり、外面上には擦痕あり。 割口には底部接合面あり。
同図12 写真 60	縄文 深鉢	L 4 区	体部片	並。多。にぶい黄色。	割口に紐作痕あり。外面に隆帯、縄 文と擦痕あり。
第170図1 写真図版60	土師質 壺	M 1 区	底径(5.4)	並。角閃石微。浅黄色。	底面に糸切あり。内・外面に繩目有 り、中世土師質土器類で15世紀頃。
第171図1 写真図版60	須恵器 壺	M 2 区	口径(10.8)	軟。含。灰~黄褐色。	底面に糸切あり。内・外面に繩目有 り。やや酸化氣味。
同図 2 写真 60	鐵製品 不明	M 2 区	残存長8.2+ $\alpha$	鉄化は層状の剥落が見られるが、和鉄のように思え、古代~近 世の製品と考えられる。片側は刃部のよう見える。	
第172図1 写真図版60	軟質陶 火鉢	M 3 区 1	体部片	軟。微。黒灰色。	全体的に消耗多い。外面に雷文、巴 文の印文、龍綱一条あり。
同図 2 写真 60	縄文 深鉢	M 3 区ローム 上	体部片	硬。微。赤褐色。	内面に整形模あり。割口に紐作痕。 外面に隆帯と刻目あり。
同図 3 写真 60	縄文 深鉢	M 3 区ローム 上	体部片	硬。小擦多。灰赤色。	外面に隆帯と刻目あり。内面に整形 の擦痕あり。
第173図1 写真図版60	土師器 甕	M 4 区	口径(21.8)	並。微。にぶい橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。外面 に紐作痕あり。
同図 2 写真 60	土師 須恵器	M 4 区ローム 上	最大径(18.2)	軟。シルト質。にぶい黄 褐色。	割口、内・外面に紐作痕あり。内面 に擦痕あり、土師器・須恵器か不明。
同図 3 写真 60	須恵器 羽釜	M 4 区ローム 上	口径(20.0)	並。鉄物粒多。にぶい褐 色。	内・外面に繩目有り。割口に紐 作痕あり。脚部は貼付。
同図 4 写真 60	軟質陶 鉢	M 4 区	底部片	軟。微。灰白色。	内面に磨耗あり、底面に糸切。割口 に紐作痕と粘土板見える。
第174図1 写真図版60	土師器 壺	M 5 区	口径(9.0)	軟。シルト質。橙色。	全体が消耗し、整形技法は見えず。 小形である。

## 第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第174図2 写真図版60	土師器 环	M 5 区	口径(10.6)	軟。金雲母、シルト質。 橙色。	口縁部の内・外面に横擦。体部外面上方に型崩、以下笠削。	藤岡製。
同図3 写60	土師器 壺	M 5 区	口径(18.8)	並。微。緑色。	口縁部の内・外面に横擦あり。外面に紐作痕あり。	
同図4 写60	須恵器 壺	M 5 区東側1 P	高台径(8.2)	並。微。にぶい褐色。酸化気味。内黒。	糸切後、高台貼付。内面研磨、黒色塗。器内も厚い。	洪積粘土。
同図5 写60	須恵器 壺	M 5 区耕	口径(14.6)	軟。微。暗褐色。	内面研磨と暗文。内黒後、煤または漆の付着あり。	県外搬入か笠懸製。
第175図1 写真図版60	土師器 环	M 6 区耕	口径(10.6)	並。微。緑色。	口縁部の内・外面に横擦あり。外面に型崩痕、以下笠削。	
同図2 写60	土師器 大环形	M 6 区耕	口径(16.0)	軟。シルト質。橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部外面に笠削。	藤岡製。
同図3 写60	土師器 盤	M 6 区耕	残存径(19.6)	硬。微。明赤褐色。	内・外面に研磨と暗文あり。体部外面下方に型崩あり。	畿内搬入。
同図4 写60	須恵器 壺	M 6 区中耕	高台径(5.8)	並。微。にぶい褐色。	糸切後、高台貼付。内面に重焼痕あり。内・外面滑らか。	県外搬入。
同図5 写60	須恵器 壺	M 6 区中耕	口径部片	軟。雲母、微。灰色。	内面に研磨と黒色塗あり。外面は滑らかである。	藤岡開南製。
第176図1 写真図版60	土師質 皿	S 53.5、W 93.5M列か-	口径10.0 高3.2	硬。微。赤褐色。	古代から中世か不明。口縁部の内・外面に油焼付着。	乗財製か。灯火皿。
同図2 写60	灰釉陶 盆	S 53.5、W 93.5M列か-	口径(15.0)	硬。微。灰色。	体部外面に横擦目あり。高台は貼付。底面裏に横擦条痕あり。	搬入。
第177図1 写真図版60	土師質 脚付壺	N 1 区耕	脚端径(9.4)	硬。含。浅黄色。	内・外面に回転痕あり。内面に赤色の物質が顔料状に付着。須恵器未塗。赤色付着。	吉井製か。赤色付着。
同図2 写60	軟質陶 鉢	N 1 区耕	口縁部片	軟。シルト質。黄灰色。	全体に消耗している。口縁部の内・外面に無く。	乗財製。
第178図1 写真図版60	須恵器 环か	N 1 区耕	口径(15.6)	硬。微。灰色。	内・外面に横擦目あり、体部外面に墨書きあり。器内やや薄い。	墨書き「東院」。
第180図1 写真図版60	灰釉陶 皿	N 2 区第2層	高台径(7.2)	軟。微。灰白色。	釉見え。内面に浅い段あり。貼付高台。高台内面に横擦条痕あり。	搬入。
同図2 写61	土師質 皿	N 2 区	口径7.2	軟。シルト質。浅黄色。	底面に横擦左回転の糸切あり。内面に横擦目あり。	
同図3 写60	土師質 皿	N 2 区	底径(8.2)	並。微。明褐灰色。	外面に煤付着。底面に横擦左回転の糸切あり。	
同図7~10 写真元	網製品 鉢	N 2 区南側窓 穴	10に小欠損あり	7は「紹聖元寶」。8は「淳熙元寶」、9は「祐通寶」、10は「皇宋通寶」と判読される。		
第180図5 写真図版61	染付磁 小碗	N 3 区2層	口径(13.4)	緑。なし。白色。染付跡	明代末期の青花小碗片である。二次被熱を受けているのか発色が暗い。	景徳鎮窯製。
同図6 写61	軟質陶 不明	N 3 区中耕	口縁部片	並。微。褐灰色。	内・外面に擦痕あり。割口に組作痕あり。鉢か内耳鍋か不明。	乗財製。
同図7 写61	軟質陶 鉢	N 3 区2層	口径(32.0)	並。微。にぶい黄褐色。	内面に磨耗はない。内・外面に回転の施条痕あり。	乗財製。
同図8 写61	燒結陶 壺	N 3 区中2層	頭部径(26.4)	緑。含。にぶい黄褐色。	割口は消耗している。内・外面に回転の擦条痕あり。割口に紐作痕あり。	常滑焼。
同図9 写61	燒結陶 壺	N 3 区中2層	肩部片	緑。含。にぶい黄褐色。	割口に紐作痕あり。内・外面に擦痕あり。	常滑焼。
同図10 写61	燒結陶 壺	N 3 区中2層	肩部片	緑。含。灰黄褐色。	外面上に整形の工具痕あり。割口に紐作痕あり。内面に擦痕あり。	常滑焼。
同図11 写61	燒結陶 壺	N 3 区中西側	体部片	緑。含。にぶい褐色。	内・外面に擦痕あり。割口に組作痕あり。	常滑焼。
同図12 写61	軟質陶 円加工	N 3 区中2層	短径3.6	軟。微。灰色。	軟質陶器の再加工品で、本来器種は鉢か内耳鍋と考えられる。	
同図13 写61	石製品 砥石	N 3 区中耕	長4.2+α	面取りはあるものの不定多角形を呈する。被熱のため表面剥落している。使用は面が平らであり、合せを行ない丁寧である。		流紋岩。
第181図1 写真図版61	須恵器 台付壺	N 4 区	最大径(21.8)	硬。微。灰色。	割口に接合部が見える。外面上に列点刺突、沈挫、カキ目が施される。	
同図2 写61	軟質陶 鉢	N 4 区	口縁部片	並。微。にぶい橙色。	全体は消耗している。内・外面に回転の擦痕あり。	乗財製。
同図3 写61	燒結陶 壺	N 4 区	体部片	緑。含。灰白色。自然釉。	全体は消耗し、内面顯著に、外面に小数の凧/ハゼあり。割口に組作痕。	常滑焼。

図 番 号	種 器 形	出 土 位 置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第181回13 写真図版61	石製品 切石	N 4 区溝覆土 7層上面	厚14.2+α	五輪塔地輪片と思われる。3面に旧状の面が残り、割口は旧時欠損で被窓行為によるものか。割口シャープ。	椎名山ニツ岳 軽石。
同回14 写61	石製品 相輪部	N 4 区溝フタ 土7層上	長23.2+α	宝印塔身の相輪部と考えられる。九輪下半も欠損するが、旧時の被窓行為による。割口シャープ。蓮弁の刻みシャープ。	粗粒安山岩。
同回15 写61	石製品 空風輪	d 4 区溝	長32.0+0.4	五輪塔空風輪。工具痕が明顯に残る。左・右やや歪むが作調は丁寧である。空風輪としては大型に近い。	粗粒安山岩。
第182回11 写真図版60	土師質 皿	N 2 区	口径11.6 高3.2	硬。微。淡橙色。 表面に織縫左回転の余切。体部は外反する。中世土師質土器。15世紀頃。	洪積粘土。
同回14 未掲載	土師質 皿	N 3 区第II層	口径8.2 高2.2	軟。シルト質。黄灰色。 表面に織縫左回転の余切あり。体部内面に織縫目あり。中世土師質土器。	洪積粘土。
同回15 写61	施釉陶 皿	N 3 区板築上 部	口径(12.2)	締。なし。黄灰色。灰釉 淡緑色。 表面に織縫左回転の余切あり。体部外間に研磨あり。丁寧な作調。	美濃・瀬戸焼。 美濃。
同回16 写61	軟質陶 香炉	N 4 区溝底	口径10.6 高6.2。完存	硬。微。黒灰色。燐かか る。 表面に織縫左回転の余切あり。体部外間に研磨あり。丁寧な作調。	乗附製。
第183回3 写真図版61 鉢	軟質陶	N 5 区表土	底部片	軟。白色粒、含。灰色。 表面に糞孔あり。	乗附製。
第184回1 写真図版61	土師質 甕	N 6 区中住	口径(23.6)	軟。雲母粒、微。淡橙色。 全体は回転力のある回転台を用い、外間に削ぎ、土師器・須恵器末葉。	藤岡以南。洪 積粘土。
同回3 写61	鉄製品 不明	N 6 区	残存長6.4+α	全体に層状剥落少なく、跡跡と考えられる。耳部が設けられ、底面側は平ら。	鉄鋤。
同回4 写61	鉄滓 橢形	N 6 区	径4.4+α	楕円形で、底側に炉底面の形成が見える。形状は全体資料からすれば小形である。	
第188回1 写真図版62	土師質 壇	O 4 区No 2	口径(15.6)	軟。多。によい橙色。 体部外面に織縫目あり。下端に高台貼付跡あり。須恵器末葉の製品。	
同回2 写62	土師質 壇	O 4 区No 1	脚部径(7.4)	並。微。灰黄色。 体部外面に織縫目あり。脚部貼付。須恵器末葉の製品。	
同回3 写62	土師質 脚付壇	O 4 区No 1	脚端径(10.2)	硬い締。微。重い。にぶ い橙色。 内・外間に織縫目あり。薄作である。須恵器末葉の製品。	
同回4 写62	須恵器 羽釜	O 4 区 3 層	口径(20.2)	並。微。灰黄色。 口縁部の内・外間に織縫目入る。口縁端部は羽釜様に仕立てる。	吉井・藤岡製。
同回5 写62	灰釉陶 壇	O 4 区No 3	高台径(6.6)	締。なし。灰白色。 釉掛目はなく、わずかに釉流れ部分が外間にある。	搬入。
第189回1 未掲載	鉄製品 丸釗状	O 4 区No35巻	長径3.2	現品を探し出すことができず、既報から作因した。既報では帯金具を推定しているが、丸釗としては鉄製であることが気になる。	
第190回1 写真図版62	須恵器 壇	O 5 区中表土	口径(14.6)	軟。微。によい橙色。内 面に研磨あり。爐黑色がある。外 面に織縫目入る。	不明。
同回2 写62	須恵器 壇	O 5 区中	高台径(7.2)	並。石英粒含。灰白色。 底面に織縫右回転の余切あり、その後、高台貼付。器内は厚い。	吉井製。
同回3 写62	須恵器 壇	O 5 区	高台径(7.0)	軟。雪母粒、微。灰色。 底面に浅い沈線あり。釉部分見えず。織縫右回転系切あり。高台貼付。高台端部平ら。	藤岡以南製。
同回4 写62	灰釉陶 壇	O 5 区住	高台径(8.4)	締。なし。灰色。 内面に浅い沈線あり。外面に灰釉わ ずか見える。底面系切。高台貼付。	搬入。
同回5 写62	灰釉陶 壇	O 5 区中2住	底径(8.1)	締。なし。灰色。 内面に浅い沈線あり。外面に灰釉わ ずか見える。底面系切。高台貼付。	搬入。
同回6 写62	土師質 皿	O 5 区No12	口径(9.2)	並。微。シルト質。にぶ い黄橙色。 中世土師質土器。口縁部の内・外間に油煙付着、灯芯痕あり。	洪積粘土。灯 火皿。
同回7 写62	土師質 皿	O 5 区中 1住	底径(9.0)	軟。微。シルト質。浅黃 色。 中世土師質土器。底面に糞孔あり。器内は厚く特徴的。	洪積粘土。
同回8 写62	土師質 皿	O 5 区 2住	口径(14.2)	並。微。シルト質。浅黃 色。 中世土師質器。内・外間に織縫目あり。底面に左回転の余切痕あり。	洪積粘土。
同回9 写62	軟質陶 鉢	O 5 区中 2住	口径(28.8)	硬。微。によい橙色。 口縁部の内・外間に織縫条痕あり。内 面の磨耗は顯著でない。	県外搬入。
同回10 写62	軟質陶 内耳壗	O 5 区 2住	底部隙片	硬。微。によい橙色。 内面に研磨と焼あり。外にも大ま かな研磨あり。中・近世不明。	県外搬入。
同回20 写62	銅製品 鏡	O 5 区	残欠	副葬された鏡と思われるが、文字判読は困難。通とも読みそ うであるがはつきりしない。	
第192回21 未掲載	土師質 皿	O 5 区No 6	口径7.8 高1.5	硬。微。淡黄色。 底面に織縫右回転の余切あり。11世 紀～13世紀の皿形。	
同回22 写62	土師質 皿	O 5 区No12	口径11.6 高3.4	軟。シルト質。黄灰色。 口縁部に油煙付着し、灯芯痕あり。 底面に織縫左回転の余切あり。	灯火皿。

## 第6篇 出土遺物

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第192回25 写真図版62	磁器 青磁鉢	O 5 区	口径(31.8)	縁。なし。白色。釉粘手 より暗い、淡青緑色。	縁泉窯。胎焼。
第193回1 写真図版63	土師器 甕	O 6 区 No 1	口径(18.2)	硬。微。にぶい橙色。	口縁部の内・外に横撫あり。頭部の 内面に紐痕あり。体部外面覗用。
同回 2 写真 63	土師器 甕	O 6 区	口径(19.2)	硬。寶母粒・含。にぶい 橙色。	口縁部内・外に横撫あり。頭部外圓 に紐痕あり。体部外面覗削り。
同回 3 写真 63	須恵器 壺	O 6 区 No 2	底径(6.4)	並。微。灰黄色。	底面に輪轍右回転の糸切あり。内・ 外面輪轍あり。内面底削耗あり。
同回 4 写真 63	灰釉陶 壺	O 6 区	高台径(7.6)	縁。なし。灰白色。	内・外面に灰釉見えが釉拂法不明。 高台貼付。高台内側に回転糸切あり。
同回 6 写真 63	土師質 皿	O 6 区	口径(9.2)	硬。なし。浅黄橙色。	体部外面に輪轍目あり。底面に糸切 痕あり。中世土師質質器。
同回 7 写真 63	石製品 砾石	O 6 区	長4.4+α	欠損は旧時。図中の点描部が使用面。 裏面も使用。少し中凹み 状態が見え、クセが生じている。	流紋岩。
第194回1 写真図版63	土師器 壺	O 7 区住内 P	口径(11.8)	軟。寶母粒・微。橙色。	口縁部の内・外面横撫。体部外面覗 削あり。前位置は上方で特徴的。
同回 2 写真 63	土師器 大形壺	O 7 区住内 P	最大径(16.8)	軟。シルト質。浅黄橙色。	内面に晴文あり。体部外面に覗削 あり。胴部は焼成で厚い。
同回 3 写真 63	須恵器 蓋	O 7 区中住居 P	掘径(3.8)	縁。石英・多。灰色。	摘端部は尖り、古様。体部外面輪轍 右回転覗削。夾雜動物多い。
同回 4 写真 63	須恵器 壺か	O 7 区中 B	口縁部片	軟。寶母粒・微。灰色。	外面上に墨書き見えるが判読できず。 器肉は薄い。
同回 5 写真 63	須恵器 小形壺	O 7 区中住内 ピット	口径(19.0)	縁。石英粒・微。灰色。	頭部は無文。割口に頭部、体部との 接合面見える。
同回 6 写真 63	中形壺	O 7 区中住内 ピット	口径(28.2)	縁。微。黒灰色。	頭部に波状模様あり。頭部の割口に接 合面が見える。
同回 7 写真 63	須恵器 中形壺	O 7 区住内ビ	最大径(33.4)	軟。微。灰白色。	体部外面に平行印、カキ目、内面に 青海波の当面あり。同心円か不明。
同回 11 写真 63	燒結陶 甕	O 7 区 1 層	体部片	縁。含。赤褐色。	外面上に整形痕あり。内面に擦痕と扭 作痕あり。
同回 12 写真 63	石製 研磨材 石下	O 7 区中 B 砧	最大長6.2	片側は調査時欠損。表面に刃なしし痕 と思える条痕が刻目のごとくに入る。その幅は広い。側部は川原面。	椎名山二ツ岳 砾石。
第195回13 写真図版63	羽口	O 7 区	小片	酸化部分が少しあり、大半が還元部と硅化部分である。胎土は 粗で、スサをはじめる。	
同回 14 写真 63	羽口	O 7 区	小片	酸化部分が多くを占め、わずか還元部と硅化部がある。胎土は 粗で、スサをはじめる。	
同回 15 写真 63	羽口	O 7 区	小片	酸化部分が少しあり、大半が還元部と硅化部分である。胎土は 粗。欠損は旧時である。スサは見えない。	
同回 16 写真 63	羽口	O 7 区	径(9.0)+α	酸化部分は送風孔の末端にわざかあり。大半が還元部と硅化部 である。胎土は粗で、スサをはじめる。	
同回 17 写真 63	鉄製 鉄片	O 7 区	長1.8	O 7 区中の鉄片もしくは鉄原料と思えそうな個体はこの1点のみである。層状剥落少なく鉄錆を思わせる。	鉄錆か。
同回 18 写真 63	鉄津 椀形	O 7 区	径2.8+α	重い鉄津で、近世にいう鉄材に相当すると考えられる。底面に は底の形状が見える。欠損旧時。	鉄相当か。
同回 19 写真 63	銅材か 銅津	O 7 区	径4.8	底面に炉底か塔底底の成形状が残る。上面は鋼津で下方は銅 質高い。この地での鉄、銅兼用工房を示唆。	銅原料か。
同回 20 写真 63	銅材か 銅津	O 7 区	径5.2	底面に炉底か塔底底の成形状がある。上面は鋼津で、下方は 銅質高い。この地での鉄、銅兼用工房を示唆。	銅原料か。
同回 21 写真 63	銅津 椀形	O 7 区	径3.2+α	細く砕かれた鉄津は4点存在する。その内の1つ。底はやや輕 い。欠損旧時。底面に炉底の形状を残す。	
同回 22 写真 63	銅津 椀形	O 7 区	径6.8	椀形津の小さい完存例を開いた。底面に炉底の形状を残す。底 は軽くもなく重くもない。もっと厚く留れば23に近似か。	
同回 23 写真 63	銅津 椀形	O 7 区	径10.8	椀形津の大きい例を開いた。周囲の欠損は旧時に数回にわたり、 打欠かれている。底面は炉の旧状を示唆。	
第196回1 写真図版63	瓦塔 屋蓋	N30 E20第1 層O列か	屋蓋部片	軟。微。暗褐色。	瓦部を半截竹筋で施文し、裏面は浅 い陰線があり先端は垂木表現。
同回 2 写真 63	土師質 皿	E20 N50 O列か	口径9.0 高2.4	軟。微。シルト質。褐色。	口縁部の内・外面に油煙と灯芯痕。底 に輪轍右回転糸切あり。中世。
同回 3 写真 63	土師質 皿	E20 N50 O列か	口径8.8 高2.6	軟。微。シルト質。黄灰 色。	体部外面に輪轍目。底面に輪轍右回 転の糸切あり。古代・中世か不明。

図番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第196図4 写真図版63	土師質皿	E20N50第4層O列か	口径(10.8)	並。微シルト。黄灰色。体部外面に輪轍目あり。底面に輪轍右回転の糸切あり。古代・中世か不明。	
第197図1 写真図版64	須恵器小形甕	第1ピット	口径(28.4)	織。石英粒、含。灰黄色。内・外間に早い回転条痕あり。割口に粗痕が見え、長く挽出される。	東海擅入。
同図2 写64	埴輪円筒	第1ピット	最大径(15.2)	並。含。橙色。外面に刷毛目、内面に擦痕あり。割口に粗痕あり、全体に消耗している。	不明。
同図5 写64	壁体	第1ピット	厚2.8+α	にぶい橙色。中に2cm以上もある長いスサを一方指向して混入させている。質は全体的に粗で重い。何の壁体かは不明。	
同図6 写64	石製火打石	第1ピット	長5.8	石英材で、図中のトーン部は川端石の旧材面。稜線の頭は、打痕があり消耗している。	
第198図1 写真図版64	土師質皿	Cピット	口径(11.8)	並。シルト質。黄灰色。底面に輪轍左回転の糸切あり。内面に輪轍目あり。中世土師質土器。	
第199図1 写真図版64	須恵器住フタ鉢	Kビット2層	口径(13.6)	軟。雪母、微。黒灰色、焼。	底面に回転条痕、高台貼付。体部に輪轍目あり。
同図4 写64	鉄製品釘か	Kピット	長6.8	錆化は層状の剥離と直角方向のクラックがあるので古代鉄か。頭部は錆化で不明瞭。曲りは旧時。	
同図5 写64	鉄製品釘か	Kピット	長3.2+α	錆化は層状の剥離と直角方向のクラックがあるので古代鉄か。曲りは旧時。先は旧時欠損。頭部は調査時欠損。	
同図6 写64	鉄製品釘か	Kピット	長3.0+α	錆化は層状の剥離と直角方向のクラックがあるので古代鉄か。曲りは旧時。欠損は調査時。	
同図7 写64	鉄製品釘か	Kピット	長2.8+α	錆化は層状の剥離と直角方向のクラックがあるので古代鉄か。曲りは旧時。欠損は調査時。本質の付着あり。	
同図8 写64	鉄厚楕形埋	Kピット2住	長6.2+α	底面に伊藤痕あり。割れ口は旧時欠損。直径は10cm前後と推定される。	
第201図1 写真図版64	須恵器把手未記	出土地不明	長4.6+α	軟。微。灰白色。塊か跡の把手と考えられるが、県内では既出土例は存在する。	秋開製。
同図2 写64	土師質脚部L列か	出土地不明	脚部徑(12.8)	並。微。灰褐色。焼、酸化気味。	内・外間に輪轍目あり。全体に塗かかっている。須恵器生産末葉の製品。
同図3 写64	埴輪円筒	出土地不明	体部片	硬。微。橙色。	内・外間に刷毛目あり。割口に粗痕、突部の貼付などが見える。大形。
同図4 写64	土師質皿No.4	出土地不明	口径(8.0)	並。微。黄褐色。	底面に糸切。口縁部の内・外間に油煙付着。灯火跡か。中世土師質土器。
同図5 写64	土師質皿	出土地不明IV	口径(8.6)	並。微。にぶい橙色。	底面に輪轍右回転の糸切痕あり。内・外間に輪轍目あり。須恵器末葉。
同図9 写64	軟質陶壇か	出土地不明	体部片	軟。雪母粒、微。黒灰色。	近世～近代の製品で外間に文様の押圧あり。円孔に鉄製衝撃残存。
同図10 写64	羽口	出土地不明	小片	酸化部分は送風孔の先端近くまでおよぶ。胎土は粗で軽く、スサをはじめる。	
同図11 写64	石製品石臼	出土地不明L列かNo.7	径6.4+α	大型臼片で、横断面のふくらみの形状から上臼か。目溝は太く大まか。側面部に石ノミの跡あり。旧時欠損。	粗粒安山岩。

## 瓦類

瓦類は、古代では数少ない工業的なシステム製品であった。また瓦使用建物に対して製作地であった瓦屋は見込生産(計画生産)を行なう扱い、いわば一貫生産の背景に基づいて製作されていた。そのため観察に当たっては量産物と見なし、共通項目を作成して観察表とした。

凡例：例項は次のとおりである。瓦種は・男・女・童・字・字形などである。製作法・補填の項は瓦瓦一構巻作・一枚作・男瓦一寄木(組作)・半裁作・一枚作に区分し、構巻作は吉原真平(瓦桶巻作り)『考古学雑誌第58巻2号』1972にいう桶巻作りと共通の技法が主野地城では7世紀中頃から8世紀前半に広く使用されていたことが多くの観察によって確認され、寄木状の圧痕を残す場合にそれを認めてよい状況にある。それは女瓦ばかりではなく一部の男瓦にも認められている。しかし男瓦の多くは粘土円筒を2分割する半裁作(木津博明・大江正行『瓦類』「国分寺跡跡」群馬県瑞穂文化財調査事業団)によると考えられる回転条痕を表面に残しながらも、内面には寄木圧痕のない個体が多く存在する。その例もここでは半裁作と呼ぶことにする。それに対し、一枚作は西毛地域において、女瓦の側面部に布庄痕を残す例が認められるものの、大半の場合に接縫の根柢に残る個体が多く、その場合は、一枚作可能性の項に○ではなく×不記と記入した。粘土板剥取痕の項は、糸切が認められる場合に青・裏に付け〇を記入した。この項中に組作りの場合も、組作と記入した。粘土板接合は粘土角材から削ぎ取った粘土板(タラ)の接合面を指し、有無を○・なしと記入した。布の合せ目痕は構骨構に被せた布袋の布合せ目庄痕を意図している。布目の擦り消しは、ほぼ全面と部分があり、微細な擦痕は除外した。輪轍使用の有無は、女瓦の桶巻作りや男瓦の半裁作を輪轍・回転台(自走能力の高い。低いのがその点を考えている区段はむずかしい)で行なった場合に、回転条痕や条痕付くであろうとの技法定を裏付けるための項目の設定を行なった。叩き締めの方法・型式は手掌や櫛を用いての無文状態を素文とし、肩・格子叩などを記入した。瓦乾燥時の圧痕については、主体窓である笠窓跡群製瓦の特徴(西毛地域では吉井窓跡群製に多く見かける)とも言うべき乾燥法である。それは瓦の乾燥にあたり、複数の瓦の相互を利用来て掛け、その際の圧痕と推測される棒状、場合によると、圧痕の強い、曲率の浅い側に陽の布庄痕(側面部の布庄痕が付着したために陽状となる)が残れる個体もあった。側面部取回数は亂削の回数を指す多くの場合に、端面(広小口)側につれ多くの傾向があり、おおむねの丁寧さを捉えるための項目設定である。備考欄には製作地名を記入した。

## 上野國分尼寺跡

図版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・桶痕	一枚作 可能性	粘土板 刺剣	接合目 表○	布庄痕 なし	擦消 なし	繩縫 なし	叩技法	瓦乾燥 時圧痕	面取	備考	
7図2	S 1	女瓦	合、浅黄、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	格子	なし	欠	笠。	
3	S 1	女瓦	合、浅黄、軟	○	なし	表○	なし	なし	○	○	素文	なし	2	笠か。	
4	S 1	女瓦	微、灰、軟	不明	不明	表○	なし	なし	なし	不明	素文	なし	3	笠。笠記号。	
8図11	S 1	鏡瓦	微、灰、軟	一	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。国分寺式。	
12	S 1	鏡瓦	微、灰、軟	一	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
13	S 1	宇瓦	合、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	吉・藤。		
9図14	S 1	宇瓦	合、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	赤色。	
15	S 1	鏡瓦	微、灰、並	不明	不明	裏○	なし	なし	部分	不明	平行	なし	2	吉・藤。背布か。	
10図16	S 1	鬼瓦	黒、灰、並	なし	不明	粘塊	なし	なし	なし	なし	—	—	—	笠。背布目。	
17	S 1	鬼瓦	多、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	笠。		
11図1	S 2	鏡瓦	微、黃緑、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
2	S 2	宇瓦	微、灰白、軟	—	—	○	—	—	—	—	—	—	秋。		
12図1	S 3	鏡瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	素文	—	欠	秋。	
2	S 3	鏡瓦	合、灰白、並	—	—	—	—	—	—	—	素文	—	欠	吉。	
3	S 3	女瓦	微、浅黄、軟	眞蘿目	不明	なし	なし	なし	なし	なし	平行	なし	1	藤。	
4	S 3	女瓦	微、純灰、軟	不明	不明	表○	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠	乗、文字瓦。	
5	S 3	女瓦	微、浅黄、並	眞蘿目	不明	なし	なし	なし	なし	なし	平行	なし	1	藤。	
13図11	S 3	鏡瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
14図12	S 3	鏡瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
13	S 3	鏡瓦	合、灰、締	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	藤。	
14	S 3	宇瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
15	S 3	宇瓦	微、黄、硬	なし	不明	表○	なし	なし	部分	なし	素文	なし	欠	笠・藤。	
15図16	S 3	宇瓦	微、灰、並	○	なし	表○	○	○	なし	○	素文	なし	多	秋。	
16図1	S 5	宇瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	不明。	
2	S 5	女瓦	微、灰、硬	○	不明	なし	なし	なし	部分	なし	素文	ボジブ	欠	笠。	
17図3	S 6	鏡瓦	多、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉・藤。背布。	
4	S 6	鏡瓦	合、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	背布目。	
7	S 6	宇瓦	微、椎、軟	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	素文	なし	2	笠。	
9	S 6	宇瓦	合、灰、並	△	不明	なし	なし	なし	なし	なし	素文	なし	1	藤。	
18図1	S 7	鏡瓦	合、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
2	S 7	鏡瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
5	S 7	鏡瓦	合、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉・藤。背布目。	
6	S 7	鏡瓦	合、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	—	吉	背布目。	
8	S 7	單瓦	合、灰、硬	△	不明	なし	なし	なし	部分	なし	素文	なし	欠	乗・吉・観。	
19図10	S 7	宇瓦	微、灰、締	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	素文	なし	2	吉。刻印。	
20図11	S 7	宇瓦	微、灰、締	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	素文	なし	2	吉。刻印。	
21図1	S 7	鏡瓦	合、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。	
2	S 7	鏡瓦	微、椎、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
3	S 7	宇瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
4	S 7	男瓦段	合、灰瓦、締	半載作	なし	なし	なし	なし	なし	なし	○	繩多擦消	なし	3	吉。
5	S 7	男瓦	合、灰、並	半載作	不明	なし	○	なし	なし	なし	○	素文	なし	1	笠。
6	S 7	男瓦	合、灰、軟	不明	不明	裏○	なし	なし	なし	なし	△	素文	なし	吉。	
22図7	S 7	男瓦	微、灰白、硬	半載作	なし	○○	なし	なし	なし	なし	○	繩多擦消	△	3	乗・秋。
21図8	S 7	男瓦	微、灰白、軟	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	△	変形格子	なし	1	吉・両毛X。
22図9	S 7	女瓦	合、灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	○	なし	格子	なし	欠	笠。
10	S 7	女瓦	微、灰黄、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	○	なし	格子	なし	欠	笠。
11	S 7	女瓦	微、灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	部分	なし	格子	なし	欠	笠。
12	S 7	女瓦	微、椎、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	なし	繩單	なし	2	笠。
13	S 7	女瓦	微、灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	なし	繩單	なし	1	笠。
14	S 7	女瓦	微、灰白、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	なし	文様	なし	1	乘。
15	S 7	女瓦	合、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠	吉・藤・文字。
16	S 7	女瓦	微、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠	乗・藤・文字。
17	S 7	女瓦	合、黄緑、軟	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	なし	なし	素文	なし	2	笠。
23図20	S 7	鏡瓦	微、灰、硬	半載作	なし	なし	なし	なし	○	△	素文	なし	—	笠。背布目。	
21	S 7	鏡瓦	微、灰、締	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	乘・藤。	
22	S 7	鏡瓦	合、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	吉	背布目。	
23	S 7	鏡瓦	合、灰、軟	△	不明	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
24	S 7	鏡瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	

因版番号	出土位置	瓦 種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・桶痕	一枚作 可不可能	粘 土 板	布 压 直	糊 消	輪 輪	叩技法	瓦乾燥 時庄抜	面 取	備 考	
24回25	S 7	鐵瓦	含、灰、緑	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背面布目。	
26	S 7	鐵瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背面布目。	
27	S 7	鐵瓦	多、黒灰、緑	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背面布目。	
28	S 7	鐵瓦	含、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背面布目。	
29	S 7	鐵瓦	微、黃灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背面布目。	
30	S 7	鐵瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背面布目。	
31	S 7	鐵瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	秋。		
25回32	不明	鐵瓦	微、灰、軟	半裁作	なし	調○	なし	なし	○	削	なし	2	吉。	
26回33	S 7	字瓦	微、灰、軟	なし	不明	なし	なし	○	なし	跳單	布	2	額赤色、笠。	
25回34	S 7	字瓦	微、灰、硬	なし	不明	なし	なし	○	なし	跳單	なし	—	笠。	
26回35	S 7	字瓦	微、暗灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠	笠。	
36	S 7	字瓦	微、淡橙、軟	なし	不明	なし	なし	○	なし	素文	なし	2	額赤色、笠。	
27回37	S 7	字瓦	微、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	部分	なし	素文	なし	2	額赤色、笠。
38	S 7	字瓦	微、暗灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	3	笠。額赤色。	
39	S 7	字瓦	微、灰、硬	なし	不明	なし	なし	○	なし	素文	なし	欠	笠。額赤色。	
40	S 7	字瓦	微、黃灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
28回41	S 7	女瓦	含、灰、硬	なし	不明	〇〇	なし	なし	なし	なし	素文	なし	2	藤。
42	S 7	字瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	—	藤。	
29回43	S 7	字瓦	含、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	無	多	1	額赤色、吉。	
44	S 7	字瓦	含、灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠	額赤色、吉。	
45	S 7	字瓦	微、暗灰、軟	○	なし	表○	○	なし	部分	○	素文	なし	3	笠か。乘。
28回46	S 7	字瓦	微、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	無	なし	欠	秋、乘。	
29回47	S 7	字瓦	微、浅橙、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	3	額赤色、笠・藤。	
30回48	S 7	鬼瓦	微、灰、並	—	—	〇〇	—	—	—	背面部	なし	多	背面布目。	
49	S 7	男瓦	微、灰、硬	半裁作	不明	なし	なし	なし	○	素文	なし	1	東・藤。	
50	S 7	女瓦	微、暗灰、軟	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	素文	なし	2	笠。刻印跡。	
31回1	S 9	字瓦	含、灰、並	なし	不明	半裁作	なし	なし	○	—	—	欠	吉・乘。	
2	S 9	男瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	平行	なし	欠	笠。	
3	S 9	男瓦	多、灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	△	素文	なし	1	吉。文字瓦。	
4	S 9	女瓦	含、純橙、並	なし	不明	なし	なし	○	なし	格子跳單	なし	欠	笠。叩2種。	
5	S 9	女瓦	合、灰白、軟	なし	不明	なし	なし	○	なし	格子子	なし	2	笠。叩板痕。	
6	S 9	女瓦	微、灰、並	なし	不明	なし	なし	○	なし	格子	なし	欠	笠。	
7	S 9	女瓦	含、褐色、軟	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	平行	なし	2	吉。	
8	S 9	女瓦	微、灰、黃、軟	△	不明	表○	なし	なし	なし	調多	なし	1	秋。	
32回9	S 9	女瓦	微、黃、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠	笠。印跡。	
33回4	N 2	鐵瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	藤・吉。	
5	N 2	鐵瓦	微、灰白、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠		
6	N 2	男有段	微、灰、綠	半裁作	なし	なし	なし	○	なし	○	素文	なし	3	笠。
7	N 2	男有段	微、灰白、硬	半裁作	なし	裏○	なし	なし	○	素文	なし	欠	笠か。	
8	N 2	男有段	微、灰、綠	半裁作	なし	表△	なし	なし	なし	調多	なし	1	秋か。	
9	N 2	男瓦	微、灰、綠	半裁作	なし	裏○	なし	なし	○	素文	なし	1	笠。	
10	N 2	女瓦	微、淺黃、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	格子	なし	欠	笠。	
11	N 2	女瓦	多、灰、軟	○	なし	表○	なし	なし	なし	調多擦消	なし	2	吉。	
34回12	N 2	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	〇〇	なし	なし	なし	素文	なし	1	吉。	
13	N 2	女瓦	微、灰白、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	3	藤。	
36回2	N 6	鐵瓦	含、灰、緑	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	藤。	
3	N 6	鐵瓦	合、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠	吉。	
4	N 6	男有段	微、灰、綠	半裁作	なし	なし	なし	○	なし	○	素文	なし	3	東。
5	N 6	女瓦	微、灰黃、軟	なし	不明	なし	なし	○	なし	格子	なし	4	笠。	
6	N 6	女瓦	合、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	格子	△	2	笠か。字格子
7	N 6	女瓦	多、標灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	4	吉。	
8	N 6	女瓦	多、黃灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠	吉。文字瓦。	
9	N 6	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠	吉。文字瓦。	
38回1	N 8	男瓦	合、灰、緑	○	なし	紐○	なし	なし	なし	○	素文	なし	2	吉。
44回88	講堂	鐵瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
89	講堂	鐵瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背面布目。	
90	講堂	鐵瓦	微、淺黃、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
91	講堂	鐵瓦	微、淺黃、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
92	講堂	鐵瓦	微、黑褐、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背面布目。	
93	講堂	鐵瓦	合、灰、緑	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背面布目。	

## 第6篇 出土遺物

図版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・桶痕	一枚作		粘土板 合目	布压痕 接合	糊縫	叩技法	瓦乾燥 時圧痕	面取	備考	
					可能性	剥取								
44図94	講堂	織瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
95	講堂	織瓦	微、灰白、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉・笠か。	
96	講堂	織瓦	微、灰、緋	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
97	講堂	織瓦	微、灰白、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
98	講堂	織瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
99	講堂	織瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
100	講堂	織瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。背布目。	
101	講堂	織瓦	微、浅黄、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉・藤。背布	
102	講堂	織瓦	微、浅黄、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	2	秋。	
45図103	講堂	織瓦	微、灰白、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	秋。	
44図104	講堂	織瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	秋。	
45図105	講堂	織瓦	少、灰、緋	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背布目。	
106	講堂	織瓦	含、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背布目。	
107	講堂	織瓦	含、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	2	吉。背布目。	
108	講堂	織瓦	含、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	2	吉。背布目。	
109	講堂	織瓦	含、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	3	吉。背布目。	
44図110	講堂	織瓦	含、灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	△	素文	なし	3	吉。背布目。
45図111	講堂	織瓦	多、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背布目。	
112	講堂	織瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背布目。	
113	講堂	織瓦	微、並、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背布目。	
114	講堂	織瓦	多、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背布目。	
115	講堂	織瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	吉。背布目。	
46図116	講堂	宇瓦	微、灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	○	なし	索文	なし	2	笠。
117	講堂	宇瓦	微、浅黄、軟	なし	不明	なし	なし	なし	○	なし	簡単	なし	2	笠。
118	講堂	宇瓦	微、黃灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	1	笠。	
119	講堂	宇瓦	微、黃灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	索文	なし	1	笠。
120	講堂	宇瓦	微、灰白、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
121	講堂	宇瓦	微、黃灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
122	講堂	宇瓦	含、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	2	吉。	
123	講堂	宇瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	2	吉。藤。	
124	講堂	宇瓦	多、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	索文	なし	吉。	
125	講堂	宇瓦	微、灰白、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	索文	なし	3	秋。
47図126	講堂	男有段	微、灰白、硬	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	3	笠。
127	講堂	男有段	微、灰白、並	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	欠	笠。
128	講堂	男有段	微、灰白、緋	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	繩多擦消	なし	笠。	
129	講堂	男有段	多、灰白、硬	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	2	吉。
130	講堂	男有段	微、灰、軟	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	1	笠。
131	講堂	男瓦	微、灰、緋	△	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	2	笠。
132	講堂	男瓦	微、黃灰、硬	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	1	笠。
133	講堂	男瓦	含、灰、硬	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	2	笠。
134	講堂	男瓦	微、灰、軟	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	3	秋。
135	講堂	男瓦	微、灰、軟	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	索文	なし	2	秋。側御出段。
136	講堂	男瓦	微、灰、緋	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	なし	索文	なし	1	中か。
137	講堂	男瓦	含、灰、緋	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	なし	繩	なし	1	西毛X・中。
138	講堂	男瓦	合、灰、緋	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	なし	繩	なし	3	西毛X・中。
48図139	講堂	女瓦	微、檀、軟	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	なし	格子	なし	欠	笠。
140	講堂	女瓦	微、白灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	○	格子	なし	2	笠。
141	講堂	女瓦	微、灰、硬	なし	不明	○○	なし	なし	なし	○	格子	なし	欠	笠。
142	講堂	女瓦	微、黃灰、軟	なし	不明	○○	なし	なし	なし	○	簡単	なし	2	笠。
143	講堂	女瓦	微、黃灰、軟	なし	不明	○○	なし	なし	なし	○	簡単	なし	2	笠。
49図144	講堂	女瓦	合、灰、並	なし	不明	○○	なし	なし	なし	○	簡単	なし	2	笠。
49図145	講堂	女瓦	微、鈍灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	○	簡単	なし	欠	笠。
49図146	講堂	女瓦	微、暗灰、軟	なし	不明	○○	なし	なし	なし	○	簡単	なし	2	笠。
48図147	講堂	女瓦	微、灰白、軟	なし	不明	○○	なし	なし	なし	なし	大格子	なし	1	秋。
148	講堂	女瓦	微、灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	繩多	なし	4	秋。
149	講堂	女瓦	微、灰白、軟	○	なし	なし	なし	なし	なし	なし	繩多	なし	2	秋。離砂。
150	講堂	女瓦	合、灰白、並	なし	不明	表○	なし	なし	△	なし	繩多T	なし	2	秋。
49図151	講堂	女瓦	微、灰白、軟	○	なし	表○	なし	なし	なし	なし	平行	なし	欠	秋。
152	講堂	女瓦	含、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	繩多擦消	なし	3	中。
153	講堂	女瓦	微、褐灰、軟	○	なし	表△	なし	なし	部分	○	繩多擦消	なし	1	笠。小形女瓦。

図版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・模痕	一枚作 可能性	粘 土 板	布 庄 直	輪	叩技法	瓦乾燥 時直痕	面取	備 考	
49回154	講堂	女瓦	微、灰白、硬	△	不明	なし	なし	なし	○	繩多擦消	なし	2 乘。小形女瓦。	
155	講堂	女瓦	微、灰、軟	○	なし	表○	なし	なし	○	素文	なし	3 3 竪。記号。	
156	講堂	女瓦	合、灰白、硬	○	なし	表○	なし	なし	○	素文	なし	3 吉。	
157	講堂	女瓦	合、浅黄、軟	なし	不明	組○	なし	なし	○	素文	なし	2 吉。	
50回158	講堂	女瓦	多、黃橙、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	3 吉。文字瓦。	
159	講堂	女瓦	微、椎、軟	なし	不明	表○	なし	なし	部分	格子	△	2 竪。文字瓦。	
160	講堂	女瓦	微、灰、軟	○	なし	○○	なし	なし	なし	格子	△	2 竪。文字瓦。	
161	講堂	女瓦	微、暗灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	○	素文	なし	2 竪。記号。	
162	講堂	女瓦	微、暗灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	○	素文	なし	2 竪。葉痕。	
163	講堂	女瓦	微、椎、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。	
164	講堂	女瓦	微、灰、硬	なし	不明	○○	なし	なし	なし	素文	なし	2 竪。文字瓦。	
165	講堂	女瓦	微、椎、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	2 竪。文字瓦。	
166	講堂	女瓦	微、黃橙、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	2 竪。文字瓦。	
167	講堂	女瓦	微、純鈍、軟	なし	不明	なし	なし	なし	○	素文	なし	欠 竪。文字瓦。	
168	講堂	女瓦	微、灰白、縫	なし	不明	○○	なし	なし	○	素文	なし	2 乘。文字瓦。	
169	講堂	男瓦	微、灰白、硬	なし	不明	なし	なし	なし	△	素文	なし	秋か。文字瓦。	
170	講堂	男瓦	合、淡灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	3 吉。文字瓦。	
171	講堂	男瓦	多、灰褐、縫	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	素文	なし	2 吉。文字瓦。	
172	講堂	女瓦	合、灰黃、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	2 吉。文字瓦。	
173	講堂	女瓦	多、黃灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。文字瓦。	
51回174	講堂	女瓦	多、灰白、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	3 吉。文字瓦。	
175	講堂	女瓦	合、灰白、並	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	素文	なし	4 吉。墨書。	
176	講堂	女瓦	多、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	1 吉。文字瓦。	
177	講堂	女瓦	多、灰、縫	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。文字瓦。	
178	講堂	女瓦	微、灰、縫	なし	不明	なし	なし	なし	△	素文	なし	欠 竪。文字瓦。	
179	講堂	女瓦	多、灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。文字瓦。	
180	講堂	女瓦	多、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。印鉛。	
181	講堂	女瓦	多、灰、縫	なし	不明	なし	なし	なし	○	素文	なし	1 吉。文字瓦。中世瓦。	
182	講堂	男瓦	微、灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。文字瓦。	
54回4	3205	鐵瓦	微、椎、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	欠 竪。	
5	32?	鐵瓦	微、黃灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	秋。	
6	3201	鐵瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	吉。	
7	3203	甲瓦	合、灰、硬	△	なし	表○	○	なし	部分	△ 刷	なし	欠 吉。	
5 5回1	3205	女瓦	微、灰、縫	なし	不明	○○	なし	なし	なし	素文	なし	1 黄。	
56回2	4716	鐵瓦	合、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠 竪。	
3	4716	鐵瓦	暗灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	吉。	
57回1	南門1	鐵瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	秋。	
60回1	E方向	女瓦	微、灰白、軟	△	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。文字瓦。	
63回240	東門	鐵瓦	微、灰、硬	—	—	—	—	—	—	—	—	3 竪。背布目。	
41	東門	鐵瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	4 竪。背布目。	
42	東門	鐵瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	1 吉。	
43	東門	瓦	微、灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	格子	△	2 竪。文字瓦。
44	東門	女瓦	微、黃灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	部分	なし	繩多擦消	なし	2 墓。吉。文字。
64回45	東門	女瓦	微、灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠 竪。二次加工。
65回2	W5	男有段	微、灰、軟	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	素文	なし	欠 吉。
3	W5	女瓦	微、灰、軟	△	なし	表○	なし	なし	なし	变形格子	なし	2 西毛X。	
4	W5	女瓦	微、暗灰、並	—	不明	○○	なし	なし	なし	繩单	△	1 笠。	
5	W5	女瓦	合、純鈍、並	○	なし	表○	なし	なし	○	繩多擦消	△	2 笠。	
6	W5	女瓦	微、灰、軟	○	なし	なし	なし	○	なし	繩多	なし	3 秋。	
66回5	西門	男瓦	微、灰白、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	繩	なし	2 中か不明。	
6	西門	女瓦	微、灰白、軟	○	なし	表○	なし	なし	なし	○	繩多擦消	なし	2 笠。
7	西門	女瓦	合、褐灰、軟	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子	なし	2 笠。	
8	西門	女瓦	合、純鈍、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	变形格子	なし	吉。	
9	西門	女瓦	微、灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠 吉。	
67回2	不明	鐵瓦	微、黃橙、軟	—	—	—	—	—	—	○	繩多擦消	なし	欠 秋。
3	未注記	男有段	合、灰白、硬	半截作	なし	裏○	なし	なし	なし	○	繩多擦消	なし	2 吉。
4	不明	女瓦	微、黃橙、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	2 笠。文字瓦。	
5	講堂II	女瓦	微、灰白、軟	なし	不明	○○	なし	なし	○	素文	なし	2 笠。記号。	
6	不明	女瓦	多、灰、並	なし	不明	○○	なし	なし	なし	素文	なし	2 吉。	
7	不明	鬼瓦	微、灰、縫	—	—	裏○	—	—	—	繩多	—	笠。乘。	

第6篇 出土遺物

図版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・模倣	一枚作 可能性	粘土板 剥取	接合 合目	布压痕 擦消	輪轂	叩技法	瓦乾燥 時仕様	面取	備考	
68図11	未注記	繩瓦	微、灰、並	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
12	2701	繩瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
13	4202	繩瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。	
14	未注記	繩瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	秋か。	
15	未注記	字瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	笠。藤。	
69図1	西門	女瓦	66図8に同じ	※文字瓦集成第69~75図は上野国尼寺と二寺中間地域と両遺跡を合せて作成した。図版中と表中の出土位置欄に中○は中間地域を指し、他は上野国分尼寺資料である。										
2	S 7	女瓦	22図14に同じ	※同上。										
3	講堂	女瓦	50図60に同じ	※同上。										
4	講堂	女瓦	50図59に同じ	※同上。										
5	東門	女瓦	63図43に同じ	※同上。										
6	S 9	女瓦	31図5に同じ	※同上。										
7	講堂	女瓦	50図16に同じ	※同上。										
8	講堂	女瓦	50図17に同じ	※同上。										
9	S 7	女瓦	22図17に同じ	※同上。										
10	S 7	女瓦	22図9に同じ	※同上。										
11	S 7	女瓦	22図11に同じ	※同上。										
12	S 1	女瓦	7図2に同じ	※同上。										
70図13	S 7	女瓦	22図10に同じ	※同上。										
14	講堂	女瓦	51図8に同じ	※同上。										
15	講堂	女瓦	50図8に同じ	※同上。										
16	講堂	女瓦	50図9に同じ	※同上。										
17	不明	女瓦	67図5に同じ	※同上。										
18	講堂	女瓦	50図15に同じ	※同上。										
19	講堂	女瓦	50図17に同じ	※同上。										
20	講堂	女瓦	50図18に同じ	※同上。										
21	S 9	男瓦	31図3に同じ	※同上。										
22	講堂	女瓦	51図17に同じ	※同上。										
23	S 7	女瓦	22図15に同じ	※同上。										
24	講堂	男瓦	50図17に同じ	※同上。										
25	講堂	女瓦	50図63に同じ	※同上。										
71図26	講堂	女瓦	51図16に同じ	※同上。										
27	東門	女瓦	63図44に同じ	※同上。										
28	講堂	女瓦	50図19に同じ	※同上。										
29	講堂	女瓦	51図16に同じ	※同上。										
30	講堂	男瓦	50図19に同じ	※同上。										
31	講堂	女瓦	51図16に同じ	※同上。										
32	S 3	女瓦	12図4に同じ	※同上。										
33	S 1	女瓦	7図4に同じ	※同上。										
34	講堂	女瓦	50図16に同じ	※同上。										
35	講堂	女瓦	51図15に同じ	※同上。										
36	講堂	女瓦	51図18に同じ	※同上。										
37	講堂	女瓦	51図19に同じ	※同上。										
38	S 7	女瓦	22図16に同じ	※同上。										
39	E方向	女瓦	60図1に同じ	※同上。										
40	不明	女瓦	67図4に同じ	※同上。										
71図41	S 7	女瓦	微、黃灰、軟	なし	なし	なし	なし	なし	なし	素文	なし	欠	笠。	
42	S 3	女瓦	微、淡褐、並	○	不明	○○	なし	なし	なし	格子	なし	1	笠。	
43	S 9	女瓦	微、灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	なし	索文	なし	1	笠。文字瓦。	
44	S 7	女瓦	含、灰、硬	△	不明	○○	なし	なし	なし	索文	なし	欠	笠。記号か。	
45	S 3	女瓦	微、灰、並	△	不明	表○	なし	なし	なし	素文	なし	欠	笠。文字瓦。	
46	S 7	女瓦	微、灰、硬	なし	不明	組紐	なし	なし	○	○	なし	欠	笠。文字瓦。	
47	未注記	女瓦	微、淡褐、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	索文	なし	2	桶底。笠。字。	
48	中E11	男瓦	微、灰色、並	半截作	なし	なし	なし	なし	なし	○	平行	なし	1	束。藤。真貫。
49	S 7	女瓦	微、灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	索文	なし	2	笠。藤。文字。	
50	S 1	女瓦	含、黒灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	索文	○	2	笠。藤。文字。	
72図51	S 7	男瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	3	笠。藤。文字。	
52	中G 5	女瓦	微、灰、薄	なし	不明	なし	なし	なし	なし	索文	なし	2	笠。吉。	
53	S 3	女瓦	微、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	索文	なし	欠	笠。文字瓦。	
54	S 3	女瓦	微、灰、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	索文	なし	2	笠。藤。	
55	S 3	女瓦	微、淡褐、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	索文	△	2	笠。藤。	

図版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・種類	一枚作 可能性	粘土板	布压痕	織繩	叩技法	瓦乾燥 時圧痕	面取	備考
73図56	未注記	女瓦	合、灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	藤。文字瓦。
57	S 3	女瓦	微、灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	藤。文字瓦。
58	S 7	女瓦	微、暗灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。藤。文字。
59	S 3	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。藤。文字。
60	講堂	女瓦	微、浅橙、軟	なし	不明	表○	△	なし	素文	なし	欠	吉。藤。文字。
61	S 3	女瓦	合、黒灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	1	吉。藤。眞麗。
62	S 7	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	1	吉。藤。文字。
63	S 3	男瓦	合、灰、硬	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。藤。文字。
64	S 7	男瓦	微、灰、軟	なし	△	なし	なし	なし	素文	なし	欠	吉。藤。文字。
74図65	S 7	女瓦	合、黒灰、縹	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。
66	中 0 5	女瓦	微、縹、並	○	なし	表○	なし	なし	素文	なし	4	飛。吉。記号。
67	中 L 1	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	吉。文字瓦。
68	S 7	女瓦	多、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	吉。文字瓦。
69	中 N 4	女瓦	微、暗緑、並	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	吉。文字瓦。
70	S 3	女瓦	合、灰、暗緑	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。
71	S 7	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。
72	S 9	女瓦	多、黒灰、縹	△	不明	表○	○	なし	素文	なし	2	吉。文字瓦。
73	溝か	男瓦	微、黒灰、縹	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。文字瓦。
74	中 G 3	男瓦	微、灰、並	△	不明	表○	なし	なし	素文	○	3	飛。文字瓦。
75	中 F 1	男瓦	微、黄灰、並	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。
76	該当なし	男瓦	微、灰、並	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	吉。文字瓦。
75図77	S 3	男瓦	合、灰、硬	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。
78	中 L 2	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	吉。
79	S 7	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	○	2	吉。記号か。
80	中 O 1	男瓦	微、灰、並	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	吉。記号。
81	未注記	女瓦	微、淡灰、△	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	飛。文字瓦。
82	S 3	男瓦	合、灰、硬	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。文字瓦。
83	S 1	女瓦	合、暗灰、硬	—	不明	表○	—	—	—	—	—	吉。文字瓦。
84	中 G 5	女瓦	微、黄灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	欠	飛。記号。
85	講堂	女瓦	微、灰、縹	△	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。飛。文字。
86	S 3	女瓦	微、灰、縹	△	不明	表○	○	なし	素文	なし	3	飛・秋。文字。
87	未注記	女瓦	微、灰、並	○	なし	表○	なし	部分	織多+撫	なし	3	秋。文字瓦。
88	S 3	女瓦	微、灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	素文	△	欠	秋。文字瓦。
89	S 7	男瓦	微、灰、軟	なし	△	○○	なし	なし	素文	△	2	秋。

## 上野国分二寺中間地域

図版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・種類	一枚作 可能性	粘土板	布压痕	織繩	叩技法	瓦乾燥 時圧痕	面取	備考
77図2	A 1	女瓦	微、灰赤、並	なし	不明	表○	なし	○	なし	斜格子	なし	笠。
80図1	A 4	女瓦	合、灰、並	なし	なし	表○	なし	なし	素文	なし	2	吉。藤。
2 A 4	女瓦	微、灰白、並	なし	不明	表○	なし	なし	部分	正格子	なし	笠。	
97図1	C 3	鬼瓦	微、灰、軟	—	—	—	—	—	—	—	—	中世。
101図1	D 1	女瓦	微、灰、縹	○	なし	表○	なし	なし	○	織多+撫	なし	2
2 D 1	女瓦	合、灰、縹	△	なし	不明	表○	なし	なし	斜格子	なし	笠。	
107図1	E 3	女瓦	微、黃緑、軟	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	1	笠か。
2 E 3	男瓦	微、灰、硬	△	半裁作	なし	表○	なし	なし	○	素文	なし	2 笠。
109図3	E 5	男瓦	微、黃緑、縹	△	半裁作	なし	表○	なし	○	素文	なし	欠
4	E 5	女瓦	微、黄灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	素文	なし	2	笠。
5	E 5	女瓦	合、褐灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	部分	素文	なし	2 笠。
6	E 5	女瓦	微、黒、縹	なし	不明	表○	なし	なし	なし	平行	なし	3 笠。吉。
113図6	E 8	男瓦	多、灰白、並	半裁作	なし	表○	なし	なし	○	素文	表○	1 吉か。
7	E 8	女瓦	微、灰、縹	△	不明	表○	なし	なし	部分	織多	なし	3 番。織叩砂付。
8	E 8	女瓦	微、灰、並	多、灰、縹	なし	不明	表○	なし	なし	部分	笠△	2 吉。
9	E 8	女瓦	微、灰、縹	なし	不明	表○	なし	なし	なし	平行	なし	4 秋。
114図11	E 8	鎌瓦	合、灰色、硬	△	不明	表○	△	なし	△	素文、削	なし	3 吉。
115図5	E 9	女瓦	合、黒灰、縹	△	不明	表○	○	△	素文	なし	3 秋。乘・藤。	
116図14	E 9	宇瓦	微、灰、硬	なし	不明	表○	○	△	部分	素文	なし	△ 秋。
119図5	E 12	女瓦	合、黄灰、軟	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	4 秋。	

## 第6篇 出土遺物

國版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・輪廻	一枚作 可能性	粘土板 剥取	布压痕 接合	合目 擦消	輪廻	叩技法	瓦乾燥 時圧痕	面取	備考	
119回6	E 12	女瓦	合、灰、縫	○	なし	表○	なし	なし	○	繩多+撫	なし	3	樂・吉。	
122回4	F 2	女瓦	微、灰、並	なし	不明	表○	なし	なし	なし	斜格子	なし	欠笠。		
123回2	F 3	男瓦	合、灰白、並	半截作	なし	なし	なし	なし	○	繩結+撫	なし	欠吉・樂。		
124回3	F 3	雌瓦	微、灰、並	一	一	一	一	一	一	一	一	欠	中世・洪積。	
127回3	F 6	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表○	なし	なし	なし	格子	なし	欠笠。		
128回4	F 7	男瓦	多、灰白、縫	△	不明	なし	なし	なし	なし	なし	なし	欠吉・中・月。		
5	F 7	女瓦	微、灰、縫	△	不明	なし	なし	なし	△	繩多	なし	欠吉・偶叩離砂。		
129回7	F 7	宇瓦	多、灰黒、縫	なし	不明	なし	なし	○	なし	素文	なし	欠	樂赤色。吉。	
131回3	F 9	棲瓦										近代瓦		
134回1	G 1	女瓦	微、淡黄、軟	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	細格子	なし	欠笠。	
136回1	G 2	女瓦	微、灰、縫	なし	不明	○○	なし	なし	なし	格子	なし	欠笠。		
138回3	G 3	雌瓦	微、灰、並	一	一	一	一	一	一	一	一	欠	中世・洪積。	
4	G 3	雌瓦	微、灰、軟	一	一	一	一	一	一	一	一	欠	中世・洪積。	
141回2	G 6	男瓦	明褐、並	半截作	なし	なし	なし	なし	○	素文	なし	3	笠。	
3	G 6	男瓦	合、灰、並	不明	なし	なし	なし	なし	△	繩單	なし	1	吉・中・月。	
146回8	H 4	男瓦	合、灰、硬	半截作	なし	なし	なし	なし	○	○	素文	△	1吉。	
9	H 4	女瓦	微、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	○	○	素文	なし	欠笠。	
10	H 4	女瓦	微、棕、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	格子	なし	欠笠。		
11	H 4	女瓦	合、灰褐、軟	なし	不明	なし	なし	なし	なし	变形格子	なし	欠笠・笠・樂。		
12	H 4	女瓦	微、灰白、硬	半截作	なし	なし	なし	なし	○	表○	繩多	なし	欠吉・樂。	
13	H 4	女瓦	多、灰、並	○	なし	表○	○	なし	○	○	素文	なし	2吉。	
149回6	H 6	男瓦	微、黃灰、硬	半截作	なし	なし	なし	なし	○	繩多擦消	なし	2	樂。	
7	H 6	男瓦	合、灰、縫	半截作	なし	なし	なし	なし	○	素文	2	吉。		
8	H 6	女瓦	微、灰、縫	○	なし	表○	なし	なし	○	素文	○裏	3	秋。	
9	H 6	女瓦	合、灰、硬	○	△	なし	なし	なし	なし	表○	繩多	なし	3吉。	
10	H 6	女瓦	多、灰、並	なし	なし	表○	なし	なし	なし	○	素文	なし	中・月。	
153回3	J 1	雌瓦	多、灰、縫	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	△	繩削+撫	なし	2吉。	
4	J 1	男有段	黃、灰、軟	半截作	なし	なし	なし	なし	△	繩多擦消	なし	1秋。		
5	J 1	界有段	微、灰、軟	半截作	不明	裏○	なし	なし	なし	○	素文	1笠。		
6	J 1	男有段	多、黃、硬	半截作	なし	裏○	なし	なし	なし	○	素文	なし	2吉・樂。	
7	J 1	男瓦	合、灰、縫	半截作	なし	裏○	なし	なし	なし	○	繩多擦消	裏△	2秋・樂。	
8	J 1	女瓦	微、灰黑、硬	なし	不明	裏○	なし	なし	部分	なし	斜格子	なし	欠笠。	
9	J 1	女瓦	微、黃灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	斜格子	なし	欠笠。	
10	J 1	女瓦	合、灰、並	なし	不明	○○	なし	なし	部分	なし	斜格子	なし	欠笠。	
11	J 1	女瓦	微、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	斜格子	なし	笠。	
12	J 1	女瓦	合、灰、硬	なし	不明	表△	なし	なし	部分	なし	斜格子	なし	1笠。	
13	J 1	女瓦	微、灰、縫	なし	不明	○○	なし	なし	部分	なし	斜格子	なし	笠。	
14	J 1	女瓦	微、硬	なし	不明	表△	なし	なし	部分	なし	米格子	なし	2笠。	
15	J 1	女瓦	微、淡黄、軟	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	大格子	なし	欠秋。	
16	J 1	女瓦	微、灰、縫	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	大格子	なし	3笠・樂。	
17	J 1	女瓦	合、灰、縫	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	平行叩	なし	2吉。	
155回20	J 1	瓦不明	微、淡黄、並	一	一	一	一	一	一	一	一	一	欠吉。	
21	J 1	宇瓦	微、灰、並	一	一	一	一	一	一	一	一	一	欠吉。	
22	J 1	宇瓦	合、灰、縫	一	一	一	一	一	一	一	一	一	吉。	
156回3	J 2	男有段	微、灰、縫	半截作	なし	なし	なし	なし	○	素文	なし	欠笠。		
4	J 2	男瓦	微、灰、軟	半截作	なし	不明	○○	なし	なし	○	素文	1笠。	寄木痕。	
5	J 2	女瓦	微、灰、縫	なし	一	なし	なし	一	一	撫	一	一笠。		
6	J 2	鬼瓦	合、淡黄、並	一	不明	表○	なし	なし	一	繩多擦消	なし	2樂。		
7	J 2	女瓦	微、灰、並	なし	一	なし	なし	一	一	一	一	一笠。		
157回8	J 2	雌瓦	合、灰、硬	一	一	一	一	一	一	一	一	一	欠吉。	
158回5	J 3	女瓦	微、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	平行叩	なし	2樂。		
159回11	J 3	雌瓦	微、灰、縫	一	一	一	一	一	一	一	一	一	欠吉。	
160回4	J 4	男瓦	微、灰、縫	なし	不明	なし	なし	なし	なし	平行叩	なし	欠笠。		
5	J 4	女瓦	合、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	格子	なし	欠笠。		
6	J 4	女瓦	多、灰、硬	なし	不明	なし	なし	なし	なし	素文	裏△	3吉。		
161回2	K 1	女瓦	微、灰、縫	なし	不明	なし	△	なし	部分	なし	格子	なし	笠。	
2	K 2	女瓦	微、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	部分	なし	斜格子	なし	欠笠。	
165回5	L 1	男有段	微、灰、並	半截作	なし	裏○	なし	なし	なし	○	素文	2吉・樂。		
6	L 1	男瓦	微、灰、並	半截作	なし	裏○	なし	なし	なし	○	素文	2笠。		
168回6	L 3	女瓦	多、灰、硬	不明	不明	脚?	なし	なし	部分	なし	素文	なし	欠吉。	

図版番号	出土位置	瓦種	胎土・色調 ・焼成	製作法 ・桶底	一枚作 可能性	粘土板	布压直 接合	糊類	叩撃法	瓦乾燥 時圧痕	面取	備考
169図6	L 4 7 8 9	男有段 女瓦 女瓦 女瓦	合、灰、硬 微、灰、並 微、灰、硬 微、灰、硬	半裁作 なし 不明 なし 不明	裏○ 表○ 表○ 表○	なし なし なし なし	なし なし なし なし	なし なし なし なし	○ ○ ○ ○	繩多擦消 格子 繩多 平行叩	なし なし なし なし	2 東。 笠。 東。 東。
170図2	M 1 3	女瓦 女瓦	合、灰、燒 多、灰、燒	不明 半裁作 なし	組み ○○	なし なし	なし なし	なし なし	○	平行叩	なし なし	欠 吉。
174図6	M 5 7	男瓦 男有段 多、灰、燒	合、灰、燒 微、灰、並 微、灰、硬	不明 半裁作 なし	表○ 表○ 表○	なし なし なし	なし なし なし	なし なし なし	○	素文	なし なし	1 吉。
175図6	M 6 7	女瓦 女瓦	合、灰、燒 微、灰、並 微、灰、硬	不明 半裁作 なし	表○ 表○ 表○	なし なし なし	なし なし なし	なし なし なし	○	斜格子 繩单	なし なし	欠 笠。 笠。
180図4	N 2 5 N 2 6	女瓦 女瓦 女瓦	微、灰白、並 微、灰、黃 微、灰、並	不明 不明 不明	表○ 表○ 表○	なし なし なし	なし なし なし	なし なし なし	○	格子 素文 素文	なし なし なし	1 中世。 1 中世。 1 中世。
180図1	N 3 2 3 4	男有段 男有段 女瓦 女瓦	微、黑灰、軟 微、灰、燒 微、灰、燒 微、黃橙、硬	半裁作 なし 半裁作 なし 不明	裏○ 裏○ 表○ 表○	なし なし なし なし	なし なし なし なし	なし なし なし なし	○	素文 素文 素文 格子	なし なし なし なし	2 笠。 2 吉。 欠 笠。
182図16	N 3	鉢瓦	微、灰、燒	—	—	—	—	—	—	—	—	欠 笠。
181図4	N 4 5 6 7 8 9 10 11 12	男有段 男瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦	合、灰、燒 微、灰、軟 微、灰、燒 微、灰、並 微、灰、燒 合、灰、燒 微、赤褐、硬 含、椎、軟 合、灰、燒	半裁作 なし 半裁作 なし 不明 半裁作 なし 不明 半裁作 なし 不明	裏○ 表○ 裏○ 裏○ 表○ 表○ 表○ 表○ 表○	なし なし なし なし なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし なし なし なし なし	なし なし 部分 部分 ○ なし なし なし なし	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	素文 素文 格子 格子 格子 格子 素文 素文 素文	なし なし なし なし なし なし なし なし なし	3 中世。 笠。 欠 笠。 欠 笠。 笠。 笠。 笠。
182図17	N 4	鉢瓦	合、灰、燒	—	—	—	—	—	—	—	—	欠 吉。
183図1	N 5 2	女瓦 女瓦	合、椎、軟 微、黑、並	なし なし	不明 不明	表○ 表○	なし なし	なし なし	なし なし	平行	なし なし	西毛不毛。 笠。
184図2	N 6	女瓦	微、灰、燒	なし	不明	—	—	—	—	繩多T	なし	欠 東。
185図5	O 1 2 3 4 5 6	男有段 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦	微、灰、燒 微、灰、軟 微、灰、燒 合、灰、軟 微、灰、燒 微、灰、燒	半裁作 なし ○ なし なし なし ○	表○ 表○ 表○ 表○ 表○ なし	なし なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし なし	○ ○ ○ ○ ○ ○	素文 素文 格子 格子 格子 平行	なし なし 1 笠。 1 笠。 1 笠。 1 笠。	
190図11	O 5 12	男瓦 男瓦	微、灰、燒 微、灰、燒	半裁作 なし	裏○ 表○	なし なし	なし なし	なし なし	○ ○	素文 素文	なし 表○	2 秋。 1 笠。
191図13	O 5 14 15 16 17 18 19	女瓦 女瓦 男瓦 女瓦 女瓦 女瓦 宇瓦	微、灰、燒 微、灰、燒 微、灰、軟 微、灰、燒 微、灰、燒 微、灰、軟 微、灰、燒	なし 不明 半裁作 なし 不明 裏○ 表○	○○ 表○ — — 表○ ○○ 表○	なし なし なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし なし なし	なし なし 部分 — なし なし なし	○ ○ — — ○ ○ ○	格子 素文 素文 格子 素文 素文 素文	なし 笠○ 2 中世。 1 中世。 1 中世。 1 中世。	
192図23	O 5 24	鉢瓦 鉢瓦	微、灰、燒 微、灰、軟	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	欠 中世。 欠 中世・洪積。
193図5	O 6	女瓦	微、灰、燒 微、灰、並	なし	不明	なし	なし	なし	なし	格子	なし	欠 笠。
194図8	O 7 9 10	鉢瓦 男瓦 女瓦	微、灰、燒 微、灰、硬 微、灰、燒	— 半裁作 なし	— — —	— なし なし	— なし なし	— なし なし	— ○	素文 平行	— なし 1 吉・月・中。	
196図1	O列	瓦塔	—	—	—	—	—	—	—	—	—	— 笠。
197図3	第1P 4 第1P	男有段 女瓦	微、灰、燒 微、椎、硬	半裁作 なし	裏○ 表○	なし なし	なし なし	なし なし	○	素文	なし なし	2 笠。 2 笠。
199図2	K P 3 K P	男瓦 女瓦	合、黄、並 合、灰、燒	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子	なし なし	2 吉。 笠。
201図6	不明 7 不明 8 不明	男瓦 女瓦 女瓦	多、淡灰、並 合、灰白、並 微、灰、燒	なし なし なし	不明 不明 不明	○○ 表○	なし なし なし	なし なし なし	○ ○	板目 格子	なし なし 2 吉。 吉。 笠。	

## 第7篇 化 学 分 析

### —白色顔料の機器分析—

#### はじめに

今回は上野国分尼寺跡 S 3 トレンチ（金堂跡）より出土した白色顔料付着壁体の白色顔料について、どのような物質であるのかを目的に、非破壊を前提に、分析を群馬県工業試験場に依頼した。本稿は、分析官である群馬県工業試験場化学課小沢達樹・宮下喜好による分析結果を、大江と討議し、筆記したものである。

#### 1. 試料について

試料は附図 1 に掲げた 2 個体で、分析番号 1018・1019（当団分析通番）である各々建築物壁体と思われる上面に漆喰もしくは白色顔料様の物質が 0.3mm ほどの厚さで付着する。壁体部は、スサをまじえ、嵩は陶土などよりも軽く、色調は赤褐色を呈している。建物壁材であるならば被熱しているとみななければならない。

#### 2. 分析機器

X 線マイクロアナライザーによる定性分析（E PMA）および SEM／EDX。

フーリエ変換赤外分光分析（FT—I R）。の 2 種を用いた。

#### 3. 分析結果

E PMA による定性分析では炭酸カルシウムが検出された。そのカルシウムは壁体中に含まれた量よりも多く確認された。またチタンが壁体中よりも白色顔料部分にわずかながら多く確認された。このほかケイ素、アルミ、鉄、マグネシウム、カリウムについては通常の土器胎土分析の場合と同様に検出された。（附図 2）

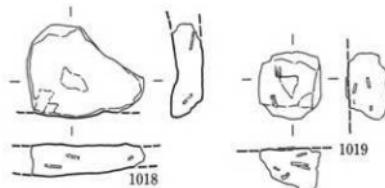
FT—I R による定性分析では炭酸カルシウムが少量検出された。それはチャート中の赤外線波数 1486 附近に炭酸カルシウムが特徴的なピークで見られ、壁体中には見られなかった。このほか不明のピークがあり、少量の有機物の存在が考えられる。

#### 4. 考 察

分析結果のとおり、2 機器によって炭酸カルシウムの存在が確認された。さらに白色顔料を載せている壁体との比較において、白色顔料中の残りの成分は、壁体に類した組成であったため、粘土に類した物質と言える。ただし、正倉院における無機系白色材の白土<sup>注 1</sup>（カオリナイト）であるのかは明確にできない。なお、有機物の存在については、分析のうえの疑問、物質中に含まれる場合の疑問とがあり、さらに分析、調査の必要性がある。

注 1 「正倉院における顔料調査」「佛教藝術200号」成瀬正和1992など。

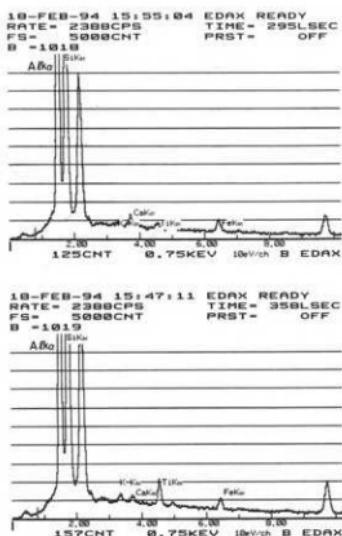
## 白色顔料の機器分析



附図1 試料実測図 29頁参照 1:2

上野国分尼寺跡には、用途を具体的に明らかにできない壁体・粘土塊が23点存在する。白色顔料が付着する個体は2点のみであった。23点の多くはスサをはじめており、粘土の基は各々軽く、陶土原料ではなく、洪積粘土もしくはその二次堆積によつて粘土化したようと思われる原料である。

1018は、何かの造形物か壁体と考えられ、厚さと、末端が知れ、1019は厚さ+される。分析に当たっては、白色顔料の成分を知りたかったが、内容は2点あり、1点目はカルシウムが検知された場合は石灰岩・貝殻のいずれか。石灰岩は、多野郡、勢多郡、埼玉県父校などで産出している。2点目はこれが漆喰とした場合、表面の彩色膜として船や水銀反応があつて良いのではと考えた。

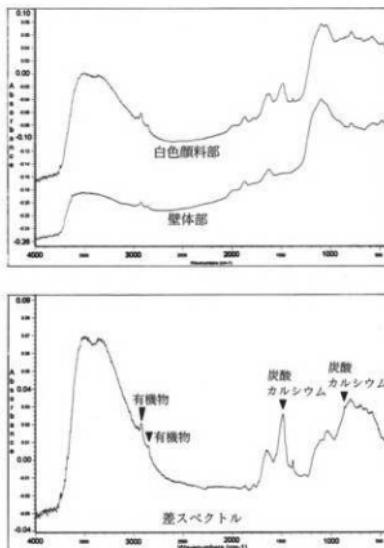


附図2 白色顔料のEDX分析チャート

上図は1018、下図は1019で、各々白色顔料部分のチャートである。2点は白色顔料部分ばかりでなく、壁体部もX線回折分析されているが、図は省略。

残念ながら船・水銀の反応はなかった。石炭岩か貝殻については、近年に分析機器の導入計画があり、それを持って再検討の予定あり。

炭酸カルシウムを除く物質は、既胎土分析の土器と類似性がある。



附図3 白色顔料のFTIチャート

上図は白色顔料部と壁体部のスペクトルで、下図はその両者の差スペクトルである。差スペクトルでは明らかに炭酸カルシウムが検出され、壁体部の炭酸カルシウムは胎土中に含まれている反応と考えられる。このほか差スペクトルでは有機物のピークがあり、討論上の問題となった。有機物とは可燃性の物質で、土中の埋没でおよんだか等などの物質であるのか答は出せなかった。

## 第8篇 考 察

### 第1章 既報の考察

発掘調査の成果をどのように汲み取ったのか既報告、概報の考察に相当する文面を次に掲げたい。

#### 上野国分尼寺跡 — 昭和44年度 —

昭和44年度概報は、『上野国分尼寺跡発掘調査報告書（昭和44年度調査概報）』（群馬県教育委員会）、本文23頁、写真図版5頁、うち挿図9葉であった。調査結果について、IV結語とし、尾崎喜佐雄が説明する。「群馬町東園分子跡の地が、上野国分尼寺跡と推定されてから久しい。住谷修氏によれば、氏の祖父権平が、明治8・9年頃に既にこの地を発掘して、「恰も瓦塚の如くであった」と述べたという。以来、この地は、国分僧寺と並んで、世の研究者の着目するところとなり、地元の研究者にあっては、郷土史研究に先鞭をつけられた福島武雄と相川竜雄氏等が、在京の研究者では、古くは柴田常恵氏や宮地直一等が、これを継いでは、太田静六氏等の研究があり、ついにこの地が尼寺跡と推定されるに至ったのである。しかし、このような秀れた研究者の中にあって、忘れることのできない地道な研究者として住谷修氏をあげることができるのである。住谷氏こそ上野国分寺、わけても尼寺研究の上に大きな業績を残された人である。氏が、国分寺の古瓦研究に着手したのは、今から40余年前のこと、「昭和2年3月の初め、父と共に常安寺の烟を見に行って、初めて国分寺の唐草瓦を拾得した。これから始めて、イシエと呼ばれる尼寺跡の一部を所有していたため、しばしば同所には仕事に行き、文字瓦等を手に入れた」と往時の偲ばれています。ここに、住谷氏のひたむきなまでの、国分寺の研究とその保存活動が開始されるのである。氏は、特に古瓦の散逸を防ぐために心懸け、村内から古瓦が持去られるのを防止するために、多くの私財を投じたとも聞く。その結果、氏の所属する国分寺瓦は終戦時において、文字瓦1060点、軒平、丸瓦併せて1000点にものぼったという。また、氏は、国分寺跡の愛護を広く村民に呼びかけ、戦後の惡条件の中にも関わらず、よくこの保存に努めてきたのであった。諸先輩による秀れた国分寺研究の成果において、また、上野国分寺が今日在るにおいて、住谷修氏の御努力と研鑽によるところ誠に絶大であったと言わざるを得ないのである。

かかる住谷修氏の研究と保護活動を継承して、群馬県教育委員会は、群馬県の文化財保護行政の核となる仕事の一つとして、尼寺の発掘調査を企画するに至ったのである。時に、尼寺推定地域を含む一帯は、前橋市の西部地域の都市計画によって、開発がめざましく、このまま放置すれば、尼寺の遺構の破壊は必定であり、文化財保護の観点から、史蹟保存及びその活用の資を得るという目的にそって、発掘調査は開始されたのであった。

幸い第一次の発掘調査は、順調に進展し、從来推定はされてはいたものの、全くといってよい程不明であった、寺域及び伽藍の配置等がある程度把握するに至り、ここに所期の目的をほぼ達したとみられる。

以下、その成果を要約すれば、概ね次のようになる。

① 住谷修氏等が既に推定していたように、この地に奈良時代の寺跡のあったことが遺構等によって確認された。

② 確認された主な遺構は、南北一直線上に南面する三棟の建築遺構で、それらは、その規模あるいは位置的な在り方からして、一おう、中門跡、金堂跡、講堂跡と推定される。

③ これら諸遺構の所在する寺域は、金堂と講堂との心々距離を標準として計測すると、192m (640尺)

四方となり、上野国分僧寺に比してやや小規模であることが判明した。

④ 確認された寺跡と僧寺との位置的関連をみると、確認された寺跡は、僧寺のやや真東の位置に在り、両寺の間隔は327m（1090尺=3町）となり、両寺は位置的に非常に関連深いものと考えられる。

⑤ 出土した多量の瓦のうち、軒平、軒丸、の瓦の文様あるいは文字瓦にみられる文字等は、僧寺出土のものと全く同じとみられるものもあり、両寺は、性格的にも統一あるものとみられる。

⑥ よって、本次調査によって確認した寺跡は、既に住谷修氏等が説くように、上野国分尼寺と断定することができよう。

ここに、本調査によって尼寺の位置が確定し、その規模・形状・更に伽藍配置の一部が、おぼろげながらも判明してきたことの意義は大きい。聖武天皇の詔によって行政の一環として天平年間、全国一齊に国分両寺の創建される機運にあったことは事実であろうが、何故か、両寺の存在が確実に立証されるところは少ない。就中、尼寺が、国の史蹟として指定されているものは全国的に僅かに8例に過ぎず、また、学術的に発掘調査されたものは下野国分尼寺をはじめとして僅かに4例にとどまり、その大部分は、今日なお解明されない状態、あるいは解明できない状態に置かれているのである。言うまでもなく、国分寺は僧寺と尼寺から成立し、互いに分離することのできない密接な関係にあるのであって、国分寺建立の歴史的背景は、僧寺及び尼寺の両寺をして観なければならぬのである。加えて、本県の場合、国分寺と切離すことのできない重要遺跡である国府跡は、この東方約1kmの位置に所在したと推定され、既に、関連あると目される三棟の建築遺構を確認している。また、近くには純社神社も所在し、国分寺建立の背景はもとより、奈良時代とそれに続く時代の地域社会の歴史的完明の資料はいちおう整ったかの感がする。ここにおいて、ますます尼寺調査の意義を認めることができるのである。

第一次発掘調査の結果は、現在尚整理研究中であるが、この過程において、既に幾つかの極めて貴重な問題が提起されつつある。その主なものは、僧寺と尼寺の間隔が正しく3町あるということ、両寺の占地が2町四方を意識していたとみられること、更に所謂国分寺参道の位置、更にまた、本年3月から5月にかけて行なわれた両寺の中間地域の調査結果をも併せて、国分寺創建に先がけて、既にこの地には条里制がしかれていたのではないかとみられることである。このことは、今後の発展によって、国府跡を確定する資料ともなり、更に古代地方都市における、都市計画の実態を探る有力な手がかりになり得るものと予想される。統一では、特色ある瓦に関する問題である。既に、住谷氏が指摘するように、上野国分寺の軒平瓦、軒丸瓦の文様は、隣接する他国のものと比較すると、その種類は豊富ではあるが、甚だ稚拙であり、また素朴なものが多いのである。このことは、特異な文字瓦の文字と併せると、奈良時代を中心とする古代における上野国の性格が、周囲の国々に比して著しく異っていたのではないかという問題に連るものである。

何れにしろ、尼寺の発掘調査は、本邦において、あるいは本県において、重要な調査である。しかし、本次調査によって、尼寺の全貌が明らかとなったわけではない。金堂跡、講堂跡、中門跡、あるいは寺域等にしても、まだ推定の域を出ないのである。まして、その他の諸遺構は全く見当もつかず、その探求は今後の発掘調査にまつところが非常に大きいのである。第二年次、第三年次の調査によって、その全貌を明らかにしたい。』とある。

#### 上野国分尼寺跡 — 昭和45年度 —

昭和45年度概報は、『上野国分尼寺跡発掘調査報告書（昭和45年度調査概報）』（群馬県教育委員会）、本文19頁、写真図版4頁、うち挿図6葉であった。調査結果について、IV結語とし、松島栄治の説明がある。

「昭和45年度における上野国分尼寺の発掘調査は、前年度の調査結果に基づき、前記のとおり、1. 寺域確認の調査と、2. 推定講堂跡の全面的な発掘調査を実施した。

寺域確認の調査は、当初の調査計画においては、第1年次にあたる昭和44年度の調査で予定されていたものであったが、ついに確認することができず、本年度の調査において改めて実施したものである。その調査方法については、既に記したとおりであるが、推定北方寺域の限界を除いて、南・西・東方の各部分特にその門跡と推定されるところを発掘調査した。

以下、その成果を要約すれば、概ね次のような。

**① 南方寺域限界の調査** この調査においては遂に門跡など寺域の南限を証する遺構を確認することはできなかった。しかし、この調査結果によって、新らな推定地を得るに至った。この新推定地は、金堂跡の中心から南75mの地点で、当初の南方限界の推定線から北方へ21m寄った地点である。この地点は、前橋市と群馬町との境界線に当り道路が走り、更には北方の微高地と南方の平地との境ともなる地域であり、当初から注目していた地域であった。しかし、推定金堂跡と講堂跡との心々距離即ち推定金堂跡の中心から南方へ96mの地域を、南方限界の第1候補地としたため、本年度の調査対象からははずされていた地域であった。したがって、ここに第1候補地としての推定地が否定されたことにより、新らな推定地が問題となってきた。それは、若し、この地に南方地域の限界が決定されれば、僧寺の推定南方限界線の東方への延長線上に一致することになり、僧・尼両寺の建設計画が一定の企画によったものと解され興味深い。

**② 西方寺域限界の調査** この調査においては、溝状の遺構を確認した。しかし、この遺構は、トレンチの関係から本年度の調査においては、その走向と規模は究明できず、したがって、この性格を最終的に明らかにすることはできなかった。しかし、その位置及び、遺構の様相あるいは地形的特色からして、西方寺域の限界は、ほぼこの地と推定されるにいたった。

**③ 東方寺域限界の調査** 門跡推定地点において、掘立柱の建築遺構を確認した。これは、東西一直線上に並ぶ3個の柱間は2 m70cmと2 m50cmとなり、等間隔ではない。しかし、全長は4 m50cmで、天平尺に換算すると約15尺となる。ところで、九条家本延喜式の裏書によると、僧寺の門の南規模は、奥行15尺があり、この建物の東西の長さと一致する。よって、この事実と該当建築遺構の位置的な在り方からして、これが東門跡であることはほぼ間違いないとみられる。

**④ 推定講堂跡の調査** 本建築遺構においては特に基段状存在は確認できなかった。しかし、礎石及びその痕跡から、下記のような建築遺構を確認した。

$$\text{東西 (間口一6間} 18\text{m (60尺)} = 3\text{m (10尺)} + 3\text{m} + 3\text{m} + 3\text{m} + 3\text{m} + 3\text{m}$$

$$\text{南北 (奥行一4間} 10\text{m}80\text{cm (8尺)} = 2\text{m}40\text{cm (8尺)} + 3\text{m} + 3\text{m} + 3\text{m} + 2\text{m}40\text{cm (8尺)}$$

国分寺特に尼寺の建築遺構において、このような形状をもつものについて、他の例はない。したがって、ここに国分寺の伽藍の規模及び形状についても、新らな資料を得たといえよう。

いずれにしろ、ここに昭和45年度の上野国分尼寺の調査は実施され、主要建物の一つである推定講堂跡がほぼ全面的に調査され、その全貌をあらわした。また、その寺域についても、推定地城に東門らしきものも検出され、尼寺の位置と規模がほぼ明らかとなってきた。ここに本年度調査の目的も一おう達成したとみられよう。しかし、この本年度の調査によって、尼寺の全貌が全く明らかとなった訳ではない。講堂跡と推定されるものは、一おう全面的に掘り出されたものの、推定金堂跡及び中門跡などは、部分的な確認しかなされておらず規模・形状については不明である。また寺域についても、東門跡らしきもの確認はしたもの、全体的にはまだ推定の域を出ないのである。よって、今後の調査によるところが非常に大きいものと思うの

である。よって最終年次にあたる昭和46年度の調査によって、所期の目的を達成したいと考えている。」。

### 上野国二寺中間地域

昭和46年度概報は、「上野国分寺周辺地域発掘調査報告書—僧寺尼寺中間地域の考古学的検討一」(群馬県教育委員会)、本文60頁、写真図版20頁、うち挿図23葉が入る。調査結果について、IV結語とし、松島栄治の説明がある。「本調査は、上野国分僧寺と尼寺に挟まれた地域に分布する国分寺に関する遺跡及びその他の遺跡を明確にし、文化財保護行政上の資料を作成し、開発諸事業との調整をはかることを趣旨として行ったものであるが、調査の実際に当っては、上記趣旨にそって、更に具体的な目標を次のように設定し調査に当った。

- ① 国分僧寺の東の限界と同尼寺の西の限界を明らかにし、所謂中間地域の範囲を具体的に明らかにする。
- ② 僧・尼両寺の中間地域における、国分寺関係の遺跡・遺物を明らかにし、国分寺建立とそれに続く時期の、国分寺周辺の歴史的環境を明らかにする。
- ③ 僧・尼両寺の中間地域における、国分寺建立以前と壊滅以後の遺跡と遺物を明らかにし、この地域における国分寺を中心とした歴史的変遷の様態を明らかにする。

ところで、従来の国分寺あるいはこれに関する調査研究は、全国的にみても、その殆んどが寺域内部の調査に止まり、その周辺特に僧・尼両寺に挟まれた中間地域についての学術的発掘調査を行った例は皆無であり、ここに本調査の意義を改めて痛感したのである。

調査は作物等の補償の問題で、当初の計画を大幅に変更せざるを得ない事態も発生したが、幸い、作業そのものは順調に進展し、この地域における遺跡・遺物の存在をほぼ明らかにしえることができ初期の目的をほぼ達成したかに思える。しかし、大局的にみると、調査の対象地域はあまりにも広く約6ヘクタールにも及ぶものであり、このうち、調査を完了した面積は、約9平方メートルのグリッドを91個所、即ち、僅かに約8アールに過ぎず、調査対象地域に対する調査面積の割合は1/80弱ということになり調査の完了は未だの感がする。しかるに調査の方法において、まず10m間隔に東西南北各方向に基点を設定して、結果的には全調査地域を10m目の網をかけた形とし、その中に原則的に20mおきの3mのトレーニングを設け、更にその中を3乃至4mおきに区切りグリッドを設定する等して、できる限り広範囲に調査がいきとく様に配慮した。従って、調査範囲は僅かであっても、本調査の結果は、本地域における遺跡・遺物の在り方を示すものと信ずるものである。ともあれ、この地域は予想に違わず貴重な遺跡・遺物が続々と発見され、この地の重要性は増々高められた。以下、調査結果の概略を記することにする。

まず、調査の具体的目標である国分僧寺の東の限界と同尼寺の西の限界をきわめ、所謂中間地域の範囲を具体的に明らかにすることについては、幸い、僧寺においては、九条家本延喜式の裏書に国司交替帳の一部が残り、其の部分に丁度上野国分寺の伽藍境内の寸尺が示され、文献上からも寺域の大きさは知れるが、更に現地における金堂跡・塔跡をとりまく、地表の起伏、地割及び道路等の状態は、往時の伽藍配置、境内の大きさを示しているとみられ、ここに文献と現状とを照合すると両者はほぼ一致することから、その範囲は、大体方二町とされ、その位置は群馬町大字東国分の字村前、石堂及び前橋市元総社町の字小見の地にまたがるものとすことができ、自ずと寺域の東の限界更には東門の位置等も推定することができる。即ち、東門跡とされる地点には、地下約30cm程のところに礎石があるとも言われてきている。そこで本調査においては、この確認を志したが、礎石の位置する辺りは、史蹟指定地域であるため発掘調査は行なわず、ボーリング棒によって探査し確認した。また、関連して、指定地外においてこの礎石と最も接近した地点(W176.5

- S2.5)を選び発掘調査した。その結果は、既に移動されたとみられる礎石1個を確認し、ほかに、ローム層直上までの積土を除去し、そこに何らかの基礎工事の加工を行った痕跡を確認し、この地が僧寺域の東限あるいは東門跡に極めて接近した位置であることを再確認した。

他方、尼寺については、住谷修氏等によって既に昭和の初期から、その他の推定はなされてはいたものの、寺域の範囲及びその規模等については、全くと言ってよい程不明のまま今日に至ったのである。かかる状態に対して、群馬県教育委員会は、文化財保護行政の一環として、昭和44年度から3か年の計画で尼寺跡の発掘調査を実施することにし、前に第一年次の調査を完了したのであるが、その主な結果は次の通りである。

① 推定地域において、南北一直線上に三棟の建築遺構を確認し、それらの規模あるいは位置的関連からして、一おう南から中門跡・金堂跡及び講堂跡と推定することができる。

② 確認された遺構のうち、金堂跡と講堂跡の心々距離を標準として、その寺域を考察すると、192m(640尺)四方となり、僧寺よりやや小規模であると推定される。

等であり、ここにはじめて尼寺の寺域の範囲とその規模が推定されるに至った。ところで、この推定はその後、昭和45年の第二年次の調査によって、一部確められやや確実視されるに至っている。よって、尼寺の西限界は、本調査において発掘調査を行なうまでもなく推定することができた。

よって、ここに僧・尼両寺に挟まれた所謂中間地域の範囲は、東西327m(3町)、南北218m(2町)とすることができる。

次に、この中間地域における、国分寺に関連する諸遺構及び遺物についての確認であるが、遺物についてはともかくとして、遺構については、時代の決めてが不明確なために、前記地層検討の方法を採用した。この方法は、浅間・榛名両火山の噴火による火山灰の堆積を時代判定のキーポイントとしたものであり、火山に恵まれた本県において、既に、上野国府の発掘調査の際に気付き、一分応用したことのあるものであるが、本調査においては、これを本格的に採用したのであり、面的なこととして注目される。

本地域において認められる、明らかな火山灰層は3層あって、これらはその堆積の時期が明らかとなっている。即ち、下層の火山灰層は、浅間山のCスコリアと呼ばれ、4世紀の前半に堆積したものとされる。また、上層の火山灰層は、同じく浅間山のBスコリアと呼ばれ1281年の堆積とされる。そして、この上・下両層の間には、7世紀初頭の噴出し、堆積したとみられる榛名山二ツ岳の軽石がまばらに認められるのである。ところで、上野国分寺が建立され、それが維持された時期は、およそ750年頃から、平将門の乱である930年代あるいは足利太郎後綱の乱である1185年頃とされるのであるから、これを地層的にみると、榛名山二ツ岳噴出の火山灰から、浅間山噴出のBスコリアまでの間のこととなるのである。従って、発掘によって、国分寺と関連する遺構あるいは遺物を検出すに当っては、浅間山Bスコリア直下の地層の変化、あるいはCスコリア層の上部にある榛名山二ツ岳噴出の火山灰の含まれる地層を検討することによって可能となる訳である。かかる方法等を用いて、概略次のような国分寺関連の遺構を確認した。

#### ① 漆及び築垣の基礎とみられる遺構

僧・尼両寺の中間地点よりやや西に偏した位置(S79.5-W66.5)に、幅2m50cm、深さ1m50cmの大規模な溝状の遺構があり、それに沿って幅1m50cmの版築によって非常に堅くつき固められた、東西に走る道路状部分を確認した。この構築の年代は、工築手法と地層の検討等からして、奈良時代のものと思考され、僧・尼両寺と密接な関連ある極めて貴重な遺構とみられる。その性格については、調査した範囲が非常に局部的であるため、その全体的な規模、形状は全く不明であり、よって明らかではない。しかし、この近接地點からは「東院」と記した墨書の土器片が発見されており、ここに東院と呼ばれた建物の存在を実証してお

り、これが位置的にみて僧寺の東院に関連する遺構ではないだろうか。他方、確認はされてはいないが、上野国分僧寺には築垣のあったことが九条家本延喜式の裏書からして明らかであり、また全国的にも、国分寺の周囲に濠を伴った土塁あるいは土堀のあったことが、既に幾つかの例によって明らかにされている。してみると、本遺構は僧寺の東院の周囲を限る濠及び築垣の基礎ではないだろうか。

## ② 穫穴住居跡

竪穴住居あるいはそれとみられる遺構は合せて39箇所にわたって確認され、この地域には意外と住居跡の多いことが判明した。これらの住居跡は、調査の目的から全体的に掘りあげられたものではなく、部分的な調査に終っている。従って、現段階において住居跡について、詳細に触ることはできないし、また触るべきではないと思うが、一おう下記の点を指摘することができる。

イ、確認された竪穴住居跡は、比較的小規模で質素なものである。

ロ、遺跡内における、これら住居跡のあり方は、一定の地域に集中する傾向がみられ、極端な場合には重複しているものさえある。また、そこにおける住居跡の在り方は、やや方向を同じくしており、この限られた地域の指定が一定の計画のもとに行なわれたもののように思える。

ハ、住居跡内において、国分寺使用の瓦と全く同一の瓦が竪構築の材料として、あるいは貯蔵穴とみられる穴の縁に、あるいはまた物を置く台等に盛んに使用されている。

ニ、これら住居跡の時期は、地層的な検討と遺物等からして、国分寺建立とその繁栄の時期である8世紀後半から9世紀にかけてのものと推定される。

以上のことから、これら竪穴住居跡に居住した人達は、時間的に位置的に更には居住のし方等からして、国分寺に從属していた比較的の社會的地位の低い人達の住居でなかったかと考えられ、特に予想されるものとして、住居内に重要な建築資材の一つである国分寺瓦を盛んに使用していること、柱等の丸柱を出すのに特に効果のある鉄製切削工具（セン）あるいは巨大な砥石等の出土から、これらの住居は、国分寺の建立とその維持に当っていた工人等の住居であり、また、住居跡群はその居住地域を示すものではないだろうか。

## ③ 溝状遺構

本地域には合わせて13本の溝及び溝状の遺構が確認されたが、このうち地層の検討更に位置的な在方からして明らかに国分寺の時期とみられるものは、現在の段階においては3本とみられる。これらの溝は、国分僧尼の両寺に挟まれた、この中間地域の土地利用に際して、土地区画等を行ったものとして注目されるが、これらの相関関係は現在明らかでなく、後の調査の機会を待ちたい。

以上、この中間地域における国分寺関連の遺構について明らかにした訳であるが、これらの遺構、特に竪穴住居跡からは、土師器、須恵器、施釉陶質土器更には瓦等が多數出土しており、国分寺の建立、維持された時期の生活とその推移を考えるうえに貴重な資料となっている。特に、僧寺の南大門から東方約80mの地点（W93.5-S99.5）から発見された8cm×4cmほどの須恵質の皿形土器の破片には、その所属を意味するとみられる「東院」という字が墨書きされており、この地におそらく僧寺の東院とみられる建物があったことを実証する遺物として貴重な発見であった。要するに、これら遺物遺構を併せると、国分寺建立期とそれに続く時代の国分寺周辺、特に僧・尼両寺の中間地域の歴史的環境はやや明らかとなつたと言えよう。

続いて、もう一つの調査の具体的目標である僧・尼両寺の中間地域における、国分寺建立以前と壞滅以後の遺構、遺物を明らかにし、この地域における国分寺を中心とした歴史的変遷について触ることにする。

まず、両寺建立以前の遺物についてみると、明らかに遺構として認められるものは、全く認められなかつた。また遺物としては、繩文式文化に属する所謂蜂巣石と称される石器と、同じく土器片が数片認められる

## 第8篇 考察

に過ぎなかった。これら石器あるいは土器片は、本地域の南隣接地である染谷川右岸の地域が、繩文土器等の散布地として知られていることから、何んらかの理由によって運ばれたものと考えられる。この様な考え方はともかく、この地域には国分寺建立以前において人が直接居住した形跡はなく、特に古墳文化期からそれに続く国分寺建立までの間については、それを示す遺構及び遺物が全く認められず注目に価する即ち、聖武天皇の天平13年（741年）に発せられた国分寺建立の詔勅には、国分寺への占地の条件として、「人に近ければ則ち薰蒸所及、人に遠ければ則ち衆の帰集を労するを欲せず」とあり、生臭い匂いのおよぶ処、また交通不便の地をさけるようにしているのである。この点本地域に関してみると、国分寺建立以前においては、既に触れたように人の住んだ形跡は全くなく、從って生臭い匂のただようような場所ではなかったとみられる。また、交通の便からすれば、本地域の東南方1kmに満たない地域には国府の存在が推定され、決して交通に不便な土地であったとは考えられない。從って建立の詔勅が忠実に実行されたとみられ、国分寺建立に当ってはこの地域の情勢が伺われる。

代って、国分寺壙滅以降の遺構及び遺物についてみると、特に目立つ遺構としては、すこぶる大規模なものと含む4～5本の溝状遺構と墓拡とがあげられる。溝状遺構のうち、最も規模の大きいものは、東西に走行する、100m以上150m以下の部分をもつもので、その幅は約6m、深さ2m80cmであり、横断面の形状は、斜面にやや中段の認められる逆台形である。この性格は、規様及び形状から単なる灌漑用水路でなく、防衛的な性格をもつものとみられる。また、この構築年代は地層的な検討からして、少なくとも、1281年以降とみられ、中世鎌倉時代の豪族の居館を囲繞するものと思われ、ここに所謂武家屋敷の存在と推定し得るのである。なお、ここに居館を推定した場合、その位置は、鎌倉期とみられる巴文軒丸瓦の出土や、青磁片の出土から、この溝状遺構の南側と推測され、発見された部分はその北辺と考えられる。また、他の同様な溝状遺構も形状等からして同様な性格をもつものと推定される。從って、この地には、国分寺壙滅以後大規模な居館跡を中心に幾つかの居館跡的なものがあったことが予想される。

代って、発見された墓壙は、2個所にまとめられ、明らかに確認された墓壙は7個所であった。これら墓壙は數10cm四方の比較的小さいもので、遺骨はその中でかなり窮屈な姿勢で埋葬されていた。しかし、その保存はかなり良好であった。副葬品は二、三の墓壙において認められたが、それらは、宋錢及び素焼の香炉、小皿等であった。從って、この埋葬年代は副葬品あるいは墓壙近くで発見された石塔の一部更には地層的検討によって、室町時代を中心とする時期と推定された。よって、この地域は、室町時代においては、墓地として利用された部分もあったことが確実となった。

なお、時代は更に降って、おそらく江戸時代と思われるが、この地域には幅40cm前後、深さ50cm前後の溝状の遺構が、縦横に掘られた形跡のあることが認められたが、その機能や目的はわからない。農作業に関連あるように思えた。

以上、調査の主な結果を調査の目的に沿って触れたが、本調査によって今まで全く不明であった国分寺周辺、特に僧・尼寺に挟まれた中間地域の歴史的環境が、ここに充分ではないまでも明らかとなり、又明らかにする手がかりを得たが、その意義は大きいと言えよう。

言うまでもなく、上野国分寺は、聖武天皇の詔勅によって行政の一環として、ここ群馬町東国分と前橋市元総社町の一部の地に建立されたことは事実であり、また、国分寺が僧寺と尼寺の両寺からなることも否定し難い事実である。これら二つの事実のうえに立って、僧・尼両寺の中間地域に対して発掘調査を実施したわけであるが、果せるかな、この地域からは前記したような貴重な遺構や遺物が多量に発見され、国分寺あるいはそれをめぐる歴史的環境を究明する場合、ここが極めて重要な地域であることが判明した。よって、

われわれはこの地域が、他の地域と異なり、寺域同様に学術的並びに文化財として高い価値を有する地域であることを確認するに至った。』とある。

## 第2章 上野国分寺跡について

整理作業で得られた内容には多大な所見結果があり、本稿は、それらの中から重要と思われる4題を抽出して考えたい。(第202図)

### 1. 上野国分寺跡東門跡

J 1・2区で、瓦片を多量に伴ない浅間山B軽石層に見える粗質土で一端が埋没された遺構が調査されている。特にJ 1区では自然石礎石が存在していた。この地区について史跡整備に伴なう第32次調査で再調査が実施されたが礎石は破碎状態にあった。J 1区の礎石について結果報告である「史跡上野国分寺跡」(群馬県教育委員会)1988によれば「地元の人の話によると昭和45年に検出された石は、昭和36年頃に周辺の区画整理を行なった際に今より南側に在ったものを、通行の邪魔になることから北側に移動したとのことである。そうしてみると、史跡地内で確認された礎石の東側にあったと推定される」と移動について説明がある。史跡整備調査では東門跡を調査すべく、農道を挟むE145~124N15~35付近に調査区が設けられ、その結果、東・西面する3×2間=600×480cmの掘立柱建物が発見された。報告では機能について明言はしていない。その方向はN 4°Eであり、時期は重複関係から8世紀中葉以前としている。さらに調査区の南端に近い、E132N17付近に礎石が見い出され、その南東側で「地山を50cm掘り下げてそこに黒褐色粘性土を盛って締めた状態であるのが確認された。その北と西側にはこのような遺構はないため、これが北西隅に当ると推定された。」と東門跡北西隅の礎石位置と地業について説明されている。J 1・2区は、東壁際に浅間山B軽石層に見える粗質土を埋土とする溝が確認され、東西の土層断面には客土に見える土層が約50cm存在し、ローム層上面には漸移層がなく、整地客土が考えられる。既報には「ローム層直上までの積土を除去し、そこに何んらかの基礎工事の加工を行なった痕跡を確認し、この地が僧寺の東限あるいは東門跡に極めて接近した位置であることを確認した。」と説明され、整理上も符号する。史跡整備調査では、先の小溝はS D14と称され、その溝の西側立上りから、史跡整備で確認された礎石間の東西長は約11mを測るが掘込地業である場合は、それ以上の長さとなる。なお国分寺跡で調査された南大門跡基壇(最末期基壇)の最下面幅は990cm(33尺)、国分尼寺跡、中門跡地業(最末基壇)の下面幅は12m(40尺)でさらに大きい。

出土遺物で特記される点はJ 1区東北部分、J 2区東西部分に、須恵器、石を少量まじえ、多量の瓦が出士している。特に瓦類は笠懸窓跡群製の上野国分寺式罐瓦を焼造している段階でも古様の格子女瓦、格状繩擦消の男・女瓦が目立って存在している。須恵器は8世紀中頃の坏があり、それらの組合せは瓦葺東門当初を多量に含むと云える状態にある。

以上の諸点から国分寺跡で調査された南大門跡基壇よりも規模は大きいと思料され、創建期の地業規模を考えるうえで大きな検討課題が生じたことになる。

### 2. 「東院」銘と該当施設について

「東院」と墨書きされた須恵器坏または塊片が出土したのはN 1区であった。N 1区の土層断面図は見当らなかったが、記録写真に、80cmほど掘り下げたように写されている。その質感は耕作土とその直下を除くと中央より東方を南北に、住居跡様に立ち上る上面まで浅間山B軽石を含む黒色土がおよんでいるように見え、

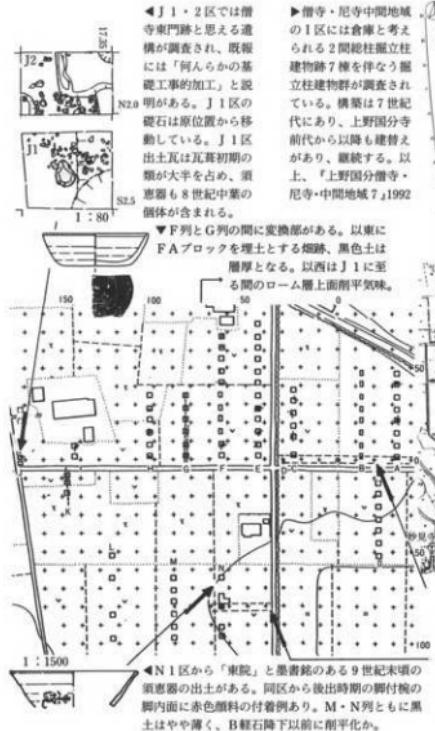


1 : 2000



◀ N 2 区の道路状遺構、N 3 区の溝路の延長推定は、溝路の場合、M 例までは達していないため、その間で屈曲するようである。東方は D 1 区の溝路と規模が共通するので矢印位置で変わる推定も可能であろう。中世難跡の一端か。

◀ A～D 1 区の各々で中世溝が調査されている。西方延長の E 1 区では発見されず、D 1 区からまもなくして南北のいずれかへ屈曲か。



第202図 上野国分二寺中間地域と上野国僧寺・尼寺の関係図

そのことは南接のN 2～4区の壁面のほとんどが、同層か、同軽石を含むと思料される層で覆われ、さらにN 6、O 1・2・3・4およびO 5・6附近まで続き、南方はN 5・6まで層厚となっており、おそらくは同層が、黒色土と順堆積の浅間山B軽石層とが混る時期、つまり中世に大規模な整地削平化があったと推定される。いま一度、前出の各調査区を色つぶしにして見ると、等高線128mがN 1区～O 1区にかけ内溝する状況と符合している。それが中世における浅いおぼれ谷であるか否かは、面的な調査が必要であろう。この浅い谷地形の整地が古代に行なわれ踏襲されたとするには、古代の黒色土残存が少な過ぎ否定的である。そうした点からすると「東院」とされる位置の一角にN 1区が存在していたとしたら、削平化された可能性がある。なおJ列附近には古代の黒色土がいく分層厚で残存しており、この附近なら遺構残存の余地がある。

「東院」銘の須恵器は9世紀末葉の製品で、割れ口は軟質な焼上りからすれば風化顯著ではなく、そう遠くから移動したように思えないので、この周辺に存在していたにちがいないし、東院という字義からすれば國分僧寺の東方の院と云うことであり、特にこの周辺を指している。県内では榛名町唐松庵寺より「北院」銘（川原嘉久治「榛名山麓の古代寺院II」「紀要11」（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1994刊行予定）の同庵寺は私度僧を中心とする山岳修場寺院と考えられている）の既出例があり、方位を指しての呼称は國分寺ばかりでなく、私寺の範囲にまでおよんでいる。上野國分寺の場合、大衆院が「上野国交替実錄帳」中に見え、独立機能を持たせたと思われる院構成例が存在している。

遺物類から見た場合、L 4区の第169図1に異形摘の蓋、M 6区の第175図3に畿内産と見える暗文土師器、N 1区より二寺中間地域唯一の赤色顔料の付着した須恵器例があり、この周辺に遺物における稀少種の出土傾向はある。ただし、各々が東院に直結するものか、異次元の別機能に根ざすかは、もっと大面積の発掘を待たなければならない。

## 2. 古墳時代畠跡と上野国分中間地域調査の北方掘立柱建物群について

小題名は特異な性格を2つ並べた訳ではなく、上野國分寺が建立される前代の様子について簡単に触れておきたい。この總社古墳群と周辺の地域は上毛野君氏の掌握地であり、國分寺の成立背景に同氏が直接関与していたことは、拙稿「上毛野連合から上毛野盟主政権の成立について」『群馬の考古学』1988、木津博明「周辺遺跡」「上野國分僧寺・尼寺中間地域」1988、木津博明「上野國分尼寺々地考」「群馬の考古学」1988に説明されている。しかしそれらは、周辺遺跡からの状況考証であり、具体的に國分二寺を擁する台地上の近接地の前代はどのような状況であったのかを見たい。

上野國分僧寺・尼寺中間地域のI区から24棟の掘立柱建物群が調査され、うち9棟の2×2間の倉庫と考えられる總柱建物跡を含んでいる。それを検討した石井榮一「I区検出の掘立柱建物について」「上野國分僧寺・尼寺中間地域(7)」1992によれば7世紀後半から9世紀前半以前（8世紀後半）の間に構築されたと推定され、その性格は「本稿で検討してきた掘立柱建物群は、在地有力者の「館」的性格をしていたものが妥当性がある（後略）」とされ、近接のF～J区の約601棟の住居跡を基に集落変遷を検討した桜岡正信「北側調査区（F～J区）の集落変遷について」同前、によれば6世紀代は約51棟、7世紀代は約91棟、8世紀代は約93棟があり、以降の時代に統ぐが、検討によれば、8世紀の前代の一群がH区以北を中心に、7世紀には先の掘立柱建物群の周辺に濃い分布があり、8世紀代に至ると濃い分布はI・J区にありながらH区を以南にも派生群としての単位が広がり、それについて桜岡は「こうした形の集落拡大は、自然な人口増加等の内的要因によるものとは考えられず、外的な要因（後略）」によることを推定している。外的要因とは「ここでは、8世紀代に律令制が強化された時期とされたことと直接的に関係していると考えている。」ことを指してい

る。

以上、国分寺の建立後も前代の有力階層を含む集落の構成は継続していた。

上野国分僧寺・尼寺中間地域のB・C・D区の約250mにわたり古墳時代烟跡が調査されている。この烟跡の残存はD区の中央を群馬町道が通過しているが、その道の北・南側間に1m以上の地形の変換部があり、山寄せの凹地状個所に風性堆積等により、上方に黒色土が厚く堆積して残存したものと考えられる。上野国分二寺中間地域には、その延長とみられる煙跡が存在している。状態は主に榛名山給源のFA層（6世紀初頭頃）のブロックが煙跡のさく埋土となり、そのブロックの色調は黄灰色を呈し、黒色土中の存在は明瞭に区分できる。存在個所はC 3・4・5区、C 3区、E 1区、F 2区などがあり、西方はF 2区にまで至り、6世紀頃の台地上の一端ではあるが生産域と生活域の一部を知ることができる。

G列から以西には地山であるローム層上面と、地表面との差の少ない個所がある。E列以東は深いが、F列8・9・10・11区、G列5・6区があり、二たびH列では少し深くなり自然地形であるらしい。しかし、H列、I列、J 1・2区、K列に浅い個所が連続しており、堅穴住居跡は浅く、写真中に写された土層壁面の大半は浅間山B軽石を含む層に覆われており、削平化が中世以降に行なわれたことはほぼ確実であろうと考えられるのであるが、削平化の当初が中世であったのかという説問に対しては、J 1区で浅間山B軽石の堆積が史跡整備調査でも発見されており、中世の前後に削平されていた可能性も捨ててはいかない。さらに堅穴住居跡の多出もしくは、生活域はH列に住居跡が複数例で認められるもののK列までの間にJ列で疑似が1例あるのみで希薄な状態の一角が存在している。その境はJ列とH列との間、K列とL列の間である。この地は上野国分僧寺の隣接地であり、その状態を計画的な意図と考えたい。この東方隣接空間に、羽口・銅原料の出土したJ 3区内推定銅製工房が存在している。

#### 4. 道路状遺構と二つの溝遺構

N 3区で調査された道路状遺構について157頁で「本来的に道用に版築したのか」という点は、道としての単一機能に大規模な施設を築くのかということが問題で、まずは考え難く、前代の遺構を再利用したものと考えるのが妥当である。既報の説く奈良時代の築垣という説は急には賛成しかねるが、上野地域の中世遺構の土壘は粗な築成が多い傾向からすれば、無視はできない」とした。この道路状遺構の調査時に版築中に12世紀初頭頃の浅間山B軽石が含まれているか否かで確認していれば、問題は残らなかつたであろう。隣接のN 4区溝跡は15世紀頃の遺物があり、14世紀までの石造物をその中に廃棄していることから見れば、そう通った時期の構築ではないように思える。14世紀以前の遺物はW60以西、S50以南～120までに13世紀頃の中国陶磁器片が散布しており、編者も採集したことがあった。この溝遺構の西限はM列に当っていないことからM・N列間で等高線走行からすると南側に延びると考えられ、東側はA 1～D 1区に達する大規模な溝遺構がそれ以西のE 1区で発見されていることから屈曲し、北もしくは南側、またはその両方に向け延びていると推定され、南側に延びた場合は道路状遺構と併存の溝遺構と交わりことになるか、連続するであろう。

### 第3章 上野国分尼寺跡について

ここでは、修改築と廃絶時期、規模と諸堂の距離的関係の2題を考えたい。（第203図）

#### 1. 修復築と廃絶時期

調査区の各所で焼土粒や焼土、木炭粒の存在が確認された。ことに講堂跡調査区では礎石上面に被熱剝落

第3章 上野国分尼寺跡について



第203図 上野国分僧寺、尼寺跡の位置関係図 (1:4000)

が確認され、最終的には火災焼失を思わせる既報記述があった。後に講堂跡調査区に吸収されてしまう形となつたN 4トレンチの土層断面注3に「黒褐色土。浮石を含む。層中には小さな焼土塊がみられる。上面は固い。層中からは瓦片、土師器片が出る。」と築土層中の夾雜物質についての説明がある。瓦片が含まれ、焼土塊が認められることは、調査された講堂跡の前代にさらく前代の講堂があつたことが示唆され、そのことはさらに礎石へ列4・5番の中間位置に鍛冶炉と羽口・鉄滓の出土があつて、調査された講堂構築前代の炉跡か、後出講堂の焼失後の遺構でなければ説明づかないことになる。またイ例2・3番、ハ例4番の礎石受けの栗石中に切石積基壇化粧材と思える石材、瓦片があり、前代講堂の存在は極めて可能性の高いことである。出土遺物に上野国分寺式鎧瓦は細片が多く、9世紀代の鎧瓦の瓦当面は遺存が良い（第45図105～109）ことからすれば9世紀代に後出講堂が再建されたのではないだろうか。最末の瓦は蘆目の女瓦が1点あり、9世紀末頃の瓦の差し替え保全がなされていたと思料される。

金堂跡は、S 1トレンチ土層断面では地業最上面に堆積した注4の上方に注3があり「黒色土。焼土混じり」とあり基壇中に焼土粒を含むという記述はない。S 3トレンチでは土層断面注3に焼土混るとの添記があり、既報には「特に遺構の南限界より北方2mの辺りには、木炭片と三和土の付着した焼けた壁土が認められた。」とあり、最終的には焼失を示唆する記述となっている。またその上方に間層を置いて浅間山B軽石が確認されている。以上を順序立てば、地業面→機能時の黒色土の堆積→焼土が混る黒色土の存在→間層若干あり→浅間山B軽石の堆積となる。焼土が混じる黒色土と浅間山B軽石層までにはある程度の時期差がある。瓦類の末葉は第12図5の蘆目の女瓦で9世紀末葉の製品であり、差し替えと思料される。瓦の割れ方についての新古状況は軒瓦量が少なく明確でない。

中門跡は、S 6トレンチの土層断面では地業最上面に堆積した注5の上方の注3に「褐色土。粘質、瓦包含層。焼土」とあり、地業築成土とみられる注5中にも焼土粒が入るが、S 7トレンチの注の内容では多くなさそうである。S 7トレンチの土層記2に「焼土が強く含まれる」とある。さらに注2と瓦の堆積層との間には基壇前面で40cm前後の間層があり、さらに構築面に達するまで約80cmの堆積があり、基壇前面の構築面上には砂が堆積する。以上を順序立てると、基壇・同前面の造成→同前面に薄い砂の堆積→使用時の黒色土の堆積→瓦類の整理→二たび黒色土の堆積→焼土粒を含む黒色土の堆積があり→浅間山B軽石の堆積となる。この順を思料すれば瓦類の整理時点は火災とは別の原因で既報でいう計画性を認めて良いと考えられ、さらに焼土粒を伴なう層中には瓦片が少ないと中門が存在しているのであれば瓦葺でない素材と考えられる。出土瓦類からこの状況を見ると上野国分寺式鎧瓦の存在状態や占める割合は多く、最末の蘆目女瓦も存在することから、8世紀末頃の創建状態を9世紀末葉まで維持していたと考えられ、そこに当初の中門を、9世紀末葉以降に非瓦葺の後出中門か建物の建立を考えておきたい。

## 2. 規模と諸堂の距離関係

規模と諸堂の距離関係は第5図に示したとおりであるが、作図上のおよその数値であることをことわっておきたい。注意点とすれば、講堂跡から割り出された中軸は国土座標北に対しN 3°30'～4°Wの間であり、中軸Aは、当初の講堂建物が、桁行側柱7間と仮定した場合である。寺院の隅敷間は別な建物の再建でない限り発掘された講堂（後出）のように桁行6間は異風であり、本来的には規模は大きかったと考えたことによる。中軸Bは発掘された講堂の中軸位置である。

金堂跡の規模は地業下端で南北長約26mで、既報の松島栄治推定の24m（80尺）で作図した。この規模は史跡、整備調査の上野国分僧寺の基壇南北約17mよりも数段規模が大きい特色がある。上野国分僧寺の金堂

### 第3章 上野国分尼寺跡について

跡はいつ頃の時期なのであろうか疑問が湧いてくる。

中門跡の規模は地業下端で南北長約12m(40尺)で、既報の松島栄治の推定と一致する。この規模は史跡、整備調査の上野国分僧寺南大門跡の基壇最下面の南北長は9.0mであり、尼寺跡の中門規模は僧寺南大門より大きい。

南大門跡は、遺構近しを思わせる状況と、東西走行の溝跡があり、その南端より数値を求めた。

#### おわりに

本書の作成にあたり、県内の先輩を含め、多くの皆様から教示をいただき、最終場合においては印刷所および隣接整理班であった小林山台遺跡班に多大な協力をいただきました。それについて編者として厚くお礼の気持を持つとともに、本書が、将来にわたり広く活用されることを望みます。